女子文壇

第二巻第五號

明治三十九年四月一日發行（每月一回發行）
明治三十七年十二月十九日
第三種郵便物認可



毎號皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第二卷第五號目次

本號 **石版極彩色口繪** ―三宅克己先生 **水彩畫**（上野不忍池畔の櫻）○鏑木清方先生 **繪はがき**（佐保姫）

◉東北凶作地 義捐金募集報告（到着順掲出）

一金五圓 下野 少女
一金參拾錢 京橋區船松町 宍倉杵子
一金五拾錢 埼玉縣浦和町 郡磨子
一金五拾錢 越後國長岡町 星野かつ子
一金參拾錢 越中國西蠣波郡東蟹谷村平櫻 酒井常子
一金參拾錢 埼玉縣入間郡川越高等小學校四年生 小林ちよ子
一金參拾錢 仝 坂本つれ子
一金參拾錢 仝 長澤せつ子
一金貳圓 愛知縣枇杷島町淺野荒助方 蝶子
一金貳拾錢 岐阜縣上有知町 梅村いく子
一金貳拾錢 備後 畑氏
一金五拾錢 羽後國本莊大町 佐々木あやの
一金壹圓 大阪府 B子
一金壹圓 横濱市南吉田町 くがく生
一金拾五錢 和歌山縣那賀郡王子村名手西野三八 野口樂子
一金拾五錢 但馬國美方郡村岡町第七十七 今井照枝
一金貳拾錢 岐阜縣安八郡牧村馬ノ瀬 木村淺子
一金壹圓 相模國小田原新玉町一 伊藤富久子
一金壹圓 芝區金杉一ノ二三 頴川とき子
一金參拾錢 群馬縣群馬郡箕輪村 杉村照子
一金五拾錢 神田區西小川町二丁目七番地 大澤隆子

一金五拾錢 信濃國 節子
一金五拾錢 越後國中頸城郡あら井新道 長江倚子
一金五拾錢 茨城縣眞壁町 鹿村喜知子
一金五拾錢 茨城縣眞壁町大森方 大塚優子
一金貳拾錢 栃木縣 柴田淸香
一金壹圓 芝區宇田川町十六番地 山本はる子
一金五拾錢 飛彈國吉城郡阿曾布村粉河 三井房子
一金壹圓 下關市うら町長野重治方 長野かれ子
一金五拾錢 青森縣黑石町 跡地重子
一金壹圓 山口縣阿武郡 岡千代子
一金貳拾五錢 下野 十八公子
一金貳拾五錢 仝 汀舟
一金四圓 下谷 秋津子
一金貳拾錢 紀伊國那賀郡粉河町 逸木もりゑ
一金貳拾錢 信濃國小諸町 一少女
一金五拾錢 福岡縣嘉穗郡鎭西村 小山賀野子
一金五拾錢 仝 小山えき子
一金五拾錢 弘前市鍛冶屋町三〇 崎野松江子
一金拾錢 伊豫溫泉 得能湯月
一金五拾錢 出雲 木村淸子
一金四拾錢 盛岡市大淸水小路 江刺家つや子

一金壹圓 下野國上都賀郡落合村 高村たま子
一金貳拾錢 長門國豐浦郡豐西中村安岡 村田節子
一金參拾錢 長野縣小縣郡東原村 坂口隆子
一金五拾錢 北海道樺戸月形村 高橋とく子
一金五拾錢 仝 小鹽きよ子
一金壹圓 濱田町 安達久子
一金五拾錢 長崎 愛子
一金貳拾錢 山口縣美禰郡四郎ヶ原 村田しゆん子
一金五拾錢 長崎縣南高來郡島原新町 山崎正代
一金五拾錢 仝 山崎松子
一金貳圓 青森縣弘前市 愛讀者の一部
一金參拾錢 周防國佐波郡周南佐加太利の東 岡本園子
一金五拾錢 阿波國 無名氏
一金參拾錢 京都病院內 松田さだ子
一金壹圓貳拾錢 備中國金浦校內 三名ヨリ
一金壹圓 麻布區 某女
一金參圓 靜岡縣榛原郡金谷町 酒井よし子
一金參拾五錢 石見國濱田町 俵智枝子
一金壹圓 肥前國北松浦郡小佐々村 松永貴美子

合計金四拾四圓拾五錢

一金拾五圓八拾五錢也 女子文壇社主野口竹次郎

二口合計金六拾圓也

右報告候也

四月一日 女子文壇社

東京

春陽堂新刊

繪師の戀

廣津柳浪著　河村清雄装画　鏑木清方口繪

柳浪氏が特得の筆は本編を描くに於て眞に絢爛の妙を極む其戀や金露玉漿其情や斷腸悲切蓋し近來の一大雄篇也



實價金六拾五錢　郵税金八錢

文車

村井弦齋著

文車の一巻、小説あり、随筆あり、陸離たる弦齋氏の筆は、其行く所に馳せて可ならざるべし、層々たる短編愈よ出で、愈よ奇に、粲たる光彩夜光の璧と爭ふべく、爛たる紫電直ちに心を刺す名工の匕首の如し、奔放の氣却て其長編に求むべからざる妙あらむ。▲實價三十五錢郵税四錢▼

發兌元　東京日本橋通四丁目角　春陽堂

上野不忍池畔の櫻



小島工藝石印

三宅克己先生筆

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

大日本女學會

●本會が十年來女學の通信教授に盡せる事畏くも　皇后宮の　懿聞に達し特に御歌下賜の恩命を蒙りたり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す會則希望者は葉書又は電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢束修四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎭子）○教育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歴史（大森金五郎）○萬國歴史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事教育（三輪田眞佐子）○家事經濟（後閑菊野子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖書（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）○附錄機關雜誌なでして

●簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢束修貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎭子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歴史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭教育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖書（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

目下五巻迄發行　入會の好時機

東京市麹町區下二番町三七　**大日本女學會**　電話番町一三三〇

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

毎號東宮殿下賜上覽

青年筆戰場

▲一號附錄 大元帥陛下御愛馬 大好評增刷出來

▲四號附錄 東宮殿下最近御尊影 額縁版入

秀才文壇

▲低廉無比▼ 毎月二回發兌（一日十五日） 石版極彩色畫繪葉書寫眞入

價 一冊拾錢 六冊五十七錢 十二冊一圓八錢 送無料

▲類書中王▼

◎第六卷七號 四月一日發行

◎第六卷八號 四月十五日發行

◎六卷九號臨時增刊 錦心繡膓 四月二十日發行

發兌元 東京市神田旅籠町一丁目廿三番地 文光堂

賣捌○東京堂、東海堂、北隆館、良明堂、上田屋

▲四月三十日 大觀兵式紀念額面▼

北蓮藏君油畫 **大觀兵式圖**

石版極彩色十五遍 密刷

縱一尺一寸橫一尺五寸 紀念廉價金五錢 送料二錢

● **大觀兵式圖** は昨年秀才文壇第一號附錄として發行せし美術的油畫と同一にして 大元帥陛下が御馬上にて凱旋軍の大觀兵式を行はせらるゝ圖なり

● **大觀兵式圖** は凱旋軍、軍人遺族、學校生徒、其他忠君愛國の諸君へ弘く紀念の爲めに頒たんとて特に三間石版所へ依賴して增刷せし額面圖なり

● **大觀兵式圖** は北畫伯が宮內省主馬寮に就て委しく調べたる上執筆せられたる者なれば坊間のありふれたる石版繪と同一視なき樣せられたき者也

● **大觀兵式圖** は紀念中の紀念ならんと文光堂主人が營利的でなく自費を以て印刷して定價の半額を以て頒ちて聊か微忠を表し平素の愛顧に酬る也

● **大觀兵式圖** は五千枚を限り御望の諸君に頒つ者なれば滿員後申込まるれば遺憾ながら何囘送らるゝも貴需に應じがたく候其積りにて申込まれたし

申込所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壮健全になす靈薬

胃病根治剤

從來世に胃病薬頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸剤（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味剤の如き一時おさゑムヂスカシ的舊式賣薬）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良薬あるを見ず、本剤は獨逸國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効薬を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新薬にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壮ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新薬なれば從來種々雜多の胃病薬を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本剤を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹剤重症は貳剤慢性症は參剤にて根治確證す

（薬價）壹剤四拾貳錢　貳剤八拾錢　參剤壹圓拾錢　郵券代用貳割増し

新輸入 美容料 肉體 色白新剤

本剤は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明剤にして如何程色黒き男女にても特別製貳剤を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白薬を用ひて奏効なき人は速に本剤を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓七拾錢

以上貳薬 **専賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館薬房**

月やくおろし

本剤は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本剤參剤分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレ！に流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本剤は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生的に無害なり婦人諸君安心して試薬あれ價は壹剤分七拾錢貳剤分壹圓廿錢參剤分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本剤の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似偽薬**顯はる用薬者は深く注意ありて「専賣元日新館薬房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭 根治確證 新發見薬

醫療賣薬百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病的に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新薬なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送薬す郵券代用必ず二割増の事

以上貳薬 **専賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館薬房**（電話下谷五五四六番）

每編諸大家校閱并序文

國文學專攷　小森松風先生編著

女子文學

▲正價壹冊ニ付金參拾錢　三冊前金拂込八十五錢　六冊前金壹圓六十錢○外郵稅一冊四錢宛　全部拾二冊前金に限り　金參圓　郵稅四十八錢不要

全部拾二冊

每月一冊宛發行スベシ
向一ケ年間ニ全部完結
一冊大判二百頁餘美裝
全部紙數二千五百頁以上

女子文學の發達を以て自ら任ずる本社は、茲に一大著述の發刊を企て聊か明治の女子文學界に貢獻する所あらんとす諸孃幸に愛讀の榮を賜へ。

女子文學（五月上旬出版）

第壹編

美文作法

目次　概要○美文とは何ぞ○美文の起原○散文と韻文○美文の種類（和文、漢文、雅文、俗文、譯文、和漢混淆文、雅俗折衷文、和洋折衷文、言文一致體、小說文）○美文の作法○美文の材料（讀むべき書類（名詩名作（抄錄と批評）美文改潤法○文法と假名遣○現今の美文作者○作者の文章○美文と女學雜誌○女子の美文○明治の女子文壇○美文と小說○美文の將來○結論○附錄＝古今名家美文範

本書は著者小森松風先生が、現今の女子の文學趣味を鼓吹せんの考にて女子師範、高等女學校其他各種の女學校に於て、最も困難を感ずる文章の作法を懇切に說明指導せられたるものなれば明治の女學生に取りては、實に坐右の寶典なり

☞第二編以下の目次は次號に詳告すべし☜

出版元　東京京橋大鋸町十　（電話本局六百七十番）　女子文壇社

賣捌所　東京堂、北隆館、東海堂、上田屋、良明堂

馬上の岩崎男爵夫人



誌友おもかげ（其二）



「新潟」片桐くに子君
佐藤登世子君



「秋田」黒丸登美子君
（中）松田孝子君
（左）小笠原花子君



「水戸」山田千代子君
弟　泰二君



岐阜　梅村いく子君



「奈良」箕輪京子君
（中）太田すがる子君
（左）大森宗子君

誌友おもかげ（其三）



信濃　伊藤くろ子君



常陸　小泉濱子君



「伊勢」寺尾はな子君と同兄君

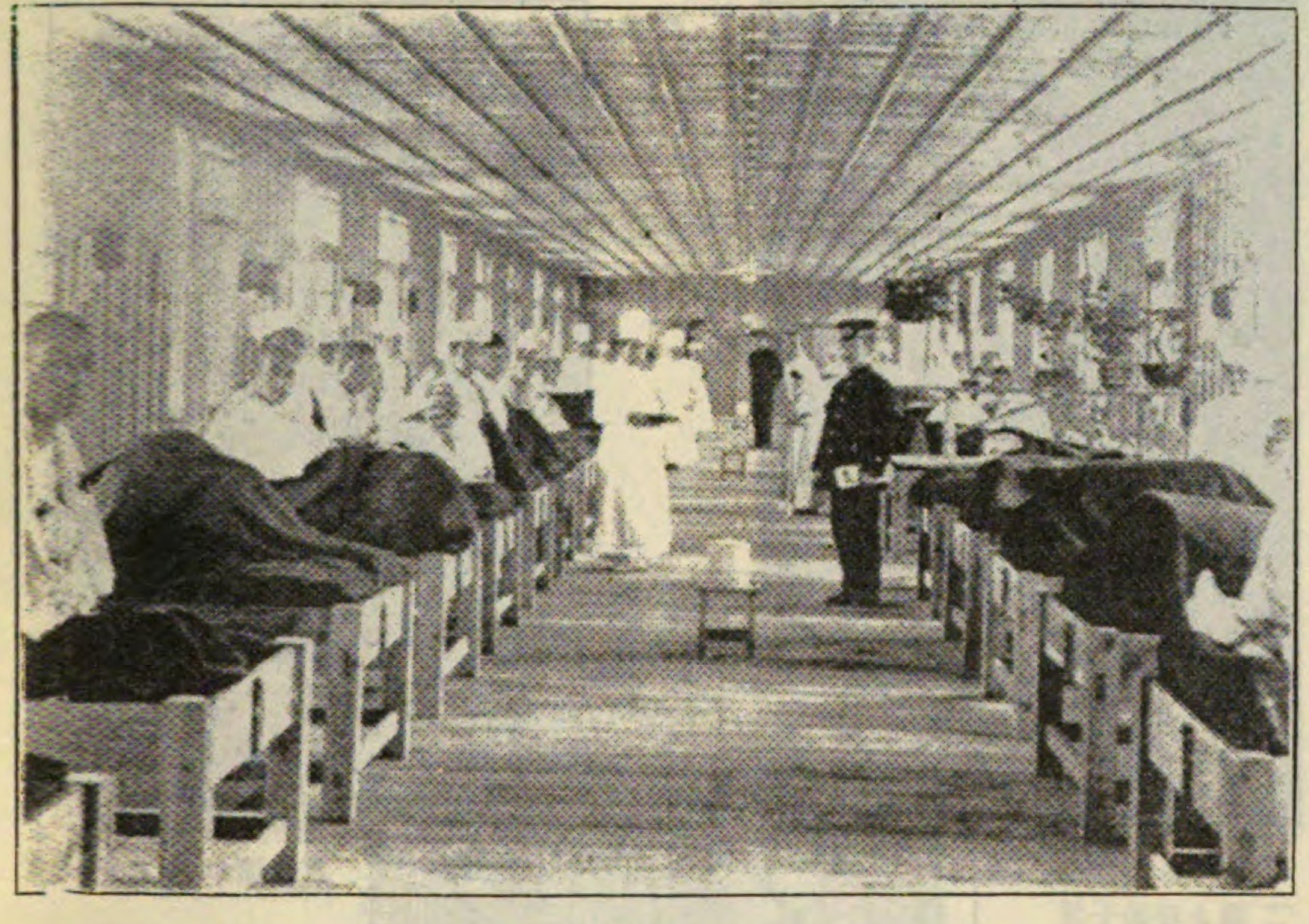


「神戸」倉重千代子君
同　静江君

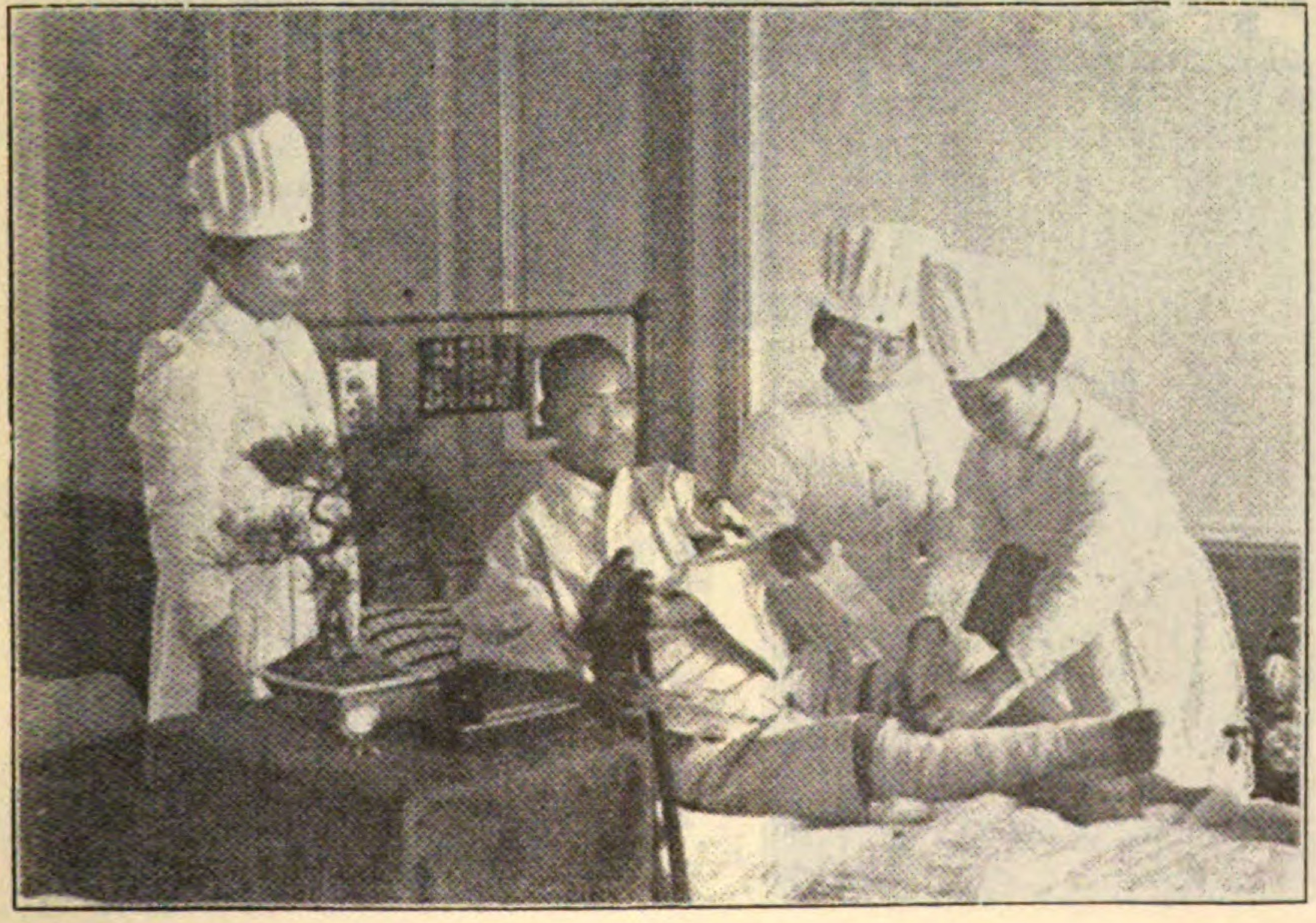


信濃　川瀬千島子君

廣島豫備病院第七分院病室（大藤敏子寄贈）



澁谷分院將校室に於ける林田糸子の繃帶（仝君寄贈）




美術造花材料

出版界空前之廉賣

日本女子大學教授 鹽井文學士
女子高等師範教授 尾上文學士
東京帝國大學講師 佐々木信綱
巖谷小波
廣津柳浪
山中古洞
先生選評

編輯局校訂

（選評諸大家寫眞肖像入）

女子文壇

懸賞文集

附錄 大家文集

全一册中判美裝
上等紙四百廿頁
廉價金廿五錢（郵税六錢 本社支辨）
（郵券代用必一割増）
（再版出來）

本書は女子文壇第一巻の懸賞傑作のみを網羅したるものなれば女子が文章を練り詩歌を學ぶに模範的作文書としては唯一の寶典たるべく殊に附錄として諸大家の作文上の心得となるべき名文を載せ修養の便に供したる無比の良書なり

出版元 東京京橋大鋸町十一 電話本局六〇七番 女子文壇社

特約賣捌（東京堂、北隆館、東海堂、上田屋、良明堂、各書店、

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

新學期開始

◎會員大募集目下入會の最好機なり　四月廿日第一號發行

▲事情があつて高等女學校に入る事が出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に一ヶ年間に高等女學校程度の敎育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾操無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いやうにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を每號附錄とします

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ敎育に充分經驗のある方のみです講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員の親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です

▲本會講義錄は右に述べし通り最も完全したものでありますが會費は極めて少額で都會一ヶ月の遊學費で優に全期を終はる事ができます。

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲每日新聞評　米國の通信敎授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評、高等女學校の全科程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義は總べて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併て有する事斯くの如きは稀也

上揭の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲本會規則書▼　端書にて申越あれば直に郵送す可し

◎東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）大日本淑女學會





女子の作家

女子は文藝の作家として、世に立ち得るや否やと云ふ問題に就いては、識者の意見を發表せられた事もあるが、記者は更に進んで、女子の作家は必ず出ると云ふ事を證言したい。つら〳〵本誌に載つて居る諸孃のお作を拜見するに、作物は稚氣であつても、文藝の人たる素質を有して居られる諸孃は少くないと見受けます。筆が廻らないとか、字を知らないとか云ふ事は、修養次第で思ふやうになります、素質の良、不良と云ふ事は根本の問題で、いくら詩的な文字を上手に使ひ、巧く名家の眞似をしても、根本の天性が文藝の人でない以上は駄目です。處が本誌を見ますと、此素質の好い孃樣が若干かあるやうです。中には男子が假面を冠りて、本誌に紛れ込んでるのもあるが、此は僅な數です、大多數は十五六才乃至二十才迄の女性が多い、今日此位な年齡の女性が僅に文藝の一端に指を染めるやうになつたのですから、此に向つて完全を望む事は不可能ですが、今後五年なり十年なりの間に、立派な女子の作家が此中から出ると云ふ事は、潜かに記者の信ずる處で、又諸孃に於ても信じて頂きたい。必ずならうと云ふ決心は、既に成功の始ですから、素質の好い諸孃は早く此決心を持つてお進みなさい。

醒

文學士　沼波瓊音

帝國圖書館の夏の晝、我は其の特別室の一隅に、窓帷越しの日光を背に浴みつゝ、數十冊の書籍を繰展げ繰展げ拔萃の筆を走らせてあり。暑しと呟くあり、溜息洩らすあり、扇使ふあり。痒きを搔くあり、これ等の音を煩しと思ふは我が倦みたる徵なり。暫く筆を差措きて汗拭ひつゝ四邊を見る。試驗の準備に惱まさるゝ者、講義の下調に苦む者、書肆に命ぜられし編纂に忙しき者、皆或物に使役せられて餘儀なく此處に讀書の人となれるなり、餘儀なしといふとは彼等の活氣無き顏色にも著からずや。窓の外は乾きたる櫻の青葉押重なりてそよともせざる日盛を、心よしと鳴頻る蟬の聲まことに時雨のやうなり。蟬は暑さを喜びて唱へるなり、遊べるなり、樂しめるなり、人は暑さを厭へるなり。そを避くる術を知れるなり、知りつゝもなほ避け得ずして此處に書讀めるなり、遊び得ざるなり、樂み得ざるなり。蟬心あらば如何にこれ等の人を嘲るならむ。我も亦その嘲らるゝ一人なるか。あらず、我はあらずと信ず、我の此處に在るは自由意志による、他に使役せられてには非ず、絢爛なる德川文學全體に渡れる或主要なる題目を捕へて其が解決に殆ど寢食をも忘れつゝあるなり、赤帝の威力いかに酷烈なるも我に於て何かあらむ。この論の完成に對する希望、唯其の希望の光をのみ直視して他を顧みざるなり。我は彼の木立に於ける蟬の如く此處にしも遊びつゝ樂みつゝあるなり、何ぞ我が高きや、もとよりこの館內我と同じき人一人も無しとは言はざれど、そは必ず極めて少數なるべし。斯る誇に勵まされて、我は更に筆取上げて材料の拾集を樂しと續けたり。

日は入りぬ。窓帷は絞られぬ。藍淺き暮天の光は紙の

上に流れぬ。今日調べむと思ひしだけは調べ終へつ、書を返し筆紙を包みて館を立出づれば、風快く衣袂を飜して、杉の梢に月こそ出てたれ。我は帽を脱りて頭を水の如き涼氣に露しつゝ、緩漫なる清水町の坂を降り來れば、浴衣姿白き男女三々五々笑ひさゞめきて不忍の方へ行くあり。あゝ不忍の蓮は今盛ならむ。我はその花のこの月夜にいかなる色に匂ふかも知り得ざるなり、その花のこの涼風にいかなる香に薫るかも知り得ざるなり、自然に煽られて湧かむとする逸興を強ひて抑へて、一分の時をも空しくせじと、能ふだけ速にこの身軀を圖書館の卓子より我家の机まで運びつゝある我よ。我が爲せる業は果して斯くすべきまで價ある大なるものなるか。我が誇は搖げり。

天井低く陋なる六疊の書齋に燈明うして息もつきあへず、材料を整理し、それ／＼に論斷を與へて、椽に坐を移して烟を吹きたるは、はや世間寢靜りて軒の風鈴のみ音清亮なる頃なり。

我果して誇るに足るか、我が業果して誇るに足るかの疑は起れり。抑學者てふ者は文壇に於ていかなる位置を占むべきものか、一歩を進めて、文藝は必ず研究を要求するものなりや、文藝界に研究家の存在の必要ありや否や、學者の貢献てふことが幾何の價をか有てる、文藝を研究して一生を送ることが果して人世の意義に適へりや否や、これ等の疑は紛として窠を侵されし群蜂の如く腦裡に亂れ狂へり。

理學者は蒸氣を研究してこれを驅使する法を發見し以て人生の幸福を增進せり。醫學者は病菌を研究してこれを滅殺する法を發見し以て人生の幸福を增進せり而して文學者は如何、文學者は文藝を研究して何事をか發見せむとする、いかに人生の幸福を增進せむとする。彼等は揚言せり。作家を指導して行路を誤らざらしむと。玩賞家に示教して趣味を向上せしむと。古今の作物を調査して國家靈界の變遷發達を明にすと。

然れども我は今思ふ。作家をば作家ならざる人が指導するは斷じて不可能の事に屬す。角力取る力士に對して見物の角通家が助言するにも比すべきか。作家は

その靈妙なる眼に映じたる儘に描くべし、その精緻にして彈力ある心に感じたる儘に筆を行るべし、さる眼をもさる心をも有せざる傍人が彼に向つて、斯く見るべし斯く考ふべし、といふとも彼に於て何かあらむ。作家を指導して行路を誤らざらしむとの揚言は無意味なり。

人は趣味に於て絕對の自由を有せざるべからず。醉を欲する者は飽くまで醉ふべし、甘を嗜む者は飽くまで甘を嗜むべし。前者に甘を說くも無用なり、後者に醉を說くも無用なり。況んや前者に醉にいかなる趣あるかを講じ、後者に甘にいかなる趣あるかを講ずるは無用の極なり、愚の極なり。單純の詩美を好む者に複雜の詩美を喋々するも無用なり、月の美しさを直感して、美しき理由を探るを要せざる一般の人に對して月夜の美感を說明するも無用なり。趣味の進路は上に向くも下に向くも右に向くも左に向くも其箇人々々の隨意たるべし。傍人の容喙何の益あつて、之に聽くを要せむ。御家騷動を酷愛する者、飽かずば一生これのみを玩んで戀愛小說を顧みずとも何の不可かあらむ。嗜好に理由無し、理由あつての嗜好は眞の嗜好に非ず、人の嗜好に理由あらしめむとするは頓てその嗜好を妨ぐる者なり、趣味を破壞する者なり。無用のみに留まらずして有害の行爲なり。玩賞家に示敎して趣味を向上せしむとの揚言は無意味なり。

若しそれ靈界の變遷發達其他の如き事實の調査は、知の要求を滿足せしむるのみ。情の世界たる文藝界の境域外の事たり。又過去斯るが故に現在斯くせよといふ如き勸告は、文藝の世界に於ては更に反響なかるべし。

夫れ文藝界の要求する所はたゞ〱作物なり、興ある作物なり、これ人間に對しての大なる慰藉なり。されば專ら作家をのみ必要とするなり、作家こそ人生の幸福を增進する務を盡す者なれ。文界の人悉く作家たるべし、一人の學者を要せざるなり。學者は寧ろ幸福の敵なり。

我は斯く考へ去り考へ來りて、我がこの日頃熱中せ

る事業は如何と自省せり。竟の誇の耻かしや。我は實にての文藝界外の事に從ひ居たるなり。情の爲にあらて知の爲に心血を注ぎ居たるなり。情に生活せむ趣味に生活せむと切に思ひし我が、學者てふ、文藝界に籍を置く價無き輩の爲に、知らず〳〵導かれて、花芳しき文藝の園に遠ざからむとしつるぞや、危し、危し、既に東山に行きつかむとする踵を旋して、いざ西山へ走せむ。研めずして歌はむ。論ぜずして作らむ。感想得むが爲にぞ書籍を讀まむ。刺戟得むが爲にぞ自然を愛でむ。

金剛不壞の決意に勇猛心むら〳〵と起りつ。夜は夏ならぬ大空に月滴るばかり淸く照りて、垣の朝顏の明日開く莟の數を數へつべし。

△御機嫌よう

犬が『ワン、ワン』
猫が『ニャー、ニャー』
これみな御機嫌ようと
いふ言葉。
それを嬢ちやんのお母さんは
エヽ喧ましい打てといふ。

家庭詩二篇

溝口白羊

紅梅

歌思ふと文机に
身を寄せて筆とれど
しづまらぬ我が胸の
底ひより騒ぎつゝ

若き身の今さらに
人の子の姉として
呼ばれんが耻かしさ
幼くも頰を染めぬ

男にあらば繪を敎へ
さながらの天地を
七尺の絹の上に
美しう描かしめん

女にしあらば、我が歌を
珠奔る緒に乘せて
春鶯の囀りと
花の夜に歌はせん

いづれをば分き兼ぬる
時の間のもどかしく
庭面に下り立ちて
竹柏園を逍遙へば

夕あかり淡う照る
離れ屋の窓おほひ
華やかに漏るゝ灯は
春の夜のさまに似て

うつくしき御子ぞと
產室今騷やぐや
黃昏の夢のうちに
紅梅は咲きにけり

（フランセエ）

四季の歌

長きみ冬の睡眠より
森羅萬象覺めて新らしき
花の香や、葉の色や
地は綠の衣つけて

和毛輝く天つ日に
喜悅滿ちし母鳥は
愛しの雛を育てんと
急ぎてつくる己が家。

悒鬱き小屋を出されて
花美しき野に遊ぶ
羊の胸や春若う
いさぎよき血の湧立ちて

人も天地のよろこびに
誘はれたる浮心
新らしき世に蘇へる
「戀」も「力」も勇むかな

青葉若葉の時過ぎて
勞働者ぞ惱むなる
眞夏の野面に來て見れば
枝もたわゝに生れる實や

夕日を受けて美しく
黄金の色に輝きつ
つとむる人の報酬にと
甘き生命を與へたり

あゝ又秋を說くなかれ
地も淋しき冬の日の
光は悲しし世をば泣く
寡婦の軒を照らしつゝ

（サバチエ）

國文評釋

文學士 中内蝶二

土佐日記（一）

（解題）土佐日記は、紀貫之の著なり。貫之は望行の子にて、書を能くし、和歌の道にはわけて秀でたりき。延喜中、御書所預となり、越前權少掾、內膳、典膳、少內記を歷、大內記に轉じ、從五位下に敍せられ、加賀美濃介となりしが、延長中大監物右京亮に拜せられ、土佐守となり、承平中任滿ちて京師に歸りぬ。天慶中、玄蕃守となり、從五位上に進み、木工權頭に遷り、從四位下に敍せられ、同九年に卒す。初め疾を得て、自から起たざるを知るや、歌を作りて、源公忠に寄せて曰く『手にむすぶ水にやどれる月影の有るか無きかの世にこそありけれ』と、卒するに及びて、公忠もまた、歌を作りて之を悼みぬ。嘗て姪友則及び

凡河内躬恒、壬生忠岑と、勅を奉じて古今和歌集を撰し、自から序を作りて上りしに、朝廷特旨を以て貫之の歌一百首を其撰に入れにき。又萬葉集鈔五卷を撰し、後また勅を奉じて、新撰和歌集を撰し、書成りて未だ上らざる前に、帝の崩御に會ひしかば、序を作りて時に崩御に及ばざるを憾む。その辭まことに哀切をきはめ、鬼神をして哭かしむるの力あり。

土佐日記は即ち貫之が、土佐守の任滿ちて、京師に歸る時の旅行日記にして、時代より云へば、竹取物語、伊勢物語よりは、少しく後れて出てたるものなれど、紀行文の最も古きものなり。其大體は、貫之が土佐守にてありたる間に、最愛の娘を失ひ悲しみに堪へざることゝ、船中風波のさはり多く、海賊のおそれある狀とを、同船したる從者の女が、滑稽まじりに書きたるやうにしるしたるものにて、文字上に毫も苦心經營の痕なく、その輕妙なること、まことに古今の間に獨歩すと稱すべきなり。

男もすといふ、日記といふものを、女もして見むとてするなり。○

（釋義）　男も云々　男も漢文にて書くと云ふ日記と云ふものを、女も假字文にて書き試みやうと思ひてするなりとの意。此日記は、解題にも述べ置きたる如く貫之自から書きたるものなれど、當時の風習として、男は主に漢文のみを用ひ、假字文は婦人の間に用ひられたれば、わざと女に託して書き出てたるなり。

それの年、十二月の廿日あまり一日の、戌の時に門出す。そのよし、いさゝか物にかきつく。

（釋義）　それの年云々　それの年と云へど、實は承平四年なり。女に託して、書きたる人の名をさへあらはさねば、わざと、それの年と云ひたるべし○十二月　また師走とも書く、年の暮の月なり○廿日あまり一日　廿一日と云ふと同じ義にて、斯か

る書き振は、我國文によく見るところなり○戌の時　初更にて今の午後八時頃なり○門出す　國司の館を立出てたるなり○そのよし云々　その譯をあら〳〵書きしるすとなり。以上この日記のはしがきとす。

ある人、あがたの四とせ五年はてゝ、例のことゞも皆しをへて、解由など取りて、住むたちより出てゝ、舟に乗るべき處へわたる。これかれ、知るしらぬおくりす。年頃よくぐしつる人々なむ、わかれがたく思ひて、しきりに、とかくして、のゝしるうちに夜ふけぬ。

《釋義》　ある人　實は貫之みづからを云へるなり○あがたの四とせ云々　あがたは縣の義にて、國司の任國の年限滿四年をつとめて、五年目に任果てゝ○例のことゞも　後任の國司へ、國務をゆづり、諸記錄など悉く引渡し濟みてとなり○解由など取りて　解由は、御倉の公物を滯りなく渡して、後任の國司より受取る證文、即ち受取書なり○住むたちより云々　今まで住みたる國司の館より立ち出てゝ○舟に乗るべき云々　舟に乗るべき川の岸へ移り行く○これかれ云々　これかれとは、誰れも彼れもと云ふ義にて土佐にて馴染となりたる人々なり知るしらぬ云々は、知りたる人も、知らぬ人も見送りをすると云ふ意○年頃よくぐしつる云々　斯かる數多の見送り人の中にも、此國に在るうち、近く召使ひたる人々は、取りわけ別れを惜しみて、去りがたく思ひてとなり○とかくして　何やかや荷物を運びなどしてとなり○のゝしるうちに云々　ががやがや云ひて騒ぐうちに夜更けたりとなり。（未完）

コルデリア姫

水野環一

かつて昔、ブリテンの國に君臨せしリーア王はまこと愚かなる人にてありき。これを西歐東邦の國々に求めて、愚昧なる君も少からざれど、リーアの如きは誠にその著しきものか、自らなせる禍の遂に己れ悲劇中

の人となりしぞ是非なけれ。

王は齢、已に老いたり。身は浮世の事どもいとわづらはしく思ふものから、今のうちによき世繼を定めて、よろづの政事をゆだね、己れは春のたはむれ秋のうたげに老後の餘生を送らんものと、まづその三人の皇女召して、いづれか父王を想ふ情の深さかを試し、その申し樣の如何によりて、各その領地を分け呉れんものとさだめぬ。

ゴネリルはその長女、こはオルバニ公に嫁ぎ、次はリーガン、こはコーンウォール公に嫁ぎ、季なるはコルデリア、姫はいまだ年ごろもいと若く、顏容、心ばへもいと美はしきものから、諸方の雅びの若人ども、われも〱とその歡心を求め、中にも佛蘭西王とバーガンディ侯は、最もふかき戀をかけぬ。

父王の側近く進みたるゴネリル、言葉美はしく『エ、妾、父君をうやまひ愛し奉るはなか〱に言葉にはつくされませぬそれは私の兩の眼一ッしかない生命、身の自由にも猶まさりて』眼に諂ひの笑たゝえて、殊勝らしくも申しのぶるに、愚かなるリーア王『殊勝じや、御前がたの心がけて朕も安心至極、國土の三分の一を汝に遣はす』

次女リーガン、これも姉にをさ〱劣るまじき口上手の『イエ〱妾とてどうして姉上に劣りませうぞ、姉上の言葉も猶足らぬやうに思ひますする』リーヤ王又この魔女性にもまどはかされて、同じく三分の一の國土を與へぬ。

最後に季の娘、コルデリア姫はわきて父王のいつくしみ深き皇女なれば、いかでやさしき申しぶりを聞かばやとリーアは待ち望みつゝありき。

『コルデリアはどうじやナ』

『存じませぬ』

『知らぬじや解らぬ、何とか返事をなされよ』

『全く存じませぬ』

コルデリアは高潔なる姫なりき。事々しう口にさへづるの醜なるを知りぬ。

『存ぜぬとな』

リーアは氣はひ少し荒々し。

『父君、まことわきまへがたき御たづね、子が親を愛しまつるは當然の義、何とこと〱しうあやなして申し上ぐる必要が御座りませうぞ、妾には姉上がたの如く言葉もてとやかくとうはべの諂ひ、國土を戴かうなど云ふいやしき心はつゆ程も……』

『な、何と申す、コルデリア、親を親とも思はぬこの不孝もの奴が、やい、根性の腐つたる姫御かな、あまりぐづぐづ云ふと只は置かぬぞ』

リーヤ王は烈火の如く怒りて白髪冠をつき斬捨ちにもせんずる勢もて立ち上がらんとす。

このたゞならぬ有様に進み出でたる誠忠の侍臣ケント伯。

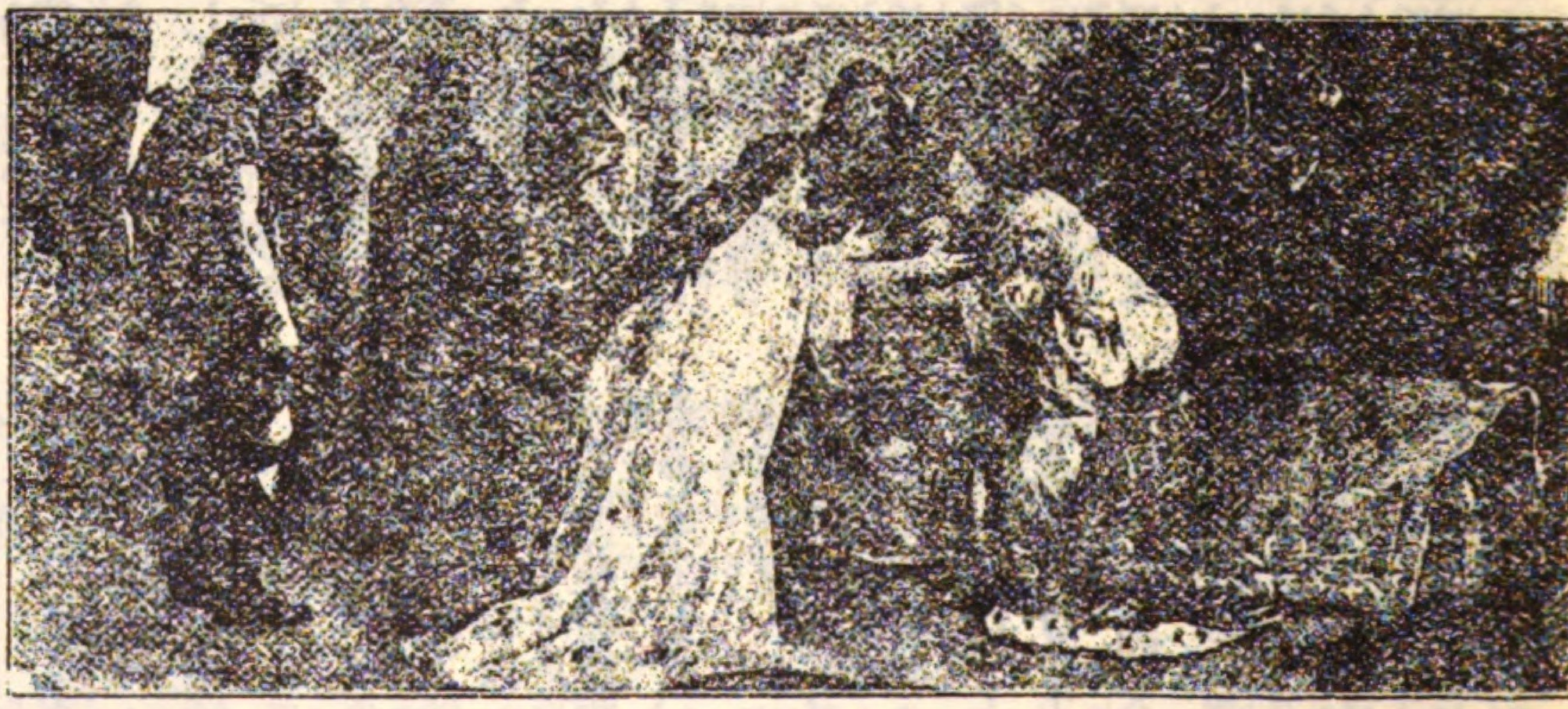
『しばらく、陛下、お靜かに〳〵』

『何に、誰じや、ケントか』

『陛下、お行爲がお荒うございまするぞ。コルデリア姫樣、誠にかぎりなき美はしき御心ばへ、陛下、お心得違ひてござりませうぞ!』

ケント伯は身を挺てゝ王とコルデリア姫との間をへだてぬ。飽く迄、暗愚のリーア王、憤怒の焰に身をもがき

『何をケント、その方が分じやない、退れ〳〵、……無禮を働くと用捨なく斬捨に致すぞ』



＊　＊　＊　＊

まことコルデリアはやさしき姫なりき。しかもその心根や白梅の凛として風霜に屈せざるが如く雄々しきものありき。

その場はそれにてケントが忠義にておさまりしが、父王の怒りはなか〳〵に解けず、コルデリアには國土片塊も與へず、これに反してコルデリアに配し國土は長女、次女が家に分ち與へ、二女及びその夫等は金鞍綠衣、燦然として時めき、コルデリアは獨り孤影悄然として落魄のすがた、長女及び次女はあのざまよとあざ笑ひぬ。

しかも姫は決して悔ゐざりき。

父王はすみやかにコルデリアを宮殿より出さんと思ひ、さきの求婚のねがひ切なりし、バーガンディ侯と佛蘭西王とを呼び召して、その意をうかがふ、バーガンディ侯はもと陋劣の性、初めは黃金と色香とに迷ふいやしき情より

コルデリアを戀ひしも、今姫が父王の怒りにふれて、持參物の一つもなきに忽ち慾ふかき心の戀もさめて、ためらひしが、情ふかきフランス王はいや〳〵女の尊きはその心ばへにこそ、さきつ頃の雄々しき姫が擧動いと朕が意に副ふものなれ、ます〳〵妃に懇望しけるに、コルデリアも處女ごゝろの佛蘭西王がやさしき好意のそゞろ懐かしう、こゝに結婚の約整ふて二人は共共遠くフランスの國に渡る、去るにのぞみ、長女ゴネリル、次女リーガンに呉々老いたる父王を慈しむやう懇ろに頼みつるに『何にね、そんな、他人の事は入らぬ御世話よ、貴女はね、自分の殿御を大切にするが可い』ゴネリル、リーガンはにく〳〵しげに云ひ放ちぬ。

かくてリーアはやさしきコルデリアを追ひ拂ひ、忠實なるケント伯も王があまりの亂らなる擧動に宮殿を下り、王は愚なる心の悲しさ、ひたすらに言葉巧みなる姉二人ばかりたのみしが、其のうちに恐ろしき劒を藏すなる魔女性のやがては衰へたる老父主を邪魔者にあしらひ、己れ等は沒徳の行狀も多かりける。

惡業千里のたとへに、みな人、この長女、次女がうらはら返したるあさましきわざに、怨嗟痛罵の聲しきりに、人心多く、佛蘭西なるコルデリア姫の居まさばと戀ひ慕ひしがかく迄獰猛の心ふかき二人は、にくき妹よと、はては軍隊をさしむけて、妹が嫁げる宮城を圍み、こゝに神々しきコルデリア姫は、天運拙く、はかなき最後を遂げぬ。

かくてリーアも今を昔にと思へども逝きにし水はまた歸らず、おのが心の愚かなりしを悔ゆる思ひの痛恨煩悶、やがては狂亂の死を遂げぬ。

＊　＊　＊　＊

こは沙翁悲劇『リーア王』のゑがく所、リーアは暗愚なる王として、ケント伯は忠義一邊の硬骨の臣としてゑがかれ、ゴネリル、及びリーガンはあさましき心根の女性、コルデリアは崇高の女性としてゑがかれぬ。美はしき谷間の姫百合のあはれはかなくあらしに散りうせぬるは、これ作者詩聖の最も同情をよするところ。人も知る『キング、リーア』は沙翁が後年の作（千六百〇五年）四大悲劇の一、性格、暗黒、運命、生死、情緒、醜美のいろ、參差交錯して誠に悽壯を極む。この作につきてのくはしき考證、叙述は沙翁研究のふかきに入ればはぶきつ。只われは讀者諸子のコルデリア姫に學ぶ所あれといのるのみ。

こゝに挿めるは諸子も知り給はむ、さきつころ六十

餘嵗にて身まかり、世界の上下を通じて藝術界の明星を失ひたるを慟哭せしめたる英國の名優故サア、アービングがリーア王に扮し、おなじく英國の女優ミッセス、テリーがコルデリアに扮して、演じて大喝采を博したるリーア王劇の舞臺面なり。（をはり）

水繪の友（四）

かつみ

（高子の寫生畫）

『御母樣折角ですが、小金井行は此次の日曜日に爲て頂戴な。妾今日實はね、花野さんの御宅へ伺ふ御約束を爲たのですから。』

『何ですお前さん、又花野さんの御宅へ今日も上るのかえ。此前のお休にも彼樣に長く御邪魔爲て、夫れは如彼云ふ方の御宅だから、幾何上つても決して止めも何うも爲やしませんが、夫れでも先樣で何んなに煩か知れやしませんよ。』

『アラお母樣。そんなことを被仰つて大丈夫ですわ。今日は伺つて花野さんの御書き遊した御繪を拜見爲るのです。夫れにね、お母樣花野さんは學校も成蹟が善くつていらつしやるが御繪が大層お上手なのですよ。この前の御休の日ね、彼の日は種々西洋の畫家の御話を伺つたので御座いましたが、御繪の方の事も中々能く御存知でいらつしやるの、本統にお母樣花野さんは感心な方ですね。』

『オヤ左樣かい。お前の御友達も澤山ありますが、彼の樣な方は決して二人とありや爲ませむよ、妾もお前が花野さんの樣な御友達とさへ御交際を爲て居れば、末々何時までも安心ですよ。ダガお前そんなに上つて本統に御邪魔には爲りませむかえ。』

『夫はお母樣安心なさつて頂戴よ、最早昨日學校の歸りに今日上る御約束を爲たのですから。又待て被爲入ても失禮ですからネエ。御母樣上つても可いでしやう。』

『夫れならば御邪魔にならない樣に、氣を付けて御出なさい。さうして餘り又遲くならない樣に御歸りなさいよ。』

この二人の問答は、これ黒神艶子とその母との對話なること、更めて說明爲るまでも無かるべし。

艶子は今日、高子が描きたる寫生書及び其スケッチブックを見る可く、高子を訪れる約ありしが爲め、折角母の小金井觀櫻の勸めを斷りたるなり。艶子は最早母の許を得たれば、喜び勇みツヒ二三日前に新に買ひ求めたる鴇色のリボンを早く挿し、滿面微笑を湛へて我家を出て行きしなり。

艶子の訪問は花野家に取りては、近來珍らしきことにもあらざれば、家族の人々も皆黒神さん／＼と、宛も同じ家族の者の如く、少しも遠慮隔無きに至れるなり。この日は高子も己が製作を親しき友に示すべく、彼是とその準備に忙しかりしが、艶子の來るを今か今かと待ち佗び居たるなり。

暫く爲る內、艶子漸く來りければ、高子は自から玄關に出迎え、

『サア黒神さんどうぞ此方へ。妾今日は何う云ふ譯ですか、被爲入るのを大變待つて居りましたよ。又急に御用事でも出來て、御差支があるのでは無からうかと案じて居つたので御座いますよ。夫でもマー好く被爲入たのねえ。』

『花野さん。實は今日母が小金井に櫻を觀に伴れてつて遣ると申して與れましたが、何んだか夫れも氣が進まなかつたものですから、終々此方へ上つたので御座いますわ。』

『あれ黒神さん、左樣なことなさつても宜しいのですか。折角お母樣が左樣仰つたのならば、其方に御出になれば宜敷御座いましたに。ダガマア貴女本統に善く來てくださいましたね。昨日の御約束も御座いますから妾色々書た繪を揃へて置きましたよ。マア此方へ御出で遊ばせ。』と高子は艶子を己が居室に導きたるなり

高子の居室は僅に四疊半なれど、南方の日當好き室にて、壁には樣々なる好の額を以て充され書棚の上にはヴヰナスの半身像など飾りありて、如何にも心あるものゝ居室たる事、一見疑ふ可くもあらざるなり。

『黒神さん今日もお緩り爲すつて宜しいのてしやう。

ダガ何から御覧に入れましやう。貴女笑つてはいやてすよ。これはね、妾が一番最初のスケツチなので御座います。丁度去年の五月、さうね最早一年にもなりますが、初めて先生から寫生の御許が出て、恐々獨て目黒の方に參つたので御座います。デモ其日は繪を書かうより恥敷が先て、此所が善いと思ふて寫さうと爲ますと生憎彼方から人が來るては御座いませむか。一人彼方に行つて仕舞いましたから、最早これて可いと鉛筆を執りますと、又後の方で藪がガサ〱と申すてしやう。又人が來たのかと呆れて振向きますと、貴女鳥が枝に止つて、ガア〱と鳴いて居るては御座いませむか、夫れても終々此樣な妙な繪を描き上げたので御座いますよ、地平線が右に大層下がつて居りますから、森や家屋が皆右の方へ滑り落ちさうてしやう。今見ると可笑御座いますが、これても此時は夫れは一生懸命てあつたので御座いますよ。

次を捲つて御覽遊ばせ。これは目黒行人坂の中途から、祐天寺の森を寫したので御座いますが、夫れ遠方の森を一々細に書いたのてしやう、夫れてすから貴女少しも遠景には見へや致しませんね。これを初めて先生に御目に懸けた時、大層お笑になつて、これは宛て腐敗た栗の毛毬を見る樣だなどゝ、色々と御叱を受けたので御座いますよ。

アラ黒神さん夫れは不可ないのてすよ。未だ半成てすが、御解になりますまへ。夫れは目黒の停車場て待つて居る間に、兒守の遊むて居る後姿を寫生したので御座いますが、直に動かれたものてすから、何うしても描き上げることが出來無かつたのてす。其次は何所てしたつけ、さう〱夫は次の時田端の方へ行つた時の寫生で御座います。駒込の動坂を下りますと、流れが御座いましやう彼邊は大層佳い場所があるのてす。ても繪を書く方々は日曜日など、大勢被爲入るのてしやう、てすから妾等何時も耻敷くて、充分に寫生爲ることが出來無いので御座います。

てもね、其時の寫生は目黒の時よりも餘程解つたのですよ。その流れは、それ何時てしたか貴女と御一緒

に團子坂の菊を觀に參りまして歸りに、田端のステーションに行く時、百姓が寒さうに大根を洗つて居つたそれ彼所なのですよ。遠景に見ゆる森が、谷中天王寺の方の森で御座います。近い流れの堤に生へて居るのが榛樹で御座います。』

艶子は一々高子の說明を聞き、一入感に入りてありしが、この流の圖を遠く離しつ近く寄せつ、頻に熟視爲しつゝ、

『花野さん、マア羨敷こと、何うしたら此樣に寫せるのでしやう。斯樣に寫生なさつて置けば、唯其時の樂のみで無く、何時でも今日の樣に誰にでも見せて樂むことが出來るでは御座いませんか。さう〱左樣被仰れば、最早一昨年になりますわ。團子坂から田圃の畔道を通つて、夫れ貴女が何うなさつてもお渡れにならなかつた、彼の一本橋の懸つて居つた、彼所でしやう。さうね左樣思つて見て居ますと、丁度彼の時の事を思ひ出しますね。』

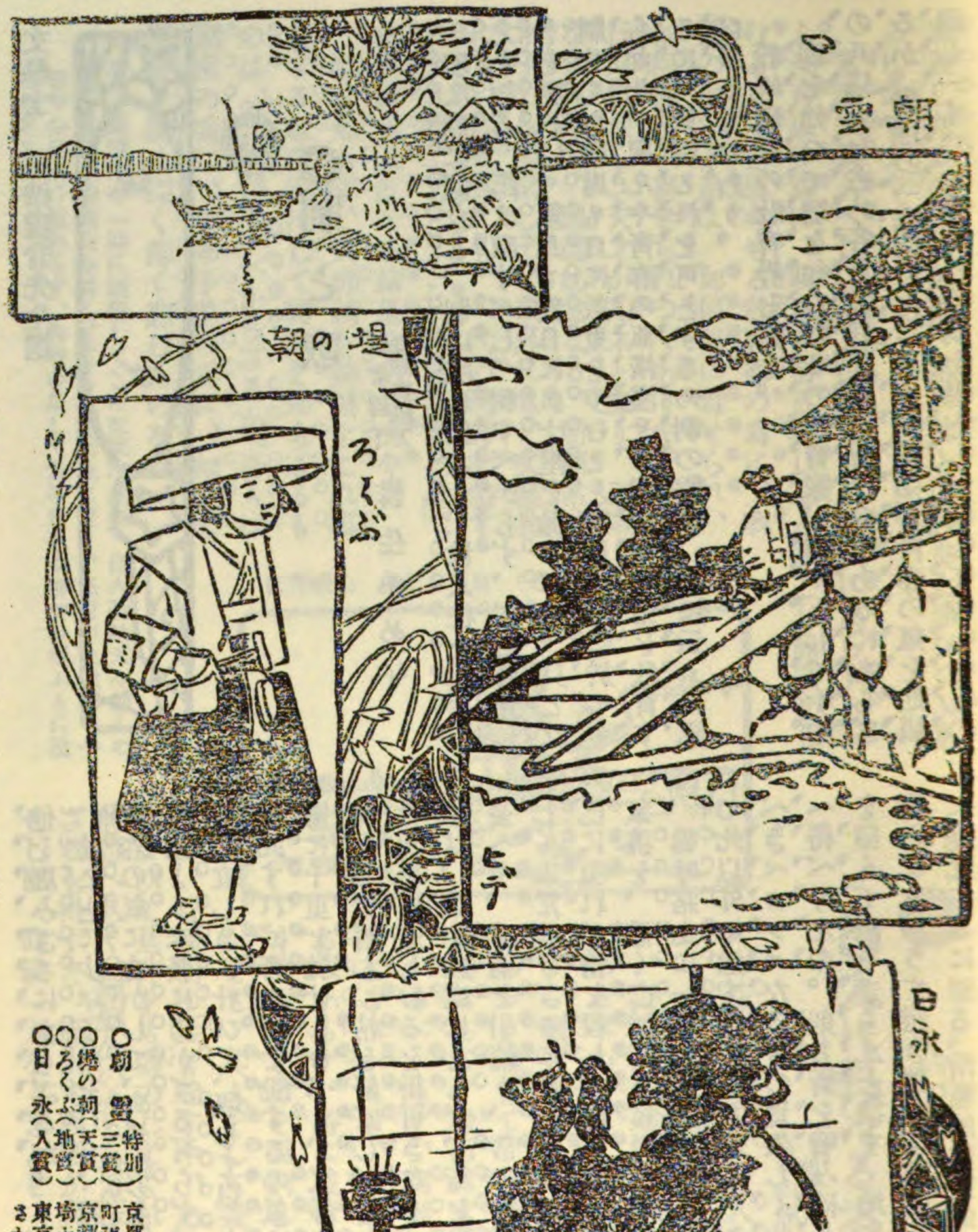
『あら黑神さん、そんな事仰らなくても、宜しいては御座いませんか。貴女本統に御人がお惡いのね。だが左樣御話になりますと、一昨年の事も何だか昨日の事の樣に思はれますね。』

二人は端無くも一枚の寫生畫によりて、過古の追懷に餘念無く玆に再び新らしき感興に入りたるなれど、これも畢竟高子が技術の餘德なるべし。

△應募圖畫に就て一言す

募集繪畫が辛ふじて地質を選むにさへ苦心しましたのが、今では每回特別賞をさへ缺かさないのは、偏に諸姉の奮勵と愛顧の致す處でしよう。更に一擧最高賞を贏ち得る事も遠い事ではありますまい。て撰者が昨年三月の本誌に述て置ました、西洋紙を用ゆる事と、畫を彩る事は幸に減じまして、殆ど少數で、淡墨で彩る位てはあるてすが、これもマア全廢に願ひたいてす。更に要點ばかり云ふと、『淡い質の日本紙に濃墨のみにて畫く事』この方が御了解に便てしよう?。もふ一つは寸法の制限です。これを無視する傾が往々ありまして、兎角過大に失しそふなのです、それは多少の自由を容れないては、自然畫が面白く見られますまい、ですから選者は決して嚴守を强ひよふとは思わない。唯これが晴れの試合てあつて、それに後れを取らないても手段が立派てないと、却て器量の落る例しがあるもので。概して今迄のは、先例が諸姉を誤らせもしたのて、賞を問ふの場合ては無論ないのです。撰者は單純に機運の最高を豫想する爲、それ丈諸姉が目覺しい未來を更に飾りたいのてあります。（古洞生）

古洞先生選　懸賞圖畫（其四）



○朝雲（特別三賞）　京都三條通白河橋上ル北裏石泉院町　張田秀子
○堤の朝（天賞）　京都西陣屋紋屋町　濱部郁公女
○ろくぶ（地賞）　埼玉縣大里郡吉岡村　小林きやう子
○日永（入賞）　東京市下谷區坂本町二ノ十九　岡野さかゑ

文學士　沼波瓊音先生選

論文

天　○制と馭

鎌倉雪下湯澤富藏方　霧生かめ子

馭は制に似たり、制は馭に似たり、世人往々にして之を誤る。馬は馭すべし、制すべからず、馭その宜しきを得れば、駑馬も猶日に數十里を馳すべし。只これ制せんか駿馬も日に數里を歩むこと難し。馬に於てすら如此、況んや青春の氣横溢せる、少年子弟を敎育するに、只制これを可とするの制の弊や、實に云ふに忍びざるものあり。

我國現今の敎育界を見よ。制を知つて馭を知らざるの敎育家、滔々として十中の八以上を占め各その好む所を行ひつゝあるにあらざるか。學理の一點張を以て、少年子弟が青春の氣を蛇蝎視し一も二も只これ抑制を事とし、而して少しもその他を顧みざるにあらざるか。

まことに少年子弟をして、思ふが儘に馳せしむれば、青春の氣にまかして、奔馬銜を脱するが如きあらん。これ素より未發に防がざる可らず、則ち常に手綱の緩急その宜しきに叶ひて、馭して以て進ましめざる可らず。如此すれば青春銜を脱するの氣は、用ひて以て思ふが儘に千里を馳せしむべく、又靜に之を止めて、長風に嘶かしむべし、情を舒ばし、智を進め、十分に天賦の性を發展せしむるを得可きなり。且も我國の所謂敎育家は、策を此處にとらず、銜を脱せんこと、只これを憂へて、手綱を引絞り、常に抑制をこれ事とす。かくして未だ駈けざるに躰已に疲れ、未だ嘶かざるに、聲已に嗄れ、情を殺し、性を矯め、少年子弟たる活動的氣魂を、悉く亡滅するに至る、悲哉。

嗚呼路上に一線を抽いて、常に此に沿うて走れ、決して此以外に逸す可らずと云ふ、これ抑壓の極、天翔るべきペガッスたるもの豈久しく此抑制不自由の境に耐へ得べけんや。則ち銜を嚙み碎き、遙に不羈獨立の境を望んで遠く走らんと欲す。此に於てか抑制變じて抑壓となり、うす暗き厩中に檻せられて、終に槽櫪の間に斃死するに至る。消極的禁制的敎育に耐へ得ずして、

爆發したる少年子弟は、常に此と同運命を味ひつゝあるにあらずや。

常識は貴ぶべし。天才は片輪なり、貴ぶに足らずと云ふ敎育家の爲に、敎育は情を殺し意と知とを發達せしむるものと思考せる敎育家の爲に、我國の少年子弟は、如何程に毒せられ、如何程迄に害せられつゝありや。見よ行末賴母しき天才が凡才となり、活氣なき狐疑的、因循姑息なる、所謂常識才子のみ跳梁して、學界にも、文藝界にも、實業界にも、一代の渇仰を値する大人物、杳としてその跡を絶ちしは、此害毒の及ぼせる結果にあらずや。恥を知らず、只抑制と抑壓をこれ事とする敎育家にして其非を知らざるものは、終に濟度すべからざるか。吾人は國家の爲に、少年子弟の爲に、如上の現象を深く深く深く悲むものなり。

（評）憂憤不平一時に逆發してこの文章を成す、烈火蓋地天を燒くの勢あり、一讀痛快を叫んで直に之を天位に置く、思想の危險なりや否やを思ふに遑あらず、作者の果して女子なりや否やを考ふるに遑あらざるなり。

片田舍　（賞外）　府下八王子寺　乙幡秀江



地

○人に長たる者

下總國多古町山蘢　芳竹女史

人に長たるものは、人を統御する才なかるべからず、人を服するに足るの德なかるべからず、好む所に偏私すべからず、人を見るの明なかるべからず、人を容るゝの量なかるべからず、膽力なかるべからず、餘り細かき事に氣がつき過ぎて、こせ〳〵すべからず、心に聰明にして、表面には多少ぼんやりしたる所なかるべからず、馬鹿にさるゝ迄に、優柔不斷なるべからず、大なるしめくゝりなからざるべからず、時に威を示さゞるべからず、よく部下の才力を識別して、然る後之に打ちまかせて、其人をして責任を帶ばしめざるべからず、昔賴朝の兵を起すや、あらゆる將士を、各別室によびて是非とも盡力してくれよと賴みしとかや、諸將思へらく、賴朝公の我を信任すると此の如し、努力せざるを得ずと、而かも賴朝が眞に心をうちあけて相談せしは、時政一人なりきとぞ、賴朝の人を用ふる事、

巧なりと云ふべし、古人も士は己れを知るものゝ爲に死すと云へり、誰れとても、信任せられ責任を負はせらるれば、必死となりて働らく者なり、人に長たるものは、此の點に注意せざるべからず、而かも信任する前に其人となりの如何を熟知せざるべからず、かく人を選び、各方面の事務は、之に打ち任せて、己れは只之を取りしまるべし、而して功あれば、之を人の手柄にすべし、己れ其功を取らむとすべからず、若し失敗あれば、たとひ己の關知せざる事なりと雖、之を我身に引受けて責を負ふべし、責を他に譲るべからず、然るに、普通の小利口なる人は、部下の失敗あれば、忽ち罪を其人に歸して、己れ知らぬ顔をなし、而して功あれば、奪うて我が有となさんとす、人の信服せざる所以なり。

（評）人に長たる資格方法を論じて餘す所無し、校長も郡長も知事も内閣總理大臣も悉くこれを服膺すべし、用語の平易なる所亦却て妙を添ふ。

人

○何を成功といふか

備中　龜山まき子

社會の進運は一日一刻も停止するものに非ず、人は生より始まり死に終るの間、常に社會の進歩に隨伴し、相倚り相助けて其生活を圓滿にせざるべからず、人ての進運に隨從する以上は必ず進運に貢獻し天地の化育を扶助するの任務つくることなし、故に吾人の任務は時間上、空間上止むの時期なし、一事成らんか他の一事は前方に待てり、世人はこの一事を了へたるのときを成功といへり、これ社會の間斷なく進歩しつゝあるを知らざる輩なり、名と利とを追ふの輩なり。

しからば所謂成功とは何ぞや、卒業證書を得たるものにあらず、高き位にあるものにあらず、高き官にあるものにあらず、巨萬の富を有せるものにあらず、人類の任務をつくしたるものなり、即ち各が天稟に從ひ、各が至誠をつくし、我れ自ら出來能ふ限りの力をいたし、社會の進歩に貢獻するにあり、この社會の進歩に向つて貢献せんがために卒業證書を得、高き官位につき、巨萬の財を積むは正しき順序なり、世人の多くは地位の高きもの財力の優れるを成功と呼び、地位の下き財力の劣れるを不成功といふ。

職業に貴卑の別なく各自各職あり、其職に向つて眞摯に盡すべきをつくし、社會の進運を助け斃れて止む、これ成功てふ美果を結びたるなり。

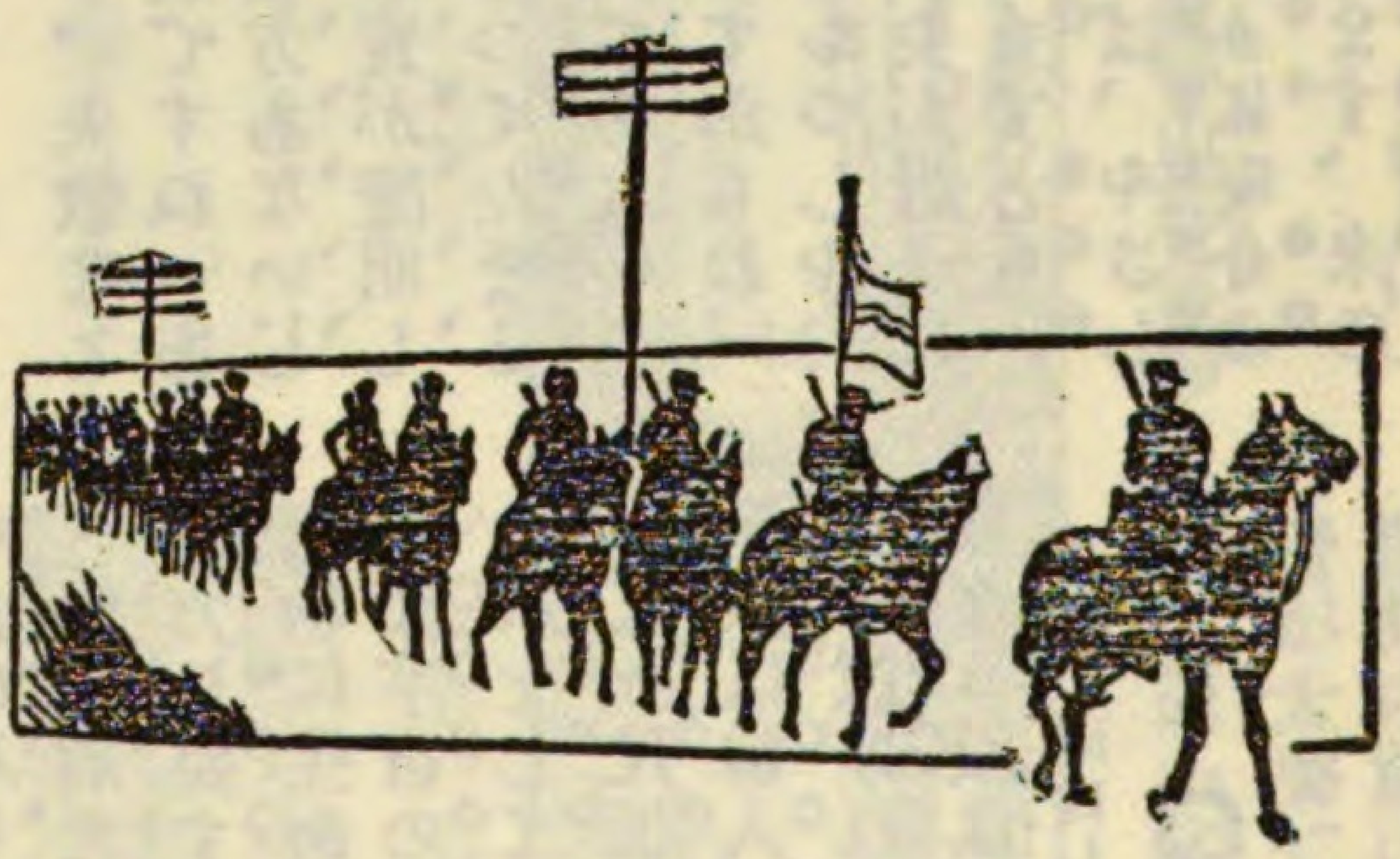
（評）眼識の高き敬服すべし、この文を熟讀せば安心を得む、慰藉を得む、希望を得む。

秀逸

○快樂

岐阜市　紫　女　史

元來人の世に、これが快樂ぞとさして云ふべき對象なし。されど性質上自然に二種に分る、曰はく耳目口腹の樂、曰はく精神的の快樂是れなり。花柳の巷に流連し銀燭甍の如く美人花の如く歌舞夜を徹して樂しむ者、身に綾羅を着け室には蘭麝を薫し醇酒に醉ひ粱肉に飽きて樂しむ者等は即ち耳目口腹の樂にして、釣を滿漣に垂れて心を塵外に置き或は明窓浄几鉛槧に從事し思を搆し想を錬り書を著はして樂しむ者等は精神的の樂しみなり、而して前者は興竭き易くして動もすれば身に害あり、人生は唯心の滿足だに得れば樂しきなり。富貴の家に生れ榮耀の中に蝶よ花よとぞだてられ、着たきものは着、食ひたきものは食ひ望月の缺けたる事もなく、何不足なく暮せる者には、富貴はさまで樂しきものにはあらざらむ。死後の天堂、極樂も此類なるべし。浮世の苦しき境遇にさまよへばこそ、天堂、極樂も惝恍せらるべけれ、いよゝ天堂に上りて、樂しき境遇に慣るれば、其樂もさまで樂しからざるべし。樂しみの樂しからざると、既に此の如し、苦の苦しからざるとも、亦之に準ず。一瓶の濁酒に、澤庵の漬物も、終日額に汗して働きたる農夫の身には、無限の美味を感ずべき也。勞苦の味を知らざる者は、反て快樂を得る工夫に苦しめども、勞苦に一日を送れるものは、別に快樂の具を用ゐず、唯夕顔棚の下に横はりたるだけにて、無上の快樂を覺ゆるなり。苦しめるが故に樂し。樂を求むるの法は他なし、自ら苦の境遇に立つこと也。必ずしも金殿玉樓を要せず、輕裘肥馬を要せず酒池肉林を要せず快樂は勞苦の結果也、勤勉の生む所也、苦勞勤勉の味を解する人は世に最も幸福にして、最も快樂多き人也。



騎兵（賞外）　神戸荒田町　辻本婦美子

（評）大なる悟なり大なる慾なり、文脈の稍〻惡しき所の聊あるを惜む。

○理　想（立ちぎゝ六）

福岡　鶴　子

「理想、女子に理想がありますか」「何です、失敬なことお言ひなさるな」「失敬なと、大した元氣ですね」「あたり前です、失敬な…」「でもないから仕方あないじやありませんか」「なぜです」「なぜッて、事實が證明してゐますもの、苟も現今の女子に理想があつてたまるものですか」「女子だつて人ですよ」「誰が人ぢやないといひました」「男子には立派な理想がありますからね」「誰からききました」「女子に理想はないとおつしやつたぢやありませんか」「誰が」「あなたがさ」「夫が男子に理想があるといふ理由になりますか」「なりますとも」「假りに、現今の女子に理想があるとすれば、やさしい姑に、よい婿…」「有難う、じや若し假りに現今の男子に理想ありとすれば…」「わかつてゐます、米の飯食つて、よい嫁もたう、でせう」「人を馬鹿にして」

（評）立ちぎゝ例もながら輕妙、この終の問答の如き實に痛快なり、なほ縱々おあとを願ふ。

○亂書八片

秋田　松田蓮村女

野徑一卉の草花を指して宇宙の命根を宿すといふ愚者先づ笑ひ賢者亦笑ふ。

弱きものは最強きものなり老人の如し小兒の如し。

一斤の石を千仭の谿に墜すことを得百歩の崖に擲つこと難し前者は一投足の勞にもあらず而して後者は滿身の力を要す。

死物に生命を賦與するものは亦死物なり。

風は宇宙の森羅萬象を震蕩攪亂す。

われをして一尺高からしめよ然らば天を衝かんわれをして一尺低からしめよ然らば將に地に入らんとす。

刑人は常人より神に遠し而して常に神を見る長安日邊より遠ければなり。

罪なき眼は美はし、罪ある眼は更にうるはし。

（評）面白し〳〵殊に余の氣に入りたるは第二節と最終節となり。

○天然の美

印旛郡　京增紫雲

山の崇、山の美、何ものゝ美かこれと對せむや。凡そ美は天然の美より美なるはなく、天然の美は山の美より美なるはなし。

されば、美の現化は山にして、山なき風景は風景と稱するに足らず。世人風景を稱すれば、必ず山水をいふ。

故に山は主にして、水はその客たり、されば、山ありて水なきも風景と稱するに耻ぢざれど、水ありて山なきは、風景と稱するに少し物足らぬ心地せらるゝ也。見よ！怒濤天を衝き、水天相接する青海原のみを目して、此れを美景なりと稱するものあらむや。そこに一青螺のありてこそ、初めて風景たるなれ。かの賴山陽が、天草洋上に於て賦せし『雲耶山耶呉耶越、水天髣髴青一髮』の句、以てこれを證するに足れる也。

（評）作者は山を酷愛するなり、其情を述べたるなり、山を水より美なりと斷定する邊の非論理めきたるも決してかまふ所に非ず、山陽の詩も面白き所に引用せられたり。



流れの朝（賞外）　神戸二ノ宮町　德永みれ子

○心づけるまゝ

近江　辰井琴子

一、標準を示せ

我等青春の女子廂髪に海老茶または古代紫の袴を以て装へば、彼等は一言の下に海老茶式部と侮辱し去る、若し銀杏返しに扱衣絞を装へば、賣春婦の風態なりと罵倒し去る、噫、何れにか歸せむ、我等も等しく御身等の子女に非ずや、修養時代に非ずや、乞ふ意地惡き姑の如く漫罵するを止めよ、而して親切に標準を示せ。

二、詩的習慣を保存せよ

節分の福は内鬼は外は四角張て論ずれば滑稽也、年長者が大聲て是を叫びつゝあるを、この習慣知らざる者が、聞かば狂人と思ふなるべし、されど記せよ福は富を意味するに非ず一切の善を意味する也、鬼は赤鬼青鬼を意味するに非ず一切の惡を意味する也、如此倫理的見地よりするも立派なる者に非ずや、しかも是を一言に福は内鬼は外と言ふに至つては、頗る無邪氣也、詩的也、よし此等の穿鑿を外にして單に之を見るも、小供は斯かる儀式を喜ぶ者也、亦以て美的敎育の一助とすべし、乞ふ勉めて詩的習慣を保存せよ。

（評）一、二、ともに同感々々。

河井醉茗先生選

新體詩

特別第三賞

○春の海

能登輪島町勝田方　以計の以佐美

例へば慈母のふところに、　めぐる情の其れのごと
潮路はるかに霞して、　春はめぐりぬ海原は
南遠き若人の、　優しきおもひてもらせて
漫々たりな濃紫。
おとなくそゝぐ春雨の、　糸より細き朝にして
白羽の鳥のみだれては、　神話おもほゆ海のいろ
八重の潮路のはる／＼と、　薄ら霞してほの見ゆる
夢より淡き島のかげ、　あゝ限りなき聲あげて
歌ひし詩人をしのびては、　其かげそゞろなづかしう
たゞよひよれる藻の花の、　ちさく白きをながめては
磯うつ波の音になりし、　男女の戀もこもるやと
手にとりてこそ嗅ぎて見ぬ。
神の領せる園のごと、　彩雲くしうたなびけば
霞はこめぬほの／＼と、　例へば若き乙女子の
胸のおもひの其れに似て、　そゞろ戀しうなづかしう
入興に詩筆をはすらすや、　色紙にかきて一連の
低きしらべをよせにしが、　其の夜の夢は龍宮の
女王の胸に通ひけん、　一日磯邊のさまよひに
暖き香の胸にしみ、　のぞみのかげをみてしより
水空遠く潮路に、　わかやきの香をたゞよはせ
幸なほこもる詩の領と、　海なづかしうなりにけり。

詩の興の多きは春の海でせう、冬、秋、夏の海は同じ海ながら何故か我等の興は春の如く動きません(醉茗)

天

○燕を迎へて

三河西加茂郡石下瀬村　野百合女

水や空なるはる／＼と、　青一刷毛の南洋に
和樂平和のふる郷や、　夢こそめぐれ島にして
噫さりとては如何なれば、　一葉の舟も浮べずに
おぼつかなげの雙羽ゆり、　八百重の潮路越えて來し
森蔭深き家にして、　綠の褥扮裝へば
戀の古巣とあくがれて、　瘠せたる旅も忘るらむ

高鳴き翔ける燕の、　翼光りて露帯びて
羽風にかをる潮の香に、　春は長閑けき海岸かな

歸る雁は陳腐になり易いが、來る燕に新しい詩想を往々見ます、之れ其一つ（評者）

（地）

○旅なる君に

神奈川縣鶴見カ四一　佐久間芳子

武藏の原に我立ちて、
目ひさし遠く眺めやる、
君が行手は丹波路や、
西のみ空の末遠く、
はえを、さめて夕雲の、
消ゆる彼方と人は云ふ。
天のとぼそをはたゝかし、
北風今や荒び出て、
秋津島國八十島の、
島根に潮はひゑぬれば、
胡地の大野にあらじとも、　君が行手や寒からん。
空ゆく翅もしあらば、　君がみ楯と身をなして、
北山おろし吹く風に、　君がみ胸は吹かせじを、

夕陽（賞外）　加賀　波佐谷唱子



天なる星にありもせば、　夕々を雲間より、
君が行手にまたゝきて、　君が睡をうかゞはん。
羽衣長き久かたの、　天馳使それならで、
地に生ひたる女にあれば、　空ゆく翅許りずとも、
ゆりし想よ宵々に、　君が夢路を守らなん、
君よ稀にはひんがしに、　一人の我をおぼし出てよ。

（人）

○春宵

本所區外手町六十一番地　田中秋子

君來ますべき宵なりと、
油を添へて灯ともしつ、
靜心なみ我居れば、
濕き夜の風渡るなり。
鎖さぬ木戸に音のして、
櫻散るなりあてやかに、
夜の鶯ふと鳴きて、
又靜けさに返るかな。
眩ゆきまでに散りしける、　花は月ともまがひつゝ、
忍びやかなるおん歩み、　君によう似ておはすかな。

艷容、岡田三郎助氏の繪にすれば（評者）

秀逸

○森の影にて

麹町　葉流子

花なる想ひ十八の、　うれひ醫すべき法ありと、
招く人ある心地して、　ふと立ち入りぬ森のかげ。
葉守の聲か憧憬か、　梢々をわたりては、
裳裾に長き衣褶れの、　音かとばかり樂ひゞく。
枝にせかるゝ太陽は縞に、　金色流す夕ぐれの、
崇きみ敎の神ひそむ、　色かとばかり目を射たり。
情に弱き人の子を、　あはれとおぼえ見上ぐれば
神韻寂びて自ら、　靈妙に醉ひぬ小さき魂。
わかき惱をそと抱く、　涙の人よ疾く來ませ、
あした榮ある森影に。　ゆふべ彩ある森影に。

此森のさゝやきは少女の耳にばかり觸れませう(醉者)

○冬の國

熊本　湖畔

雪姫あられ男すさびます、　いぶきに生れし北風の
森に林にあれし野に、　たかうどよもすをたけびに
おち戰きてひれふせば、　今をおごりの冬の國。
天に花なく地に葉なく、　まこと靜けき我世ごと
ゆき姬ゐます若やぎを、　見ませとばかり御領の
氷の鏡さゝぐれば、　愛しとのらしぬ冬の國。

氷の鏡は少しわざとらしい嫌はありますが、前半は誠に警拔、感服しました(醉者)

○みだれ緒

佐渡　玉置とみ子

涙の目して戸に倚りつ　ゆふべの雲を仰ぐとき
ちひさき胸の血は亂れ　氣は早や遠くなりにけり
針仕水仕の日もすがら　身はつかれても尙笑まん
夜半のふすまに情ある　人の御言を胸に得て
さいへおろかの性なれば　姑の君にさもらひて
一つの家を守らむは　あまりおさなき身なりけり
都の友に文得ては　その身の上を羨みつ
鄕なる母を夢みては　去年の乳房ぞ戀しかる
あゝ脊の君のみ情を　解せぬ妾にはあらねども
友をうらやみ母を戀ひ　夕戸にまたも泣かれける

近頃小說を詩にする事が流行しますが、此れなどは其雛形とも謂ふべきものでせう(醉者)

○雲の歌

茨城　小泉濱子

神の彩衣かけしごと、
色さま〴〵のあや雲や、
白晝を空に匂ふなる、
奇しき靈氣のみち〴〵て。

あけぼの星の消え行きて、
くれなゐ染むる雲の色、
天つ日かげの登るとき、
そこに希望の光あり。

夕ぐれ山に日は落ちて、
五色に韻ふくも〴〵の、
西のみ空に亂るとき、
そこに平和の影はあり。

日光をつゝむ碧雲、
月影を掩ふ白雲よ、
なれの靈あるさゝやきに、
我れ活ける詩をよまん哉。

私が一度、雲の詩をおすゝめして以來、盛んに皆さんがお作りになるのは、誠に感謝の外ありませんが、願はくば更に、群を抜いた大作に接したいと思ひます(醉茗)

○紀念の被布

京橋　會村孝子

胸の緋房の紅梅に、
春をさゝなく黃鳥か、
翼の色の鸚絹や、
霞たゞよふ振小袖。
裳裾褪してほの白う、
手にぞとる
紀念の被布。

思へば亡妹が七歲の、
「美し小姫」と老爾宜が、
祝榮えある宮詣て、
笑顏に賜びし御酒受けて、
さと頰を染めしもゝ色や。
被布姿
ふさひにしを。

薫る片頰の色はしも、
いまはた淨土に冷へはてぬ。
あゝ世に一人いとほしき、
妹が紀念と手にぞとる、
被布は昔のまゝなれど。
紅淚涌く
紀念の被布。



摘草（賞外）陸中一ノ關　阿部とみ子

一節毎に、つけたる二句は調子の上に別に功はありませんでした、形見の被布、詩題としてよろしいものを見付けました(醉茗)

○冬野に立ちて

久留米　杉山美津代

冬野に立ちて石抱けば、　生あるものは地に臥して
遠きに迫る夕闇の、　大生禪寺は包まれぬ
呼べば闇に聲はして、　臣瀬の谷川石黒く
かけたる橋の欄干に、　繋ぎし馬は解かれたり
十里を走る金風に、　水に動くは雲の影
屏風の山は雪とけて、　凹に沈む夕陽の
力は弱く寂寥の、　山にも野にも默したり

冬野のさびしさ、先づあらはれて居ます（醉茗）

○詩人ありや

金澤　大地波子

美し國よと天降ります　春姫の仰を受けたるか
春風さゝと吹き來り　眠れるものをさましたり。
紫句ふすみれ野に　天降りましたる春姫は
永き眠りの夢さめし　小鳥歌はせ蝶舞はせ
詩人ありやと宣らすに似たり。

ありました（醉茗）

○雲

佐賀　於保綾子

忽ち嶺に浮び出て、　忽ち天に飛んで消ゆ、
心無しとぞ人云へど、　心無しとは思はれず。

赤き紫引きはへて、　樂しきさまの浮べるや、
出でます日子に打かけて、　朝の晴衣と飾るなり。
黒雲むらむら湧き立ちて、　怒の色の見らるゝや、
稻妻先立て鼓打ち、　篠太征矢を注ぐなり。
仇なす暑、逃げ竄れ、　草葉の笑の穂に出るや、
疾風早脚逸早く、　颯と引上げて空清し。

もう一いき、雲について深く新しく想像を廻らして御覽なさい（醉茗）

○戀の生命

井口敬子

花紅につゆ滋く、　堤にきりは迷ひたり
男清十郎清らなる、　歌に明けたる夏の朝
歌の調をよう聞けば、　「樣と二人て草刈れば
鎌は新らし草は美し、　さらり／＼とようかれる」
お夏野の家に朝まだき、　お米磨ぎやるうらの川
水上一里きりこめて、　小びんを波にうつしたり
今年十七年頃を、　何處へも嫁かず朝な／＼
清十郎の歌に新らしさ、　戀の生活を送りゆく

實にお夏清十郎の戀の命は今も活きて居ます（醉茗）

○若菜

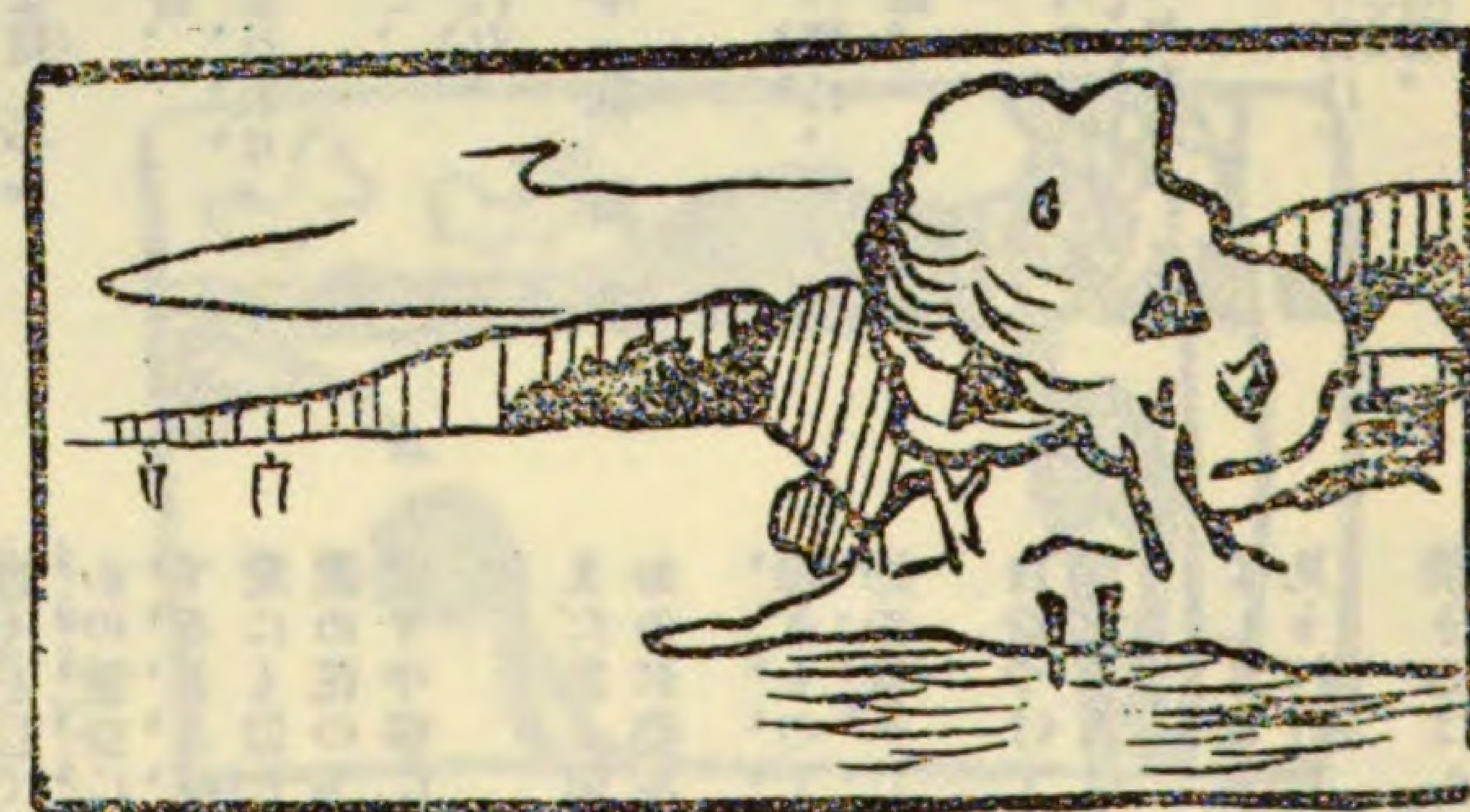
千葉　高橋幸枝

天津御空の玉の扉を、
先づ東にそよ吹けば、
女神春姫瑠璃雲に、
息吹香に燃え下つ界に、
戀は青かり美しき
地の若菜は生れける
かすかに洩れて歎風の
西に南に御使の
愛のほゝ笑み若き笑

戀の青きは君に依りて初めて開く（辭者）

○曙の歌　山梨　内藤白雨

萬嶺の聲をひそめたる、
闇の帳をつんざきつ、
光輝く朱星や、
天の戸いてゝ遠海に、
傳ふは何の天啓ぞ。
あゝ夜はあけぬ夢去りぬ、
赤黄紫はる雲の、
濱の眞砂に映ろへば、
深山の崖に鳥なきて、
樹々に愁の褪せんとす。
雲井の宮の欄干に、
輝く御手を開くとき、
呼ぶは樂しき曙の歌。
焔の男神立ち倚りて、
千條の線よ海に垂れ、
霞の帳ひきたれて、
春の女神が舞ふ袖の下、
春七色の霞の帳、



北上河畔（賞外）　陸前登米　高橋ふさ子

焔を男神としたので、此曙も新しくなりました（辭者）

○おくつき　陸前　尾形千代子

夕雲あせて雨ほそき、梨の花散る春の暮れ、
君がみ魂を弔らへば、
石碑さむき苔の香や。

あゝ若き血のめぐりては、
胸に焔のもゆるとき、
など夢みんや、永刧の、
眠りの床の冷たさを。

花の希望か、あか星の、
榮を夢みし眸閉ぢて、
脆く、呪咀の夜嵐に、
果敢な、我世の運命冷たき。

小生にたまはりし御作一篇は、うれしく拜見しました（辭者）

○春の曲　神田　松室うた子

眠れる春の若葉山、
ひらく／＼蝶の興に醉ひ舞ふ。
今日わけ出てゝ咲く梅の花、

春の光に咲く緋桃、
いづれも長閑き春の野邊。

○丙午

滋賀　辰井季子

畢の脊族や傳へけむ、
禍神愛ずと言ひ傳ふ、
丙の午に生まれれば、
村のならはしいまはしや。

背戸の緋桃の音もなく、
機の産室響きよく、
苔破ぶるゝ春今宵、
あはれ女の子は生れたり。

勝れて清き顔容、
春の女神も汝が護らむ、
母が憂も今いづこ、
行く末長く幸あれな。

○女神

新潟　小林國子

うぐひす

天の女神のいつの世に、
授けましけん鶯の、
下り來まして春の野に、
音も美しき春の曲。

小雀

小春の椽に籠据えて、
長きみ袖に山茶花の、
小雀愛しむよき人の、
薄紅なるがこぼれたり。

蝶

いつの世詩の御神が、
わすれ玉ひし御供と、
天降ましては春の野に、
花より花にとぶ胡蝶。

葛紅葉

戀にもだゆる秋媛が、
雄松雌松にからみては、
思ひとのみに美しう、
燃ゆらん色よ葛紅葉。

千鳥

千鳥なきよる荒磯や、
うちぶれて行く若き子に、

つめたう寄する潮嵐、
ふと松原にまぎれたり。

○名なし鳥

淺草　大沼さゆり

薄紫の夜の色、
曙の空色淡く、
神の御聲にとけされば
はれたる空のかたすみに

杳々として遠く／＼、
かの蒼空にかけ上り、
ソロモンの榮を讃る聲
此のちりの世をそしりつゝ

するどき征矢を投げ下す、
愛にも似たる樂の音に、
あゝそもなによ否しらず
露やこぼるゝ谷川の

菫の花の下蔭に、
世々平等に囁くこと、
あゝその聲のくしきこと
歌ふ聖者にたる歟

○乙女の化粧

磐城　佐藤榮子

まだ世も何も知らぬ兒の、
おのが姿みとかう見て、
鏡に顔を合せつゝ、
打笑む樣ぞあなうたて。

稚きものよいつしかも、
姉や敎へしたらちれの、
化粧する業汝は知りし、
母や敎へしならはせし。

白粉つけてべにさして、
浮世の人はみづからな、
かざるはなにか稚兒よ、
誇らむ爲のわざなるぞ。

よしさならずも僞りの、
見られむための僞りの、
世の人々にうれしとて、
心卑しき業なるぞ。

清き心はかざらずも、
穢れじものを稚兒よ、
鏡のまへに向はずも、
誰にならひて然はする。

投げよ鏡を鏡臺を、
生れしまゝの汝が身こそ、
洗へよ紅を白粉を、
たぐうものなく尊けれ。

○長閑

高輪　はろしほ子

蔦ひとつ輪のごと舞ふよ、　木蓮や山より高く、
共に舞ふまたひとつきて。

春の水流れゆる〳〵と、　散る桃の紅ひのせて、
野を縫ひつ隣りの村に。

綠りの岡白き壁、　水溫かきいさゝ川
夢の中菜の花の中。

あはたゞし午砲はなりぬ、春の日は靜にて、
いづくとも雛の聲。

○破れ琴　美濃　傍島美遊喜

うす霞暮るゝ天の戸の、　夕べの星をかたみにて、
そらたきかをる高殿の、　琴柱の絃はたゝれたり。
こひは命ちと人の世の、　辛きさだめを悟りては、
雁がれさむき閨の戸の、　夜半の寢ざめに堪ざらむ。
ともに睦みし姉上の、　うれしき人に嫁ぐ見て、
戀にえたへぬわが胸の、　さくるが如く覺えしが。
君が心を忍びては、　深きなげきに沈みけん、
芦の葉そよぐみづ海の、　あつき淚のせきあへず。
花やかなりし顏ばせも、　きよれる波に碎けては、
瑠璃と紛しまなざしの、　涼しき色も曇りけり。
さもあらばあれ世の海の、　日に濁り行くさまみては、
長き眠りにつきたりし、　君が上こそ慕はるれ。
今宵こえ行ヨルダムの、　川なみいかに高くとも、
渡るにたえぬ君が身を、　神は安けくまもらなむ。
百花かをりあを〳〵と、　水しづかなる水うみに、
君がみ魂のあそびては、　殘る思ひもなからむを。

○雲に乘らむと　堺市　竹鬼文子

怨むなかれや人の身を、　人の宿世を果敢なしと、
雲に乘らむと少女子は、　春の山路を辿り行く。

花の陰なる鐘の音は、　醉へる人にも鳴るものを、
雲に乘らむと少女子は　春の山路を辿り行く。



春の野邊（賞外）　京都　千桑子

○乙姫　豐後　林　峯子

常世をめぐる潮の香に　深き理想を含ませて
沼琴取ります乙姫の　海の調べのたかきかな

○ゆめ　備前　松本もと子

銀燭ゆらぐ五十疊　今宵こひしき彼の人と
幾夜の契り結ぶとて　燃ゆる心や頰のほてり
うけし盃はぢらひに　思はずわが手すべらして
あはやと見れば曉の　夢は空しく消えゆきて
やつれ姿のわが身かな

○佐保姫　熊本　荒木よみ子

紫紺の帳をおしあけて　霧り貫とき羽衣の
袖につゝみてゆかしくも　花の手箱をかきいだき
年毎と姫の役目とて　奇すし新らたの花衣
思ひ〳〵にきせなんと　蝴蝶が使命の道しるべ
光りのどけき春の野を　そゞろあるきの優さ神は
白紅よ紫よと　木々草々の願ひなば
もらさじものと日暮らして　夕べ榮へある彩雲の
天の使ひがもたらせる　玉輦に乘りて天の原
女神の微笑（ゑみ）は見えながら　ゆくへは遠き雲の奥
殘んの袖の軟風（やわかぜ）に　開らきそめにし初櫻

○我宿の春　高澤紘子

作らぬ庭の草花は、薫りゆかしく流れつゝ、
雲に埋れし山里も、いつかは春の迷ひ來ぬ。
高嶺の雪も袖近く、自然の空に憧れて、
謳ふが如き眞清水は、岩間の岸をとめてゆく。
あはれ靜けき此深山、驕奢に榮えん希望なく、
昔のまゝに眠りつゝ、色に惚れる名もあらず。

◎橘姫

兵庫　土井勝子女史

（上）

いしこの土蜘蛛蝦夷の地、民草撫づる天の命、
こゝにうけいづる軍神、ゆくや百里の山と海。

（中）

波に黄金の光して、いとやすらけき相模灘。
閃く鬼の炎懐く、轟く寛の聲恐ろしく、
忽ち漲る黒き雲。逆捲く波に風の來て、
船はさながら躍ること、上りて落つる百千尋。
海の神ゆるしませ。汝に姿は從はん。
君幸あれと胸に念じ、ゆくや千尋の波の底。

（下）

黄泉に神と化しゝ身の、今も慕ひし夫戀ふか。
碓氷嶺の言の葉に、天に笑みしか君の影。

◎春の夕暮

筑紫　筑紫女

すみれ菜の花かすめ行く、ぬるき夕べの春風に
やさしき雲のいく群も、山の彼方に歸るなり
小女の影は消はてゝ、雲雀の聲は地に落ちて
春の一日はたそがれぬ、ゆるく流るゝさゝ川の
水に美妙のひゞきあり、岸の櫻に今し方

おぼろの月はてり出て、牛追ひ歸る里の子の
追分唄の音も高く、遠く霞に消えて行く

◎鄙の初春

館島　佳友登喜子

遠山の雪は、まだ消えなくに、
農夫往來の、畷路の邊、
床しう咲きし、紅梅が枝に、
春告鳥なきて、けさ春は來ぬ、
鄙の初春こそ、いと樂しけれ。

見渡すかぎり、青田のむしろ、
春風のまに〳〵、波たゝえつゝ、
天女が綾羅の、歌舞衣なびき、
初霞をわけて、囀づる雲雀、
鄙の初春こそ、いと面白や。

佐保姫が工の、綸錦をとりし、
あふるゝ愛の、彩色したゝりて、
美しう咲く、草花三輪五輪、
「讃美歌」の乙女が、初蝶追ふ優姿、
心嬉しき、鄙の初春。

◎さくら花

秋田　松田蘆村子

希望輝くはるの日に　咲くや櫻花の麗しく
色や自然の眞美なり　香や自然の名譽なり
散や自然の歸命なり　花の理性のひかる時
花の理性のにほふ時　花ゝ理性のちらむ時
世の人皆は櫻花にて　悟れ自然の妙味なば

叙事文

特別第一賞

○白鳥

神奈川 佐久間芳子

小止みを待つておいとま申し上げ、活け終つた寒紅梅の枝を手に外へ出ると吹き切るやうな雪風に、おゝさむと思はずも身を震はして、寒紅梅の花を散らすまいと氣を揉み乍ら川岸通りへ出た。常とても左迄人通り多からぬ片側町の、雪の日の夕暮とて殊に淋しい、向ふ通りあたりを呼びあるく豆腐屋の鈴の音が妙に人の心を引き入れるやう、右手に巍然たる教會堂の大建物も、打ちつゞく都下幾萬の甍も皆一樣に綿帽子を被つて白皚々、塵寰の汚れを包んで罪も驕りも今は跡なく、我世はしばし太初の聖きに返つた。

川中の泊り舟の艫も舳もたゞ白う、其苫をもれて一筋細々と立ち昇るは夕餉たく煙か、川面を擦つて羽根白き鳥が港の方へすういと飛んだ、見送ると忽ち灰色の空に紛れてしまう、白鷗あゝ白鳥、何かなし私の胸に懐かしさを覺えたので、川岸にイずんで其影の紛れた邊の空を見守つた、が千鈞の錘をかけたやうな空の雲一つ動かぬ、靜かに歩を返しながらそれにしても白鳥について何ものが、かく私の感興を呼び起したのであらう、詩か歌か物語か、乏しい頭の中に樣々の記憶をくり返し、知れる限りの、西の國の人の小品をも思ひ浮べた、はかない一羽の鳥のさだめにも神の心のかかるものならば、ふと動かされた感興の、それには必らず何かのえにしが有らねばならぬ、生れぬさきの前の世に、ふと出でたそゞろありきの野川の岸にイずんで、寫す水鏡に我色よきを誇つた時、嘴に花をふくんで流れよりた鳥のむくろ、あゝ其羽根が白かつたのでは有るまいか、などゝ果しない思ひに耽つた。

不意に花やかな眩ゆい光のうちに投げ出されたやうな氣がして我にかへると、何時の間にか玄關の靴ぬぎに立つて居た、襖越しにお懐かしいかあ樣のお聲も聞こえる、戸外はまだ夕闇ながら家のうちには早や灯火花やかにともされて有るので、手なる寒紅梅の花はくつきりと鮮やかに、しめやかな香を漂はす。うつらうつら捕へ處もない夢路を辿つて來たやうの、身の愚かさをほゝゑむと共に、たゞならず心引かれた白鳥の、せめて今宵の夢にも入れよかしと、心密かにひそかに祈つた。

（評）讀むものも亦夢幻的の冥想に引入れらるゝの感あり、徒然草の「わればかりかく思ふにや」の段、天うつ浪の犬の聲の條等と同じ趣なり、余はかゝる文を讀む時恐怖に似たる一種の惑に襲はるゝ也。

特別第三賞

○湖畔の逍遙

東京府下大島町　鵜澤白菫

一

落葉にささやく夕暮の風に、いと寂びしく妾はさ迷ふなる。

水の出る時は大なる激流を作るべしと思はるゝ川底らしき處を、熊笹茅萱を押し分けながら下り下りて遂に小暗き木立の中に達し、猶一二町も行きたらん時、前なる紅葉の林の絶間より、深碧染むるが如き一小湖水は宛然磨き澄ましたる鏡のごとく、顯はれ出でぬ。あはれその磨ぎ澄ましたる鏡の面には、如何に美しき色彩のうつりたるか、如何に花やかなる錦繡の織り出されたるか。人々よ、思へ、其の小湖水の周圍は、悉く楓、ぬるで柞、楢などの濃淡なる紅葉を以て蔽はれたるにあらずや。否な、湖水低く岸高きが爲め、紅の袱包に包まれたる鏡の如く見ゆるにあらずや。美しき鏡……

妾は、岸頭より長く湖面に突出したる落葉松の古樹の幹に恍惚として凭りながら、久しうなるまでこの深山の中の奇なる風景を眺めぬ。風の前山より下し來れる度每、湖面には微暈起りて、そこに寫りたる錦のちらちらと微動さま恰も萬花鏡中の幻影の如くに見ゆ、而かもあたりは森乎として、一鳥の囀づるなく、一魚の躍るなし。

二

妾は礫を拾ひて恍然として投じぬ。否寧ろ報酬せるなりき。

石烈しき音をなしつゝ空中に弧を畫きて飛び行きぬ。やがて湖水の中央と覺しき邊りに、落下したりしが其の音は限りなき四隣の寂寞を破りて、周圍の山、森、谷、皆面白き反響を傳へ、傷けられたる湖水の鏡面は小波の上に大波を畫き、巴渦の上に巴渦を生じて、寫りたる紅葉の影、山の影、雲の影は皆幻の如く動き渡りぬ。

かくて暫くして四隣は、またもとの寂寞に復りぬ。この深山の秋の寂びしさをあはれ誰にか語らんと思ひながら、妾は尚暫く湖水の岸頭に佇立みぬ。只梢を渡る風の音のみ淋しう遠寺の鐘も聞えざりき。

（評）水の集る所湖ほど靜なるは無し殊に山間の湖に至っては靜の極まれるものにして殆んど現境以上の感を起さしむこの文この趣を描盡せり。

特別第三賞

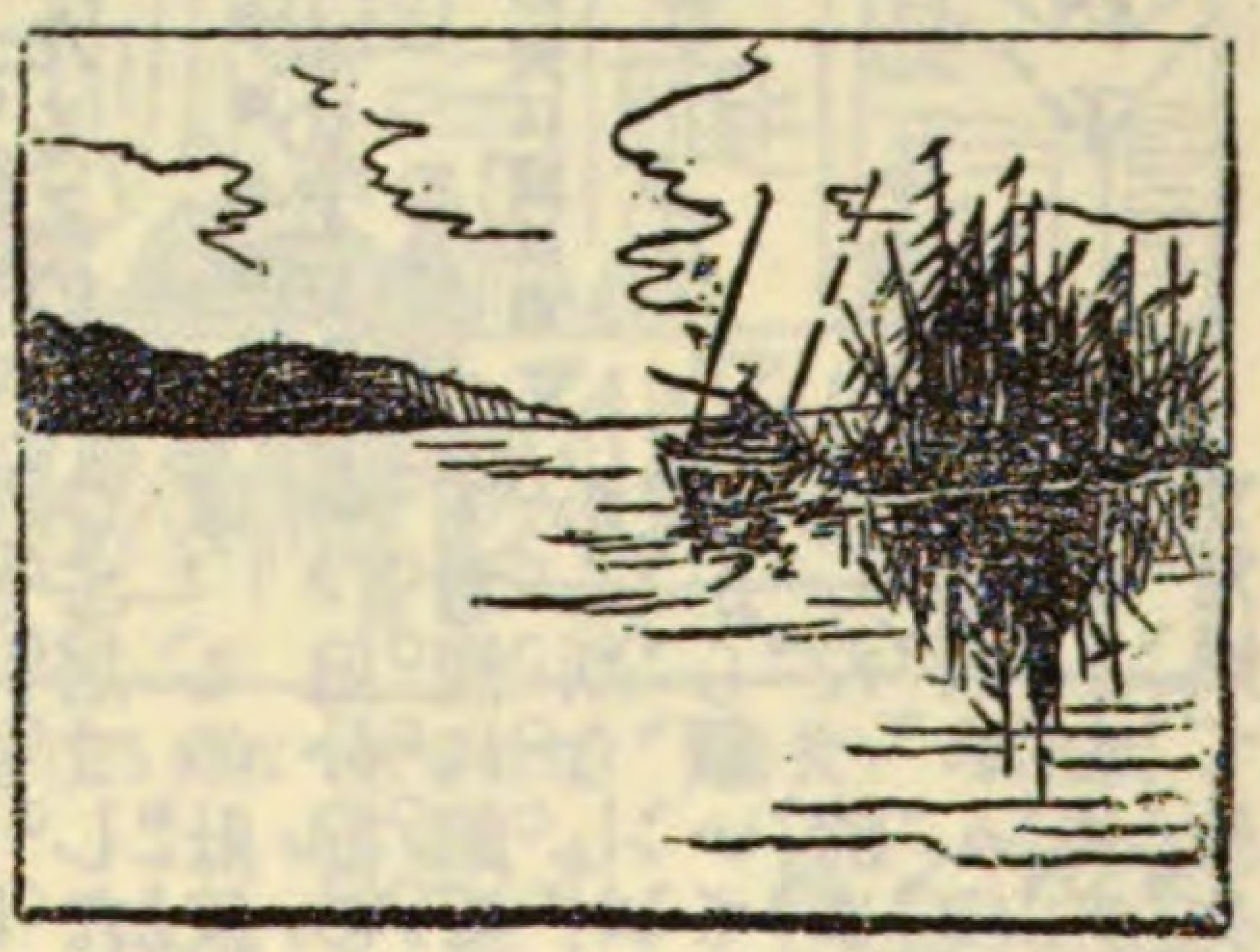
おぼろ月夜

尾張福田　犬飼雨園子

さながらぬれ絹にゑがきたらん如き、おぼろなる十六夜の月は。今しひんがしの山の端よりほのめき出でぬ。障子うちあけて眺むれば花の香誘ひて吹きくる輕らかなる風一しきり室の中を拂うて、心地すが／＼しく醉へるが如きこの夕、さゝやかなる庭におり立ち、軈て柴の折戸を後になしぬ。辿りゆく畦道、傾きかゝりし賤が家の、夢より淡き燈火は、ピカリ／＼と見えつ見えずみ、折々消えてはまた燃え立つやうなり。田の面には水ま白にたゝへてこもかしこもさゞやかなる波紋をたゝみて、絶えず嫦娥の影をゆすぶるさまは、月と水とかたみの戀に戯むるゝが如くなるを、げにいぢらしと見やりつゝ、無意識に畷の道を傳ひ行けば、やがて太皷が浦のほとりにと導かれぬ。

清明の風徐ろに湖面をわたり、さゞれある浪の囁き、枝ながら伸びたる松、さては玉藻の匂ひなど、云ひ知らぬ美妙の思ひ胸に湧き、そゞろに悠久高雅の念にうたれて、松が根に腰を据ゑつ。洋々たる湖の面を眺むれば、船足ゆるき帆船一隻、天掛の洲の松原を離れて湖心にと浮び出でぬ。その純白の色のいかにけ高きよ。ぎりゝと梶の音するどく響きければにや、今までありとしも見えざりし鴫のひと群、羽音啼聲いそがしく、いづちかへ飛び去りつ。「高島崎から帆をまきあげて――……」と後はのどかなる舟うたの、模糊たる湖波を渡るを聞くのみ。近き邊りの木の間には漁火一つ二つ閃めき、苫家をもるゝ海士がさゞめき、今日の獲物をや囃すらむ、時々夜霧の裡にひゞく。時しも誰のすさびなるらむ、笛の音玉を轉がす如く聞えぬ。あはれわが他にもまた、この夜この湖畔にこの月を恣にする風流の主ありしか、とそなたを顧れば、笛の主は見るからにむくつけき老いたる海士なりけり。潮の花に歌口をや洗ふらむ、笛の音はしばしやみしが、亦もさやかに吹き出でぬ。緩く緩く緩く、例へば深流の深潭に淀めるが如く……音やあるか……低く低く低く、

上田堤　（賞外）　盛岡紺屋町　池田しま子



……絶えなんとする一縷の絲、僅かに止め得て繼ぎ起る急調亂調、これ恰も深潭に淀める溪流の、奔下十町岩に激して亂るゝが如し。岸打つ波も靜まりて、鷗の夢や空に飛ぶらむ。
夢より醒めたらん心地してわれに返へれば、風は死して淸淨寺の鐘のひゞき、遠く霧の外に訪れゆきぬ。
妾はいたくも夜の更けしに驚きて、夢にも似たるこの夜半を、家路にこそは向ふなりしか。
仰げば、半ば羞らふおぼろ月、一點か黒き羽衣の松の聲なき枝に何をさゝやく。

（評）斯る描寫は、ともすれば單調になり易けれど、この文は或は白帆或は笛聲を出して變化あらしめたる、才筆なり。

天

○海のほとり

德島市　小川なみ子

『わしが可愛いあの姫小松　よそへ遣る氣は更にない』
鈴を振るやうな美はしい、優さしい聲でした。
今まで冷めたい風にちゞまつて居たわたしが、心地のよいあたゝかい春にめぐり逢つて、今日こゝの《小松島》磯邊に、柔らかい砂を辿つて、色栄えた松や、笑みかゝる波や、ひーろい海の牧場にチラ〳〵徂き徠ふ羊のやうな白帆の影を、うつとりと眺め入つた時、蛇のやうにうねつた松ばやしの近くの藁小家からぬうと姿をあらはした壯佼、年のころは廿一二ぐらゐですが紅色の鉢卷をした紺の筒袖の逞しい、然しわたしは意外でした、歌の音色では素より濱の娘ッ子だらうと思つて居ましたが……、あとで宿へ歸つて聞きますれば、この壯佼は淸さんと云つて、此の界隈に二人とない、追分節の名人ぢやさうです、肩に打ちかけて居ます肴籠に鯛でせうか、紅い鱗の光りが燦めて、籠の目から新らしい汐の雫がぽつり〳〵と滴れて居ます、あとから續いて其の藁小家から十七八の若い女が駈け出ました、淸さんのおかみさんでせうか、併し後ろから突然淸さんの肴籠を引ッかゝへる、淸さんは振り向いて叱りもせず、互ひに嫣然り笑つて居ます樣子では、まだ娘でせう、濱風に吹かれて居ます精か色は小黒い方ですが、鼻筋の通つた眼のパッチリとした、口元の可愛らしい、そつと靨を含んだ愛嬌は、色の小黒いのも格別わるく思はれません。
チャピ〳〵と泡立つた、浪ぎはノ干潟に繋いで居る一艘の苫舟に、惜氣もなう肴籠を投げ込んで、せつ〳〵

と浪べりを縫つて、二人は何か嬉し相に話し合つて、
向ふの松の木蔭に見えずなりました。
空は紺青に、高く低く鳶が飛んで居ます。
蛇のやうにうねつた松ばやしの下は街道で、其の街道の南は廣い野原で、春のことですから恰度繪の具をまいた樣、わたしは、二人が隠れたうしろの情景や、此の自然の美しい野生や、さては此の趣味ある海の眺めにうつとりと！。

西の松林に突然チヽと雀が十四五羽飛び立つた、ガラ〱と地響をさせて二輌の車が顯はれました、二ッの黒い饅頭笠が忙しさうに合點々々をして居ます、車上の客は品の能い老夫婦であります、威勢よく此街道を駈けて居ましたが、松の根方に轍ちを突き當てたのかバッタリ車の響が止りました。

すると松林から黒い影がぬうと顯はれました。
『まあ磯へでも出ませうか、あなた……』
『あれが辨天樣かのう……』
あがつて來た土堤のだら〱坂をやッと降りて、とぼとぼと磯の方にむかはれたが。
『旦那直りやした……』
手をあげて車夫が大きな聲で呼びましたので、老夫婦は急いでほー〱とあとへ引きかへした。
日はないめに傾いて、今まで黒ずんで居ました遠くの紀州や淡路島がぼーとほの白うなつて、まだぼかッと鼠色にとざゝれた松葉がサラ〱とこぼれ落ちて、散らばッた、椎の乾葉が吹く風にハラ〱と舞ひあがりました。
『お客さあ、櫻鯛は入らんかな……』
あゝと振りむいと、圓らな眼を見張つた最前の淸さんてす、わたしは吃驚りしました。
拭うたやうな紺靑の空に、しろい雲がたゞよつた。



改札口　（賞外）　京都寺町　石田ちほ子

（評）寫生文の上乘、車より降りたる老夫婦何のとは無けれど殊に面白く感ぜられたり。

地

○朝餉の前

神戸稅關官舍六號　勝田かつ子

聖ミカエリ教會の朝の鐘が八時を打つた。日曜日とは

云ひながら大變の朝寢、急いで起きて床をたゝみ着物を着換へ、其邊をよく取り片付けなどして後、歯磨と手拭とをさげて裏へ出た。

井戸端で何かひろつて居た小雀が、妾の足音に驚いて五六羽バッと飛び去つた。其行方を見送るともなしに見送ると、六甲山の頂はまだ白う雪がつもつて綿帽子をかぶつたやう。

手水を使つてから庭の方へ出て見ると、二三日前まで半開であつた梅もけさは大方咲いて、其下の瓢形の池に二三片花瓣が浮いてゐる。

朝の氣がひやゝかに胸にせまつてくる心地よさ、思はず深呼吸を五六回行つて居ると、後の方で突然。

『姉ちやん！お早う』小さい足音がしたのでふり向いて見ると、お隣りの菊ちやんが可愛らしい人形を抱いて立つてゐる。妾も輕うお早うと會釋すると、

『姉ちやん妾……あのお嫁に行くの』

『どこへ……』

『武雄ちやんの家へ』―― 武雄は今年七つになつた妾の弟。

『さう……それは何？』抱いてゐる人形を指さすと

『これ……これはねあたいの赤様(あかちやん)よ』

『マアもう赤様(あかちやん)があつて……』妾がびつくりしたやうな顔をして見せると、菊ちやんは眞面目にうなづいて、

『姉ちやんもお出よ……あたい所の小供にしてあげるよ』『だつて妾はお母様にしてくれなくちやいやだわ』一寸首を振つて見せる。

『それでもあたいもう武雄ちやんのお嫁さんになつてしまつたんだもの』

『それなら妾行かないよ』菊ちやんはひどく困つたと云ふ風に、切下髮の頭を右の方に傾けて、頻に何かいい方法もやと考へてゐる可愛さ。

あるかなきかの朝風に、又梅の花が一片二片ハラ〱と散つてよい薫りのすること、池の金魚は何と思つたか、それを飲まうとして浮き上がつたが、再び水の中に姿をかくしてしまうた。小波は温たかい朝日にキラキラとうつくしうかゞやいてゐる。

（評）ませたる女兒の口吻妙々、稚兒を描くに巧なる荷葉の小説を讀む心地す。

（人）

○兄様の書齋

岩代須賀川本町　服部貞子

兄様はおかへりか知らと、のぞいて見たがまだおかへりにならない様子、紫メリンスの座蒲團が冷たさうに机の前に置いてある、こそつとはいつて見る。まア此机の塵は……私がさして上げた水仙の花も大なしだわ。

机の上に積まれてあるのが、銀鈴、文庫、寮歌集、アラ西洋獨り占ひなぞも……それから勢揃ひ、金色夜叉が前編と續々編、繪端書ブックが一帖。北海の荒武者と亂暴な字の手紙が一通、忘れな草の繪端書がこれは西都のせゝらぎよりと。蒔繪の硯箱の上には紫インキが一壺、筆さしにはいづれも坊主になつた筆ばかり二三本。引出しを開けて見ると巻紙やらカードやらが、ゴチャ〳〵と、で何氣なしに片々のを開けて見るとピカリ!アラッと驚いてよくよく見ると丸形の懷中鏡であつた。猶よく見るとマア櫛やらコスメチックやら……オホヽヽ今度私をいぢめた時、みんな素ッぱ抜いてやるから、オヤ此指輪は私の指二本もは入りさうだこと!本箱の上には緋ぢりのお蒲團に臥牛がゆつたりと。中は皆學校の敎科書ばかり。正面には水車小屋の油繪が掛つて居る。これは兄様のお友達の筆とか、こちらの柱にはオーバコートが例の通り丈け長々と掛けてある。書棚の前に立つて、寫眞ブックを引出して見もてゆくと、なくなつた〳〵と思つて居た千枝さんの半身のがチャーンとこゝに、まあいつもつて來たのだらう、いゝから取つといてやらう、つひでにその傍の兄様の制服制帽のも……此方のはまアハイカラなこと!此人はまた、角帽をはじめてかぶりましたつていふやうな……オホヽヽ。オヤ!靴の音が……。

（評）いたづら寫し得て妙なり、はれつかへりの言葉もよく嵌まれり、化粧道具と千枝さんの寫眞も自ら照應して更に妙なり。

永代橋附近（賞外）　淺草　松浦あや子



秀逸

○店の前

宮城　紅梅女史

陰暦の正月二日と云へば妾の小な町も、何となう人氣が引立ち、それ福引の景物のと多くない人々が出て來て、先づ一寸賑てあるが、今年は亦何たる寂寞な年だらう。夫れも其のわけ此の大凶作だもの、妾は店前に立つて此の悲惨な町の面を眺めた。勿論福引景物なん

と云ふ事は夢にも無い。すると繩の緒の足駄を穿いて田溢の附いた股引を穿ち頭には目出し頭巾を冠ぶり、裾を撮んで一見百姓とわかる若者がやつて來た。すると彼方から仲間の百姓、歸りだらう。見つけるや、『はゝお早うござんますな、なんちう寒い朝でござりあすかなあ』と若者は不恰好に腰を屈がめる向ふの者も、『うゝたいへん寒いんでがす。まあ何と此の市の淋びしいこと己いら始めてだ。どうして鹽引一匹ありましないや』と二人一處に向ひの魚屋に入つた。

暫くすると矢張歸りがけ外套を着た四十位の男、手に大きな買物、まあ此の不景氣にも似合はずに、と町下を見れば五十を二つ許り越した婆さんと、三つばかりの可愛らしい男の子を背負つてる二十位の女、定めし姑と嫁だらう。後になつてた婆さんが前に出てる時、脊の子供は、なま言葉で、『ばゞおかし頂戴』、と手を重ねる、婆さんが菓子をやらうとする時、馬を引いて來た爲に見えなくなつた。巡査が寒さうに、雪を踏みしめて横丁に入る。白犬がひよつと出て來た。向ひの小僧め雪の塊をいやと云ふ程、犬はキャンと云うて走り去つた。

そつと妾の店前に來た者がある、見れば乞食矢張此の凶作の爲てあらう。ほろ〳〵した赤毛布かむり寒さうに震へて居る、憐だから餅切二ッ與へた。あゝ今年は酒に醉うた者、化粧した女、見世物、見世棚、なんと云ふ物は見られんのである。

（評）細かき寫生の見るが如きが嬉しくて

○田舍の夕

四谷　山中芳子

夕燒のあかく染まつた空に、くつきりと翠に捺したかの如くあらはれた戸塚の森、じつと見つめて、今妾は土橋の上に立つた。

夕日は今し鎭守の森影に沈まうとして、その絶々な微光は丘を越え、村を踰え森を通じ楢山を越えて、最後に落合川の玉をまろばす樣な清水に閃めいて居る洗塲の方にあたつてがや〳〵話聲が聞えるので、ふと振りかへつて見ると、二三人の百姓が忙しさうに鍬を洗つて居る。

折しもバタ〳〵と、向ふの杉山から飛びだした三羽の鳥も樂しさうに、羽聲をして、鎭守の森をさして飛んでいつた。

いつの間にか、日は森陰に隱れて、青々とした麥の先を、そよ〳〵と弄ぶ夕風は、夢の樣な白霧をつれてきて、丁度今の鳥を封じ籠めるといふ風に森を棚引き初

めたが、初めは動かず一所を漂つて居る、それも僅かのまに、もう全速力で散り初めた。森の前面はみるみるうちに、一町許り向ふの白壁が忽ち薄れたと見るとすぐその傍の屋根を傳ふ煙さへわからなくなる。黒ずんだ杉森の中から、ぬつと出てくる百姓もまるでぼかしたやう。晝はそれとも心づかないつくり松の奇しい枝ぶりが、墨繪のそれに似てあらはれる、只名も知らぬ白き花がくつきりと黄昏を染抜く。茅屋の檐下に亂れる小川のみが、いよ〱白く見える許り、靄がだんだん濃くなる時、ふと向ふの一軒家で豆の様な燈が灯つた。すると川下の方から、遠く〱幽かに、夢の様に、長く引張つた牛の聲が、もうと水の面を滑り渡つて響いた。

（評）名手の油繪を描くを傍にて見て居る心地す。

○京のお屋敷

京都　秋さめ

お庭の景色も日に春めいて、お池のほとり、築山のかげには早すみれも、ゑみをもらしてゐる、まア此御邸の美しいこと、私が上つたのは、丁度、去年の五月で山吹がふさ〱と清光院様のお庭に咲きみだれて居ましたが、それから夏はあやめに藤、牡丹は御當主が特に御好みて、いつも御手づから世話遊ばす。



ひなた　（賞外）　下谷中根岸　下川欧子

それに朝顔のきれいでしたこと、露路は一面に是許りて朝のおひろひに御供してもほんとに心がすが〱としまして里の事など忘れる位でしたわ、夏の末から、秋冬にかけても御庭の眺めによくなりまさる許りて、取わけ萩や女郎花の頃は、虫さへ、加茂の八兵衛に申付けて鈴虫のいゝのをお放し遊ばしたんですもの、如何にか風情がありましたらう、忘れもしない後の月の折、昔お出入の法師を御召し遊ばして、清光院様の御好みで平家を御語らせ遊ばした時、何だかかう、身にしみる様て、ほんにあの時は、こはい三太夫様も泣いてらしたわ。私はもう、あの青白い月の光りの下に、清光院様は、やゝ寒むの夜風もかまはず端居して御出で遊ばすし、皆はつい竹椽の端に袖かき合しながら、ふり出す虫の音にこきまぜて聴いた時、風にあほられて、おぼんぼりの灯が消えかけたと思ふと、相國寺の鐘が初夜をつげた、あの時ほどしんみりと、哀を感じた事は無かつたわ、やがて又お正月になると松の内はかるたに明して、華やかて面

白い事、とても里等の、下々の者は考へも付かないやうですの、私はどこまでも京のお邸生活が好きですわ、『おつゆさん御裏樣が召します、鶯の御用』と綾尾さんの聲、私は部屋を出て御庭へと、欄干の邊まで來ると、御愛鶯の一聲、おゝと急ぐ私の袖に軒の彼岸櫻ははらはらと、春は何處まで……

（評）斯る優雅の境に物質的文明を知らで暮し給ふ作者は幸なる哉、文に今少ししまりを付くることに注意せられよ。

○少年少女

安藝　堀田はる子

若艸漸く昨日今日萠えそめし里川堤、白梅のひと本咲き匂ひて、清き香あたりに滿つ。花陰に人のけはひすると見れば、愛らしき少年と少女、餘念もなげに遊べる。春風ゆるやかに起り、梅が枝ゆらめきぬ。白き蝶か、あらず二つ三つ舞ひ散る花瓣、少年の帽の上にはた少女の下髮にひらり〱。二人は等しく花を見あげて、微笑みはさと頰に浮びぬ。梅が香は高うくゆりて二人を繞りて震ひ動ける。

少年はつと花の下枝を手折りて、艶やかなる少女の下髮にかざしやりつ、少女も一枝手折りて少年の胸にかざしやりつ、花や君、君や花と相見て悦び微笑めり。かくて手を携へて汀に下り立ちぬ。細き流れゆるう水清く、春の風ゆるやかに撫でゝ、さゞ波夢の如く立ちて亦消え行く水の面に、髮のかざし、胸のかざし、二つ相並びて明らかに映れり、二人は三度び微笑みつ。ふと足下より這ひ出でし小蟹の、兩の爪たてゝ底のさざれ石の上、おぼつかなげに步み行きしが、やがて水鏡に映れる影法師の顏の上に來りて、口に入り鼻を通り目に拔け眉を渡り帽に乘り、亦下髮をくゞり行く可笑しさに、愛らしき二個の影法師は、思はず手を拍ちて四たび笑ひぬ。若き觀客の拍手喝采に得意げなる小蟹の、意氣揚々と横向きに步みつゝ、小石の陰に入るを、見送れる二人の頰は、こゝに五たび微笑める。流れ流るゝ水になに興のあふれけむ、少女と少年はかざしの花をそと浮べやりぬ。二つの花ははなれ〱に、亦近う寄りつ、漂ひて流れしが、いつしかひたと逢ひて離れもやらず水鳥の浮ぶごと、川裾に流れ行く、と見てゐたる二人の喜ばしき瞳は合ひて、遂に六たび微笑みぬ。浮びし花は睦まじう互に希望を咡きつゝ、何處まで流れゆくらむ、あはれ其行方も忍ばるゝや。少年と少女はやがて手を握り、花をくゞり繞り踏みつゝ、堤を上へ。後慕ひ行く春の風や。

（評）戀愛の詩趣に飽き〱たる余も、この麗しき抒情には醉はされ

たり。

○春の水

羽前　案山子女

汀に添ふた柳堤の末は霞にぼかされて、河原にはもつれもつれて陽炎がたつてゐる。何處からとなく麥の草笛が雲雀の鳴く音と共に通つて、岸の野芹につゞく鏡の如き水の面には細長い白雲が寫つて居る。ふと見れば可愛らしい目高の群が綺麗な波紋をゑがいて來たので、我れ知らず、手にしてゐた紅絹ハンケチを水に漬して捉へ樣とした。忽ち、逃げたのは目高、漣がきら〱とたつて雲の影は斤々に碎けた。

寢覺め靜けき春の曙、窓の節穴にはほんのり淡き茜色を帶んで、いつも面白う聞きなされる筧の音が今朝に限つてみだれてゐる。早速起きいで丶みれば、竹樋に落ち嵌つて居る大きな紅椿、水はそれにせかれて溢れるので。

描き終つた檜筆を、淸き流に漬した。忽ち穗先から湧き出づる紅紫橙黄、美しき彩雲を泛べて居たが、やがて線を引いて下へと續いた、同時に上から紅梅をのせた一片の笹舟が流れて來たので、思はず顏を上げ見れば白い頬冠の村娘が草籠負うて立つてゐた。

滿開の緋桃の下を緩かに流れて居る水は、急に激流になつた、其所には古い水車が作られてある。日當りの其桃の下には六十程の媼が、十二三の愛くるしい小娘を對手に、針仕事の間には絕えず昔の物語が續けられて人を恐れぬ目白鳥は花の間を得意にとび廻つて其度び每水に花片をちらすので、浮かされた花は忽ち白い水烟の中に送られるのである。



お手水（賞外）　肥後　本田ゆり子

（評）平和なる景趣とり〴〵に面白く音春水の韻あり。

○雪景色

印旛郡　京增紫雲

朝の十時頃から霏々と降りだした雪は、寢る前になると、ピタッと歇むだが、然しながらまだそれから降つたのであらう、今朝起きいで丶見れば七八寸も高く積

つて、頭の側の南天の樹も、竹も、皆雪のために腰をかゞめて地に打臥し、枯木は花咲かして、その美しいことといつたら、何とも形容が出來ない。

眤と眺めてゐると、己が住み家を失つて寒さになやむ村雀の、腹がへつて餌でもあさりに來たのであらう、バラ／＼と十四五羽飛んできて、前の榛の木へ留つて枝を搖したので、花かとまがふやうに積つた雪は、繽紛と下へ落ちる其の美觀といつたら、實に口ではいひ現はされないのである。

私は暫く見て居つたが、若しも印旛沼の景をほしいまゝにする向ヶ岡に上つて眺めたら、それこそこれどころぢやない、實に筆にも口にも盡くされない程てあらう……私は書をかく修養が未だ淺いから、畫は旨く畫けないが、然しながらせめても此の旛湖の景を寫して朋友に送つてやつたら、朋友はどんなに喜ぶか知れやしない……と思つて、急いで家へ入つて朝飯をすまし、粧ひをして、三脚器とカンバスと繪具をバッグに入れて肩から腰に下げて家を出た。

途中足がヒヨロ／＼して幾度かつまづいて、雪の中へ倒れんとし、歩みては留り、留りては歩み、漸との事で向ヶ岡へ上つた。

私は岡上の破れはてたあづまやの中へ入つて、懷から用意の懷爐を出して、氷の樣に冷い手をよう／＼煖め、それから三脚器を前に据ゑて、ズット前の景を眺めた。

見渡せば天地唯一色に、さすがに廣き印旛湖の水面全く凝結して天然の玻璃を蓋ふが如く、僅に夫れと知らるゝ渡船場の松……即ち宗吾記に名高い甚兵衛渡しの汀の邊に生えてゐる並木の松の雪に掩はれ、松の下には渡守の翁が住まつてゐるのであらう、トバを以て造られた小さな家があつて、それから煙がボーと立昇り、汀少し離れて三四艘の小舟が竿に繋がれてあるのが眼に映じたので、覺束なくも筆を取つて其の景を寫した。が私は寫してしまふや否や、かの宗吾の悲慘なる當時の面影があり／＼と浮んできた。

あゝ宗吾、二百の農民の飢餓を默視してゐる事が出來ないで、一命を賭して領主の苛酷を將軍に直訴せむがため、妻につげ子にわかれ、脚袢、草鞋、身には雨合羽をまとひ、笠に吹雪をおかして、心殘れる吾が家の方を見返りながら、胸に千萬無量の悲哀をつゝみ、雪の小道を恩愛に進まぬ足に辿り／＼て、この甚兵衛渡しまできて、時の渡守甚兵衛に「寒くて辛からうが、どうかこゝを渡して與まいか」と賴むだ。けれど夜が更けてゐるので甚兵衛頑として應じなかつたが、宗吾は細々の譯を話して哀願したので、甚兵衛もその義氣に感じて、遂に御法を破つて宗吾を渡してやつたてふ

其の樣が、いまあり〳〵と思ひ浮び、見渡す限り白皚々、夜は沈々と更けて萬物聲なく、天を仰げば黑闇々面を切る樣な筑波颪に吹きさらされながら、この湖上を渡つた當時の宗吾の心は、どうであつたかと思ひやられて、私は暫し感慨に堪へなかつた。

＊　＊　＊

ハツと感慨からさめた私は、急いで三脚器を疊むで、バツグに入れて家へ歸つた。
歇むで居つた雪はまたも霏々と降りだした。

（評）宗吾の追懷の爲めに雪景の敍べてが非凡となれり。

○春の一日

淺草　松浦あや子

青き山、霞める森、菜花、麥畑、畑中に休らへる農夫、樹陰に半ば隱れたる茅屋、潺々として呼く小流、近く一面に紅雲のたなびける如き桃の林、小高き丘の上に飜へる酒旗。

仰げば、海上を行く白帆の如く悠々として蒼穹を往來する雲、大なる環を描きつゝゆるく舞へる鳶、金鈴を打振るらん如く淸く爽かなる雲雀の囀聲。池の畔の堤の上の若草を藉きて、我は幼子と共に憩へるなり。軟かなる風は徐ろに我等の鬢の毛を戰がせ、霞める日光は暖かに我等の背を照しぬ。

幼子は菫花、蒲公英など摘みつゝ、無心に鳥の如く無意味の語を囀づるなり。やがてそも倦みて摘みためし草花を打捨てつ、胡蝶を捉へんとするなり。緩く翅を動かしつゝ小草に眠れる白き蝶は、敵の小さき不意撃の手に驚きてひら〳〵と舞ひ上りつ、彼を挑むらん如く、輕く頰のあたりをかすめては飛び去るなり。

靑山の麓、桃林の中に紅き或は白き幟あまた立てり、村芝居の催さるゝなりけり。

山に入れば、打絕えざる琴の響をなせる瀧の、高き岩の裂目より落つるなり、これや春の女神の晒せる素き練絹なるべし。瀧に近く一株の山櫻あり、花はちらちらと散りて泉に點ず。泉は木葉を潛り石を潛り蓬の茂みを潛りて里に出て、永久に山の消息を傳ふるなりけり。幼子を連だちて一日の淸遊、懷は無念無想の境に馳せつ。今宵の夢や再び花散るあたり、泉さゝやく畔にさまよふらん。

（評）同伴者の幼子なるが爲に春景一層高雅となれり。

佐々木信綱先生選

和歌

特別第一賞

○ 三河國豐橋町鍛冶五五　うた子

たのみつる芭蕉は裂て蔭もなし
何にかくれて泣かむうき身か

〔評〕あはれなる、女らしき歌。

特別第二賞

○ 弘前市品川町字新割町　佐野みどり子

何となく涙ぐましき夕ぐれを
とぼそによれば花散りみだる

〔評〕「たのみつる」の歌と同じ趣ながら、かれは枯野の中を流るゝ野川、これは花かげをゆく里川とやいはむ。

天

○ 神奈川　星菫女史

世にあはて空しくかへる故里の
霞のをちに雲雀なくなり

〔評〕長閑なる春の日に照らさるゝ、さすらへの旅姿、あはれ深し。

地

○ 上毛　眞砂壽子

新らしき道はひらけて山添の
梅咲く村に橋はかゝりぬ

〔評〕橋のほとり、物うる小さきわらぶきもたてられしなるべし。

人

○ 千葉縣長生郡新治村　桂女史

病人が髪梳る日あたりの
南の窓に桃の花散る

〔評〕のどかなる歌。

秀逸

◎　尾張　犬飼雨園子

亡き人の柩を送る木下道
　夕べ淋しくねむの花散る

◎　上毛　磯雅井菫子

漁に出て三月かへらぬ父まちて
　濱邊に今日も入日眺むる

◎　上毛　和田末子

遠山稲子眞筆



（新年御歌會の御選に預りしもの）

叔母を訪ふ杉の小坂の曲道
　ところ〳〵に紅梅の咲く

◎　横濱　花舟子

枕邊のともし火きえて手さぐりに
　藥のむ夜のさびしくもあるか

◎　笛川畔　千鶴子

君を舟におくりて岸に佇めば
　櫓聲かすけく雨ふりいでぬ

◎　伊賀　木津さゞかげ

胸のもだえそのまゝ秘めて山寺に
　逃れし人のうつか鐘の音

◎　大阪　大阪ひろ子

母君のいたづき癒えてきのふけふ
　梅の小窓に風あたゝかき

◎　浪花　大道ゆり子

何事もわれにはつらき世にはあれど
　涙ばかりはしたしかりけり

◎　金澤　大地波子

菫野に少女芹つむ春の川
　流れの末は桃さける村

◎　岩代　丹治はるみ子

牧人の牛を呼ぶ笛ふと止めて
　思ひ出おほき夕雲を見る

◎　下野　田村靜子

友去ると日記にしるして夕暮の
　戸による袖を暮の風ふく

◎　飛騨　松野みどり

聲低う詩を誦する人誰ならむ
朧月夜の花の下かげ　下總　川奈部良子

◎陽炎のもえては消ゆる若草に
子牛ねぶりて春のどかなり　信濃　岩間花子

◎歌たべと庭の白梅一枝折りて
持たせてやりぬ初雪の朝　大分　工藤たまき

◎まぼろしかうつゝか夢かあらずわれ
いくたび泣きし世故人ゆゑ　明石　玉島せき子

◎夢のごと朧月夜の櫻町
後ろ姿の人美しき　紀伊　糸川みち子

◎梅によき十戸の村の朝あけや
かをりほのめく水うつくしき　常陸　香坂雪子

◎相見てはなか〳〵胸のせまるかな
なぞ君われに泣けと言はざる　豐後　平山紫泉子

◎七色の彩美しき夕雲の
浮ぶ野川に藻の花白き　大坂　和久薫子

◎ゆく雲に思はそはて今日おくれぬ

病になやむ旅の雨のまど　兵庫　冷飯ゆり子

◎小さき手に小さき旗ふる稚子負ひて
なみだにむせぶ人うら若き　下總　大崎紫水子

◎少女うせて歌の小窓はとざされて
雨にくづるゝ緋牡丹のはな　下野　新井琴子

◎ちかひてし人は歸らで花の夕
鐘の音ひくう小雨そぼふる　上毛　片井ふみ子

◎さきつゞく菜の花畑つくるところ
乳母の家あり君の家あん

◎白萩に雨ふる夜を法師召して琵琶に泣ます將軍ゆかし　兵庫　柳田白ゆり

◎語るべき友しなければたゞ獨り昔をおもふ夜半の月かな　山形　齋藤こま子

◎すき櫛にぬけ毛のおほき朝毎をしひて鏡にほゝゑみて見る　大分　甲斐ふい子

文

◎君にとて書にし文を今日とすぎ明日とのばして十日秘めおきぬ　美濃　傍島櫻都

◎欄によりて檜扇かざす姫君のたけなる髮に緋ざくらの散る　淺草　くれなゐ

◎花に泣てわがよみし歌百あまりみせむ人なく春ゆきにけり　奈良　西湖女史

◎春姫が愛子天降りてわが春の野をや粧はすゆかし蓬の　徳島　佐藤きん子

長崎　まき野小町

○網代車北野の露に見えずなりてうれひに沈む宮人あはれ　播磨　富原愛子

○里人の柩を送くるかれの音に親なき身にはいとゞ悲しき　上毛　磯貝すみれ

○旅僧の菅笠一つまた一つ梅の花咲く春の山路　讃岐　おやめ子女史

○花の露したゝる音も聞えけりねざめ靜けき春の曙　越前　木津桔梗子

○糸車音のかすけく桃あかきわら家いのきに春雨のふる　安藝　君子

○白に紅にとりまぜて咲く梅の花亞園に咲きて晝の月てる　茨城　大和田よし子

○年毎によわり行く身と知りつゝも迎ふる春ぞうれしかりける　千葉　高橋芳子

○いくさはてゝ煙さまよふ野の夕きらめく星はなにの啓示ぞ　秋田　松田せい子

○泣きしとてかへりきまさぬ背子なれば黑髮たちて手向けまつらむ　芝　杉水利子

臥龍梅

梅の木の老木の花はしら雪に龍の臥たるこゝちこそすれ　備中　山本友與

霰

山風に吹きさそはれてさ夜中に夢おどろかす玉あられかな　備中　田中操

雪

冬枯のあはれは雪に埋もれて花にも勝る此景色かな　伊勢　靜江



高砂尾上の松

(福井淺見壽惠子君寄贈)

○まなび子がおろがむ神の名と共に匂ひもたかし白梅の花　横濱　うらぶれ人

○なさな子の少さき胸に手をあてゝ空あふぎつゝ涙ぐむなり　岩代　藤香

友を思ふ

一すぢに思ふ心は山とあれど拙なき筆の恥かしきかな　澁谷　林田糸子

旅

うきにつけたのしきにつけ身にしみて古郷こひし初たびの空　遠江　伊藤平子

○討死のしらせはつきぬ脊戸口の桐の一葉の落ちし夕暮　南總　關よし女

○山住の軒の内猶に露ちりて葉末にやどす月影さやけき　栃木　落合藤代

○吹きあぐるすなごも見えて渡場のとまやつめたき夕あらしかな　埼玉　三果

○燃ゆる思ひふりのたもとにつゝみつゝ見上ぐる空に夕月にほふ　奈良　稻葉千代子

河柳

青柳のかげなうつして流れ行く水ものどけき春の夜の月　神田　宮川良子

戀

あやなくに戀しき君を見もみずに暮れ行く空のあとぞ戀しき　横濱　鄰々木女史

○美しく上野の山もなりにけり花と爭ふ初春の雪　豐後　白菊

○いろ〳〵に咲き分くるこそあやしけれ種は同じき大和なでしこ　茨城　中西歌子

夕やみの庭に一聲ほとゝぎすたちばなの香り高くたゞよふ　丹後　竹村しま子

山霞

立のぼる烟のいろもわかぬまでをちの山の端霞たな引　信州　清水りん子

○

書に倦みて外に出づれば見に來よと風の知らせる野辺の梅哉　肥後　佐藤やす子

新年の河

ほのぼのと朝きり立ちて白川の瀬の音きよく年立ちにけり　東京　鵜澤文子

君の墓辺にて

ありと思ひなしとぞ思ふおくつきの落葉に伏して秋の風きく　石狩　清子

○

時ならぬ梢の花に月冴えて北風さむし石狩の原　愛知　顯明

美人

行すぎてかへりみすればかへりみし花の色香のなつかしき哉　大阪　大西芳枝

○

奥殿を漏れ來る琵琶の幽かにて御園小暗う春の雨ふる　但馬　秋山龜女

冬の夜

夕月夜空行く雁に言とはん都にゐます兄やいかにと　群馬　吉田きみ子

○

こしかたのおもひ出られてなんとなう涙ぐましき春のゆふぐれ　長崎　早稲田君子

○

兄君の露營の夢や如何ならん父は世になく母は病みます　松嵐女史

明治三十九年一月元旦ひるめの神を拜し奉りて

千早振神のおまへにしめはへて御代安かれといのるもろ人　羽前　豐子

○

千歳とは思はざりしが百年とちかひし君と別る思ひは　失名

梅

愛て植ゑし梅ほころびてほゝゑめど眺むる人は亡きぞかなしき　本所　井口いれ子

○

花にあき若葉にあきて又まよふ實にうつり氣な春の蝶かな　福島　高澤愁子

○

指折りてことし五つとをさな子が微笑む顔の愛らしき哉　長野　しげ子

花間鶯

鶯のなきつる岡を眺むれば雲かとばかり花ぞ咲ける　東京　山本はる子

○

御墓べに手折りてさゝげん吾庭の君の愛でにし百合の一もと　越後　足びき女子

○

萩小道赤き鳥居のほの見えて石のきざ橋朝日うるはし　大和　中西芳子

○

えしふとのないろ河畔に日は落ちてらくださまよふ影ぞ淋しき　徳島　浦上登志子

○

戀も棄て世をも棄てにし柴の扉に春を告げくる鶯の聲　上野　佐藤喜和子

梅の里

春霞たなびく里の少女子が織る機の上に梅の花散る　新潟　田村さく子

○

栞ひろう童が素足さむう見えて落葉さら〳〵猿の聲する　越後　苅萱賤子

○

枯柳に落ちかゝる月見る心地さびしう十九の春を迎へぬ　上毛　片井満都子

○

太房の緋房の鳥籠手にもちて妹は畫師の傘にのぼりぬ　靜岡　八木光子

○

兄もなく妹も亦なき我がこの身歸る我が家は只寂しくて　日詰町　渡邊みな子

○

十五夜に月ながめんと出て見れば松の木蔭に見えつかくれつ　滋賀　辰井寧子

○

鐘の音は雲井にすみて日はうらゝ御欄の御簾に白梅かをる　三重　長井惠美子

○

をさな子がまゝごとしたる藪蔭の筵は朽て春雨のふる　福井　長谷川靜子

○

少女子が手ぶりかわゆきまゝごとに春雨ふりて桃の花散る　大阪　島田ひろ子

○

亡き母のわが名呼びます心地して立ち去りかねるおくつきのもと

○ なつかしき君がうつしゑとりいでゝあふげば白し十六夜の月　山口　田中美子

○ ひげ白き翁は庭を掃きやめて昔語るよ鳥羽の戰を　福岡　獅子座初代

○ 朝まだき風もしばしは心せよ庭の糸萩露ながら見ん　筑前　大塚松子

○ 去年までは一つ机に文よみし彼の君今は如何にしつらむ　大阪　涙光子

○ 本所　山田すみれ
いつの世の罪のむくひや雪の暮めしひ親子の熊野路ゆくも

夜神宮に詣でゝ　靜岡　三輪靜子　高
色どりし紅葉に興の御垣守衞士も歌讀む園の　山
月かな　益

○ 京橋　坂井貞子　代
諸共に遊びし年も由井が濱今日ぞ名殘りに袖　子
ぬらせとや　貞

○ 常陸　西野春萩　年
白帆見えずゆき來の人の足たえぬ春雨けぶる河そひの道

梅見　宇都宮　金澤保子
見渡せば空も匂ひて梅が枝にやどろもゆかし春の夜の月

初雪　失名
天がした嬉しきことの數あれど一しほたのし京の初行き

○ 春谿子
なよ〳〵とそよぐ柳の小村より桃の里へと霞むけふかな

○ 東京芝　野水江
あけ暮に人にいまるゝ鳥さえ親につかふる道は知るなり

竹雪　山口靜子

鳴く鳥の聲もきこえずわが宿の竹の葉しのぎ雪のふれゝば　信濃　川口ちか子

○ 南天の赤き實目だつ雪の朝雀の求り餌に餓えてなく　群馬　吉田きみ子

○ 花ちりぬ鳥の音老いぬしかはあれど眷子の病はいゆべくもあらず

冬の月　足利町　梅香

○ 夕月夜かげも氷にみがゝれて志賀の浦わの夜はふけにけり　磐城　村岡けい子

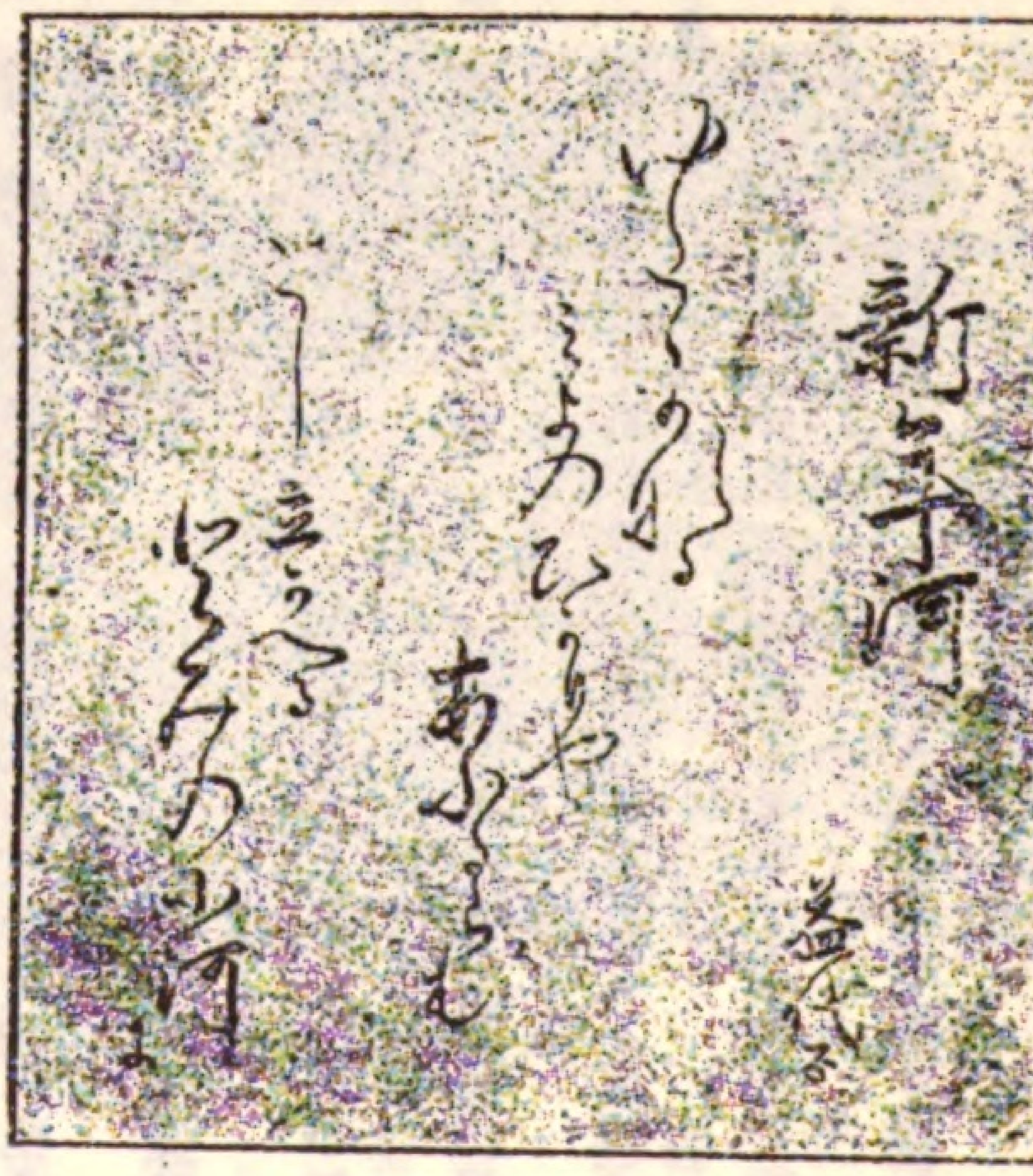
音もなく降る春雨にたそがれてともしび細き山陰の庵　夢

○ 小嵐をさけむとしばし花かげにやどりの蝶のゆめぞつめたき　澁谷　長井朱椿

○ 君とふたりおどろが野邊をさまよいて尾花が末の露にぬれにき　白ばら

○ 草花に想をよせて歌詠せば神の默示か胡蝶のうまい　茨城　秋山敏子

亡き父母を思ふ
幾そたび雁はかへれどたらちねの音づれたえて聞くよしもなき　秋田　鮎川烈子



（新年御歌會の御選に預りしもの）

○ ころぶなとはゝがみ聲を後にして二の字ふみだす學び屋のみち　群馬　林　廣子

○ 美き春の朝日のぼれば薄靄のあや紗消えて賤が屋のみゆ　茨城　綿引はや子

○ 老銀杏風に亂るゝ寺の庭百舌なきやみて日は暮かゝる　新潟　小林國子

○ よそ人とかた言いひて父君をそとさしのぞく三つの幼な子　山形　秋葉子

○　静岡　ひろ子
曉の鐘紫露をゆるがして朝日のみ子は森を出てます
○　群馬　白菊女史
野山みな色ます見れば春雨は空のみどりの降るにやあるらん
○　茨城　拾紫女史
雨そぼつ夜や卯の花の白うして書窓しづかに歌おもふ人
○　常陸　さち子
幽しくも春の日戀いて咲きにほふ梅なつかしく鶯のなく
○　京都　宮崎久子
あさまだき古き都をとひくればかしこきあたりきゞす鳴くなり
○　埼玉　新井すゞ子
春風に池の氷のとけそめて心地よげにも遊ぶ水鳥
○　伊豆　山口もん子
ながむれば雲井はるかにゆく雁の心をいそぐたそがれの空
門前の蝶　鎌倉　しづ子
花覧りの歸りし跡の門の邊に殘りて獨り蝶の遊べる
友を思ひて　いばらき　櫻女史
道の邊の雪を紙とし文字書きて睦び語りし君ぞ戀しき
梅　奈良　當麻正子
我にはの梅もさかりとなりにけり早や鶯もおとづれよかし
○　和歌山　奈加谷とも子
桃多き小村の長のまな娘嫁ぐかごゆく朧夜の月
○　山田きみ子
いたづきの枕にひゞく夜半の鐘涙にむせぶうら若き人
○　岡山　むくげの花
詩集よりあふれ出たる花葉色は褪せども香は永久に
○　陸前　濤子
白菊のかほり床しくやさしきに何を怒りて秋風吹くらん
○　京都　澤秋さめ
風帆ひとつかすみのこして島山の松はおぼろにくるゝ今日かな
○　越後　伊奥部千草子
緋牡丹の花の崩れを蝶のつれ雨にくるゝよ春を惜しげに
○　備中　ふみ子
思ふとち舟こぎのほす大堰川まの間に〳〵花を見る哉
○　陸前　小野寺はる子
紅葉ばの散りてつもれる我庭に訪ふ人もなく虫の音たかし
○　牛込　林安津子
そよと吹く風に心のとまるまでいまをさかりと匂ふ梅が枝
○　八王子　小池つれ子
惱みゐる君の鬢頰にほろ〳〵と梅の花散る夕ぐれの窓
○　佐渡　玉置とみ子
はづかしのれみだれ髪や窓おせば百合の香おくる大野朝かぜ
橋上霰　兵庫　小泉愛子
やなぎちる里の小川の板ばしに行く人絶てあられふるなり
はるの野　岡山　山下光代
胡蝶ひとつ袖の牡丹に戯れにけりやち草薫る春の野にして
富士山　埼玉　幸子
東の窓うちあけて見渡せば富士の高根につもる白雪
○　鳥取　しち梅
今日もまたすみれさく野に暮しけり都の友の道しるべして
○　島根　三明糸子
糸細き柳の枝を過り來し波をさはがす春のそよ風
○　近江　龍井文子
花見むと數へ子つれてたどる野路子等が興ずる唱歌のどけき
初雪　山城　重松敏子
いつの間に降りつもりけん今朝見れば後の山の峯の初雪
元旦　神田　八木緑臨
あらたまの年をことほぐ鳥の音も今朝はかはりし心地こそすれ
梅　難波田うた子
盃に濃染のうめの露うけて妹のはかにそなへやるかな
○　千葉　武田たき子
今朝はとて若水くみに起にけりいつもながらのあされする身も

○逝きまし、君がかたみの諷誦してたゞずむ窓に春雨にそき　茨城　秋山薩子

山家の節分　美濃　野村紅葩

○たき火して煎豆いる夕まぐれ山の端いそぐ寒行の僧　越後　瀧澤みつ子

香を送る風をたよりにたずればや梅咲く宿の花の主を

○　京都　鴨撫子

惠まれし蘭のかなりに偲ばるゝ君の心も斯やあらむと

○　京都　橋本すみゝ子

訪ひきませ六孫王のかたほとり小野調ぶる柴の戸ほそに

夢を見て　澁谷　ときの子

なき友と共にかたりしゆめさめて枕べちかく虫のこゑきく

業卒へて郷に歸りしとき　澁谷　一少白衣生

ふるさとの山も小川もかはられどかはりたまひし母君のかほ

○　澁谷　花子

いたづきのとこになやめる姉君の何偲びてや涙そとふく

○　澁谷　とめ子

父君と妹と三人打つれてそゞろあるきの今日の嬉しさ

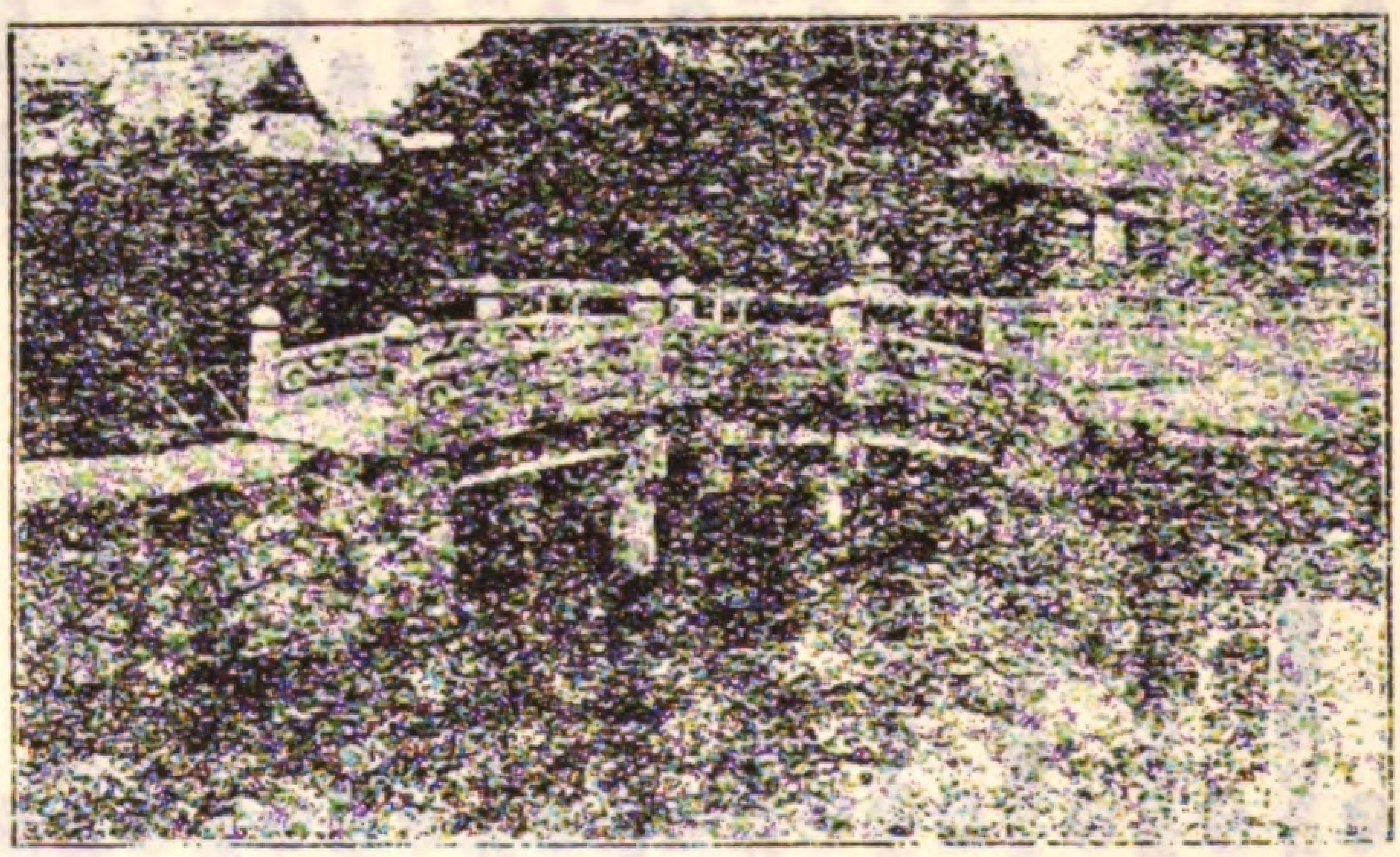
桃　近江　巻醉子

一群の雀とびたる池のほとり緋桃ちりけり夕ぐれの雨

○　長崎　江上順子

絹深傘におもはゆ隱す新嫁に蝶美しき花のしたみち

○　茨城　飯田ふぢ子



菅公手植の松

（福井淺見壽惠子君寄贈）

たそがれて秋雨細き神の庭にほゝ笑む少女戀に狂ふか　茨城　飯塚てつ子

亡兄の墓前にて

兄上よ歸り來ませとぬかづけばおくつきの空雁啼き渡る

若菜　武藏　青柳彌生子

つみためて家路にいそぐ嬉しさはたもとにみつる若菜なり鳧

○　福井　橋本喜代子

水底に光りし小鮎登るらむ今日紀の川に散りし櫻に

○　河内　小松ひで子

花がたみさげて野邊行く少女子のはなずり衣東風になびきぬ

○　紫　園子

雪消の野路にほゝゑむ梅の花かほりゆかしく匂ひぬる哉

○　福岡　古屋らか子

しと〳〵と音なく濺ぐ宵雨や琴の音もろゝ白梅の宿

山家の春　京都　金森ひな子

こよみだになき我里も梅さきて春は來にけり山の奥にも

病中苦吟　近江　始子

花咲けど問ふ人も無き我が庭をうぐひすのみぞ聲を惜しまぬ

○　鳥取　水戸谷胡泉

山ざとや夕ぐれさびしき一人旅そとふりかへる露の細道

鳥取　岡垣幾重

○風さむき冬の夕べをたゞ獨り世に無き父を戀ひわたるかな

すみれ　羽後　石川すみれ子

愛で植ゑし鉢のすみれは咲きそめて美しき胡蝶日毎とひ來る

夜の梅　安藝　石井千代子
月の夜に影をうつしてゆかしくも雪とこぼれて匂ふ梅が香
○　伊豆　華明子
みだれにし姿は月を背に負ひて行く道さむき闕の松原
○　伊豆　渡邊仁輪子
わが里は花散りしきて道もなしふみ分けて行くすべも知らねば
○　南多摩　信子
大牛の草をはみつゝゆる〱とすぐるあとさきかげらふの舞ふ
○　山口　村田節子
丸髷に緋鹿の子かけし新妻がはた音たかし梅かをるやど
○　備中　佐藤芳子
かぜ死して古城の松にこゑもなし月皓々と雁なきわたる
○　備後　大本孝子
思みだれ青磁の瓶の一枝ざしあいなや袖に山茶花ちるも
○　長崎　迎てる子
髮斷ちて跡吊らへるたをやめが庵にさびしき入相の鐘
雪の朝　横濱　門井てふ子
雪の朝庭の松の木一ゆりゆれば四度路に散りぬ白銀の花
○　山田はな子
花賣りの行きにし路の嵯峨の邊にあはれ胡蝶の獨りまどへる
○　高輪　はるしほ子
菜の花に蝶暖かき紀伊の路を市女小笠の紅なる脚袢
初聽鶯　愛知　棚橋いと子
窓近き梅が木末に鶯のけさ鳴きそむる聲めづらしき
○　磐城　佐藤榮子
亡き夫によくにしとこそいふめれど此の子ほれぐみ世の常ならず
○　千葉　林よれ子
うなゐ子の羊呼ぶ笛長閑にて牧場のあたり霞たな引
○　上總　小川文子
夕暮を鐘の音ゆるう流れきて花散りかゝるいたつきの窓
○　靜岡　鈴木はな子
梅が枝の花は朝日にちるものを心みじかきむら雀かな
○　群馬　片井末津子
咲きつゞく菜の花一里蝶まひて鄙唄遠し春日うら〱
○　横濱　白百合
雛の殿におものさゝくる姫君の稚兒髷に一つ桃の花散る
友に返す　越後　落葉
花ならずみもなき木のうら枯れておちばせし世を君なとがめそ
○　埼玉　長澤秀子
月さえて白鷺の聲遠く近く靜かに更くる沼そひの里
○　福井　高柴小靜
夕暮を驢馬曳きて過ぐ史家村の芽ぐむ柳に春の雪降る
首夏　岐阜　田中悦子
昨日まで花になれにし山里は青葉しげりて夏めきにけり
○　三河　澤田つま子
しら藤の垂花長き亭の窓に緋鯉よぶ子の髷美しき
○　大阪　つゆ子
僧ひとり菅笠なゝめに急ぎゆく枯野か原に夕陽うするゝ
○　讃岐　香川ちへ子女史
山寺のほそ道のぼる旅僧の黑き衣に櫻花ちる
○　筑後　富安嵐砂
少女子が賣りあましゆく花の香にくるひもつるゝ蝶の一連
○　能登　千田美笑子
讃美歌のオルガン絶えて聖壇の白薔薇散りぬ二片三片
○　南多摩　青木多加子
針箱の底にさびしく姉上のかたみ指ぬきわれにはゆるき
○　長門　千代子
朝霞たなびく野邊のその中にかをりも高き白梅の花
信綱先生に　豐後　笑み子
誤ちて詩筆取りてそめし子の罪多からば免せ師の君
○　姫路　三木君子
朝まだき起き出て見れば白妙の母屋のあなた杵の音する

○　芝區　松本美枝子

薔薇の上にこゝろのこしてさりげなく笑みに別れし宵月の庭

○　伊賀　菊山かれ子

ひとつ親のめぐみに生ひし廣庭に花あざみあり鬼あざみあり

○　三重　山田ひさ子

風かをる櫻月夜の下影や床しピアノの聲おぼろなる

○　津市　弔花女史

紫の朝霞消えてうるはしの潮路はるかに白帆うみゆく

友の他所に嫁ぐを祝ひて　大分　野田まき子

其の酒のあまき味歌ふべき身なり君なり春の新嫁

○　大分　矢野靜香

河をはるか北滿洲に雲つきてまよう白骨に秋の雨ふる

○　陸中　白羊

故山のつれなき友に我が思ふこゝろをかたれ木枯の風

○　越後　白菊子

吹くかぜはいよゝつゞれの身をさしてうゑをよぶらむみちのくのたみ

紅　新潟　翠涙子

仰ぎみるそらは眞紅にむらさきにはては消え行く夕榮の雲

冬の月　弘前　松嵐女史

なかむれば河そひ柳かけやせて物すごきまでさゆる月影

夜道　紀伊　紫蘭女史

暗くともたどらば道やありぬべしふみなまよひぞよゐの旅人

雪　伊勢　松本茂子

野も山も里も林も雪ふりて見渡すかぎり只眞白なり

○　千葉　小川八重子

小春日を彩雲に舞ふ鳳にのりて天つ詩の國に行くよしもかな

○　南總　大矢みち子

梓弓引いて歸らぬ身となりし君をいかにと思ひやられて

○　安藝　渚女史

嫁ぎたる姉を送りて返る朝櫻さくなり藪の下道

○　德島　住友時子

夢に見し人をうつゝに見し森のあけぼのを鳴く白き鳩二羽

○　伊勢　大畑こう子

もの思ふ心のまゝに筆とれば垣根の梅もほゝ笑みにけり

○　伊豆　上原露花子

おくりましゝばらは机の上にあれど君が情の今は世になき

○　駿河　石砂くま子

つらきかなわれ故抱くおん胸のなやみと知れどとくよしのなき

○　石狩　五井かほる

流れ來る花をたよりに堤行けは夕日長閑き白桃の岡

○　佐賀　綾瀬博子

降れよふれいつまでも降れけがれ世を汝積むときはしばし淸けき

雁　澁谷雅芳

なか〳〵にたちうかりけん花の世をなく〳〵かへるかりかれのこゑ

○　近江　竹村たけを

鶯のかごに飼はるゝ丸窓に梅の花見る人うら若し

摘草　淺草　大沼さゆり

川そひの小安の森に日はくれて草つむ少女いそきゆくなり

○　廣島　きみ子

なにとなく胸さはぎたつ此宵に友の植ゑたる白梅散りぬ

○　淡路　伊藤綾子

由良の戸を渡る小舟に波白うふきよろ見えて水鳥のとぶ

○　淡路　日田道子

日も入りて月もおぼろに黄昏て浜にくれゆく遠の島影

○　北見　高橋專子

月白ろく白雲飛べる冬のくれ十里の雪野こがらしのゆく

冬の夜　佐賀　笠原廣子

夜は更けて靜かに雪は積るとき新尼の宿に琵琶の音高し

島千鳥　宇都宮　金澤保子

月さえて松もさやかに見えながらはなれ小島に千鳥なくなり

○　伊賀　岡森月子

暖き奈良のみ寺の大庭の梅さくあたり鶯のなく

春雨

梅ちりて鶯行きて睦が家の垣根淋しく春雨のふる　小倉　松室さえ子

○

ともすれば風に消さるゝ玉笛のひゞきに似たる我望みかな　越後　風間つゆ子

紅梅

春きぬとつぐる心か我がやどにほころびそめしくれなゐの梅　廣島　むらさめ

○

讀みあきてかたへの圓窓押あけば築山白う牡丹ゆきふる　播磨　富原愛子

○

須磨のうらよもすがらなく百千鳥きくもうたてき旅枕かな　淺草　大沼さゆり

○

白百合の薫りみちたる眞清水に朝た殘んの三日月の影　安房　忍足藤子

○

たのまれぬ人の言葉をまことぞと思ひし事の口惜しきかな　高崎　露野愛子

○

草も木も花咲く春を夢むらん月おぼろかに今宵靜けき　豐後　島婆春子

折にふれて

人しれずみの悲しさは如何にせん我が心根は涙なりけり　陸前　式部

立春

のとけしな昨日にかはる吹く風の日にこそみえれ春や立らん　松山　長能日出子

春の曙

櫻咲く野邊の小山に鳴く鳥の聲より知らむ春の曙　和歌山　西村長子

古寺鶯

みてら人知るや知らずやいにしへをしのぶに似たるうぐひすの聲　名古屋　鬼頭しき子

○

野に山に千草八千草咲き亂れ百鳥なきて春のどかなり　大阪　辻野よし子

○

我妹はいづこの里にあみもちて蝶を追ひて花や縫ふらむ　大阪　佐藤みさを

○

鶯の初音ゆかしく音づれて梅が香かなる園の春風　大阪　辻野信枝

初聲　豐後　桑泉子

まどゐして雪の一日を過さなむ詩筆取りて友よ走り來　姫路　三水喜代子

○

日々に來る玉章は數あれど我まつふみは影だにもなし　さぬき　しげ子女史

○

君がため春野に出てゝ若菜つむ袂にすゞし春の朝かぜ　北總　酒井ふみ江

○

一つらの雁なき過ぎて帆も見えぬ入江のあしに夕日の寒き　北總　酒井みち子

○

これやもと我が家の跡か荒れ果てし堀邊の緋桃今盛りなる　鳥取　上山千重子

○

此處の花彼處の花と白き蝶ゆきつもどりつ春の日暮れぬ　紫煙女史

戀

溪かげにかをる小百合の花つみて紅う染めては笑みませる神　羽後　鈴木きさ子

○

見ぬ戀にむれやく人もあるものをこがるゝ我をなにとがむらむ　伊豫　俊子

○

賤が家に烟くゆらすこの夕べうすく黑ずむ住吉の森　名古屋　森井せき子

水邊の梅

うす月夜たゝずむ人の宵のほとり光琳ぶりの白桃ちりぬ　美作　早瀧武子

○

朝な夕なおのが姿をうつし見てうれしと笑むか岸の邊の梅　船穗　楓女史

春月

ほの〴〵と明け行く空を眺むれば夢のすがたに殘る月かな　矢名

花咲く頃凱旋し給ふ君に

此まゝに勳爵とらんか松が枝にさしかざしたる春の夜の月　本郷　朝井松子

遠征の友

櫻花香ふ盛の春の日に凱歌うたふて君を迎へん　長野　條靈

ゆめとなく現ともなくまどろみて君の名呼べば北風すさむ　長崎　馬塲とみ子

○

野べたどる娘笑し緑髮かざせるばらに蝶一つ舞ふ

明野原 桔梗花

若菜摘む川添一里春風に青柳まじり桃の花咲く ○ 能登 池野以佐美

一山の枯木にふれて雲となる冬の月夜の温泉の烟かな ○ 高知 春野ゆき子

しら梅に想ひ出語るわが影の小枝にさむしきさらぎの月 ○ 岐阜 紫女

雪はまだ殘る谷間の梅が枝に早やなき出てし鶯の聲 ○ 深川 高柳みつ子

故郷の母君おもひ身をおもひ雪にくれゆく寄宿舎の窓

はかなき我身 備中 山本友輿

何かせん我は深山の名なし草世の音づれも絕えてなき身ぞ

紙鳶 大阪 山本韻子

みやひ男のすさびなるらむ春の野にあがれる紙鳶に短册のつく ○ 栃木 野中やま子

牡丹手に姬よりせまるおばしまに孔雀しづかに彩羽つくろふ

孔雀 備前 小山まつえ

小女子がゆかりの董やせし手につみてながめて何おもふらん

千鳥 大阪 田中靜子

風清み海原遠く月出てゝ千鳥啼くなり磯の松原 ○ 府下 森田奈賀子

春風の宿りと見えし青柳の糸繰り繰りし我が思ひかな ○ 東京 下川政女

病みませる母の望みにとりいてぬ涙にあせし父のうつしゑ ○ 千葉 とら子女史

ひんがしの籬に菊の竹植ゑしその夜しづかに春雨の降る

柳 千葉 秋葉文子

おほかたの花のうへ吹く春風を柳ひと木にあつめてしがな

新樹 富山 春波女子

紅葉せん秋を思へばくらしとて窓の若葉はきられざりけり ○ 東京 絹子

世の人の笑ふも泣くもしばしにていづれは同じ露と消えなむ ○ 阿波 秋坡女

傘さして扇に襟の雪はらふ人のけはひのよき人に似る

中臣鎌足 奈良 岸田たれ子

ひきまつきくつをとりたる君が手に傾くみよを支へたるかな ○ 京橋 曾村季子

散る花に駒の上なる若武者の顏ほの白し有明の月

谷間の雪 和泉 羽島雪枝

時ならぬ花のさかりも人しれずたにまにのこる雪の一むら ○ 上總 露子

叔父君の都土産の此かざしさて待遠き鎭守祭りや

懸 南總 板倉敬子

ひとりゐて眺むる空のわびしさや戀てふものゝはじめなるらん ○ 東京 坂梨芳子

雨戸うつみぞれは夢に通ひ來て君と別れの袖をしぼりぬ ○ 京橋 端山つた子

亡き姉の筆のすさびを見るたびにありし昔の忍ばるゝ哉 ○ 埼玉 伊東香子

春といへは片山里の我が庵も梅の花咲き鶯のなく ○ 埼玉 伊東祥子

見渡しの梦まだ小さく春寒く梅の一木の花たゞかなる ○ 美濃 加藤蝶子

峠道わらじは切れぬ日は暮れぬからす飛かふ聲の淋しさ

梅 伊豆 和田久子

鶯のなく音ゆかしき梅の窓琴ひく人の聲うらわかき ○ 上毛 堀越律子

田鶴あさる野邊の雪間のあとゝめて若菜に千代の春もつみてん ○ 大阪 泉千代子

乳に泣くみどり見連れて母君の墓參歸りに白雪のふる ○ 名古屋 原田こと子

久方の月は昔の月なからけふのなかめそいとゝかなしき

和歌

○　越後　國山ひろ子
朝寒う秋の氣めぐる廢庭の霜に惱れる白菊の花

○　出雲　じん子
國遠く出てしひとりの兄君を戀ふるこの夜を雁啼きわたる

○　備前　月冠女史
軒の端の梅は今しも咲き揃ふ花散らぬまに凱旋りませ兄

○　越前　木津たけ子
賤が家の籬の南の日あたりに春待ちあへず梅の花咲く

○　德島　岩崎君子
あれましゝ春の女神の產衣と野の七つ山初霞しぬ

○　埼玉　島村しげ子
雪降りて寒さはいつに變られど世を春にする鶯の聲

○　栃木　茂木靜子
萩の花こぼるゝ野べのいさゝ水洗ふ繪傘に月はくだけぬ

○　栗山川　さゝなみ
つゆ人の力をからずわれはわれひとり車の早くもある哉

柳　三河　紫濱女
春こまに小鈴ならしてわれはゆく里かはつゝみやなきけぶれる

○　常陸　石塚靜江
凩や旅のやどりのさびしきに夜すがらを泣く兒の叫びかな

東北地方の飢饉　横丁　きよ子
病める夫飢に泣く子を守りつゝ針とるわざに一人いそしむ

濤の松　青森　小林八重子
我か宿の濤の嵐にうつゆらぐまつのひゞきぞ淋しかりける

○　廣島　藤本ふしえ
うら若き妻の小窓にたゝずみて亡き君偲ぶ春の夕暮

時鳥　函館　大島小百合
さみだれていよゝ更けゆく旅の空に寂しさ添へて時鳥なく

○　石川　はる女
吹送る嵐も花のにほひにてかすみにかをる山櫻かな

○　千葉　石渡久子
逝きましゝまだうら若きうた人のみ墓に小さき白菫さく

○　新潟　あふさか
亡き姉と此欄に身を寄せて月を眺めし事もありしを

母の病のときに　新潟　中林ひて子
病む母に藥すゝめて吳竹の雨の音きく夕ぐれのまど

○　越後　高橋さく子
夕ぐれを櫻吹雪の戶に立ちて君が御歌に一人笑むかな

○　筑後　田籠かずえ
泣きつゝも心むなしく別れ行く夕戶の暗に小雨そぼふる

○　伊勢　小百合子
人の世を咒ひの筆の鋒禿びて佐渡の小島の島守ぞわれは

○　度會郡　米山しづ子
京にゆく妹見送りて畦を行けば殘んの月にほとゝぎす啼く

○　富山　珠江女史
立出しおのが芝生をしられじとなゝめに落つる夕雲雀かな

○　伊賀　野薊
開けゆく御代に生れし甲斐ありて數ならぬ身も面影殘る

○　德島　住友登喜子
焚く香の煙もほそう夜はふけて月かげさむし友の奥津城

大磯鳴立澤に遊びて　相模　山口春子
ふりはへて鳴立澤に來て見れば老い木のあひに虎姫の立つ

○　能登　池野秋花女史
芥子畑や花咲く上にかすみたり十戶の村の有明の月

○　上毛　關口みどり子
我が宿の梅のまかきにあした每うぐひす訪ひて春の譜うたふ

○　相模　山本みどり
鶯の囀る聲の近うして日當りの窓紅梅馨る

○　上毛　好月
去年の今日わかれに泣きし其君と見るもうれしき紅梅の花

餘寒　新潟　中村ひて子
春とはいひどなほ風さむし久方の月のかつらにゆきやふりけむ

抒情文

文學士 沼波瓊音先生選

（天）

○花の別れ（上野の山）

常陸國石岡町 今泉良子

吹く風かろく袂に匂ひて櫻雲十里花や都のたのしき時に吾れ獨りにして此の地を去らんとす。行かんかな此の美くしき花の都をあとに二十里の彼方淋しき筑波の山かげに行かんかな。花や紅なれ、柳や青かれ、友よさきくあれ、今し物思ひに佇める上野の山は紅の霞のうちに幾百千の笑みをたゝへて帝都を飾らんとする時。

譬へば一事一藝に志しある人、手腕に覺えあり、胸に活氣ありて一仕事せんとする士の、何の道とは限らず、誰かは此の都をと望まぬものあるべき、さるを今より修養ます〳〵つとむべき吾が身の、師に離れ、友と別れ貴き圖書館に遠かりて、もろ〳〵の傑士、さま〴〵の好會に觸るべき縁を絶ちて、あはれ淋しき田舍に行くべき我身、恰も蒼海に漂ふ捨小舟にも似たりな。まして茲に一生の幾分を過して、人なつかしく、土地戀しきその樹のかげも、堤の小草にも、このベンチにも、思ひ出多き此の地を棄てゝ、知らぬ人中によろよろと推し出さるゝ我身を、人は其の故は如何にと問はるべし、されど吾れは云はざるべし。

云ふも涙の種なれば!。

只愛せし文子さん（師の愛兒）と今よりまま見ゆる事の難ければとて、この共に並びて立ちしうつし繪のみを懷にして。

文子さんは我が幼なき友なりき、今分るべき悲しさを子供心にも覺えてか、立ち行く日を楓の如き指折り數へて「なぜあちらにいらつしやるの、何時までも東京にいらつしやいな」と何時も言葉は其れのみ、「一寸いつて來るのですよ又こちらに上がつた時には御稽古をするのよ」と答ふる言葉も是れのみ。共に寫せる寫眞の前髪下げてリボンの結び目ひだ正しく眉目すぐれし圓顏の、少し傾けて立てるも可愛ゆく、別れての後は吾がアルバムに挾んで机上日夕の友とせん、過ぐる日永き別れを惜まんと、日曜の朝まだき川崎の大師に誘ひし時、長閑けき春の景を見ては行く春にこの無邪氣な幼なき人に別るべきを思へば光景たまたま情をひいて吾が心自から沈める如し、されど最早あの二階の見收めも今日を限りか、うしと見し世さへ

戀しきといふものをまして今の思ひ出のやるせなや。いざ愛せし上野の森よ今こそ別れめ、永き年の間人知れぬ星の夜の散歩にも月光僅かに大樹の梢を洩れて靑白く地にちる木間の逍遙にも、雪には雪の立派さ、雨には雨の濕やかさありて捨て難く、學室の事忙がはしき折とても二日に一度は汝の影に走りしぞや、人知れぬ心の苦しみあり涙あり悶えある人の子の友にかくれ世をはなれて迷へる小羊のごと汝の影にさまよひて、其の靜かなる松籟に耳すまし梢を洩るゝ星かげに和かに靜かなる思ひを湧かしかくて半時一時の逍遙默思に心再び活き、胸又開きて、うれしき歸路につきし事幾度ぞや、汝こそ吾が人知らぬ秘密を知らん、弱き卑しき吾も知らん、殊に、汝は吾が二つなき樂しみの美術、音樂の會堂、博物館をも懷にして吾につきせぬ慰樂と智慧とを與へしをや、吾は汝を愛すと云はんよりも、汝によりて敎と慰めとを得し一人の者ぞ、櫻なく共よし、花咲かでも猶よし、吾は花によつてのみ汝を愛する者に非ず、森よ永くその嚴かに美はしき常盤の色をたゝへて、百年の松風颯々と都下百萬の人に淸淨の氣を送りて、日々の勤勞の汗を拭ひ、混濁の塵を淸めて永く帝都の樂園たれ、さらば森よ山よ。

（評）意思何ぞ深婉なる、上野を花によつて愛するに非ずといふ作者の想の高さよ。
文子さんの節が前後に關係うすくして浮きたるはいかゞ。

(地)

○春子さんと私

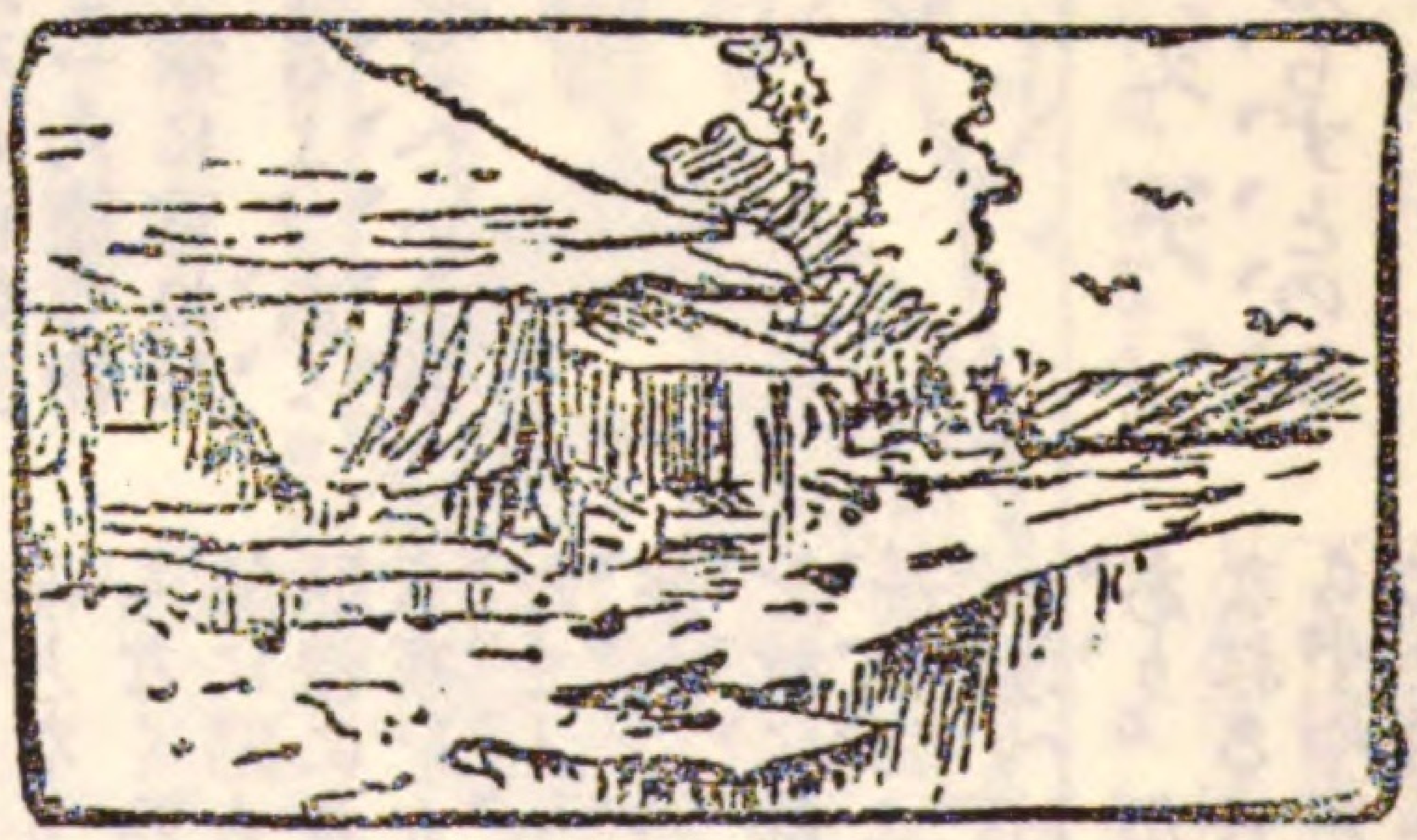
麻布　八重子

ビューく～と吹きすさぶ寒い風が砂を吹いて頰といはず手といはずかすめて行く溜池の停留所に私は肩掛に首をすつ込めて佇立んだ。電車は五六臺行き過ぎて了つた。未だ被入らない。家を出たのが九時十分春子さんは十時に被入るのだから未だ早い。だけど待遠しいわ。若しかおやめになつたのでは有るまいか。でもあれ程固くお約束して置いたのだからきつと被入るだらう。春子さんは如何にお成りなすつたらう。變らないかしら、先の樣に活潑で頰を眞紅にして二重まぶたの大きな眼をして、さうく～「ソマトーゼよろしき者キヨトキヨト致しをらば妾と思し被下度候」と有つた通り必と肥えて被在るんだらうよ。などゝ色んな事を思ひ出して卅分の餘もちよまり乍ら待つて居たけれ共、未だお出てがない、いつそ歸つてしまはうか、いやそれても春子さんが後て入らしつたら惡い、眞實に嫌に

成つて了ふ、オヽ又寒い風が……電車が來た必と今度こそはと見て居ると憎らしい廂髪だの丸まげは見えるけれ共唐人まげは見えないんだもの、何うしたんだらう、何だか悲しくなつて來て夫れに寒いので涙が出た。もう歸へらうォヤ向うから又來た若し彼車に乘つて被在らなかつたら今度こそ眞實に歸へらうと思つて見て居ると留つた。お婆さんが杖をつき乍らおりた。呉服屋の番頭らしいのが次に。三番目！私はかけ寄つた。夫れは懷かしい春子さんで有つたので。其の時何と言つたか忘れて了つた。二人が抱きつく計りに嬉しがつた樣子を見て居た人は嘸可笑しかつたで有らう。丁度十時。さあ行きませうと、唐人まげと束髮、金茶と白の肩掛、銘仙と木棉の着物とが肩と肩とすり合ひ乍ら歩いて行く互の胸のうち、其の嬉しさ。

（評）女らしき情女らしき文巧を弄せざる所嬉し。

田舎（賞外）　神田小川町　村地たつ子



○ひとり旅

赤坂檜町　森　ふさ子

我は今夢よりさめぬ、猶眠らんとすれば音もなき此眞夜中に何やらん心の底には恐しきひゞきの傳はりきていよ〳〵目は冴えぬ、思ひば堪へがたき迄に來し方をめぐり〳〵てげに臥床さむう淋し見れば枕邊近うまたゝく細き寒燈の影さへ物云ふやう覺えてひとり旅の閨の淋しさに身も世もあらで臥床を出でぬ、たゞ夜の明ぬることのみ待ち遠しくて、おぼえず雨戸一枚繰りてたゝずめば春はまだ淺く氷らんばかりの空の色實に寒う寒參りの鈴の音も聞ゆるやうなり、見下せば山を後に連なる家々みな戸を堅く鎖して樂しき夢路暖かうたどるらし、たゞ門にかゞやく瓦斯燈の光りのみうすくてまばらに立てり、見るうちにいつか一つ消えぬ、また半ば消えかゝりたるもあれど夜はなか〳〵明くべくもあらず心細う見返れば長きほそどのいと暗うして赤き草履の二足三足亂れ散るが見ゆ、聞くとしもなく耳に入れるは隣れる座敷に眠り給ふ寢息の音あらかに、こは夕べ廊下にて

あひ見し若き婦人の室よ、思へば見も知らぬよそ人の家にかく迄氣も安らかに眠り給ふ實にうらやましうて我もまた冷たきふしどに横たはりぬ、夜具のおく深く入りてしひて目をとざせど思ひは前にもまして繁くなり來りぬ、幼きよりかぞいろなき身のたゞ一人の姉上にはなれて東都に人となり面影さへさだかならぬ姉上を今故郷に音づれんとする樂しさに、辛き一人旅も物かはとこゝに三つの夜を見も知らぬ他人の家に重ねしなれど、實に堪へがたきは一人行く初旅なるよ、あゝまだ曉遠しや、床にたゞよふ梅花のかをりさへいと寒うして。

（評）女の一人旅をうつして徹に入り細に入れり。

秀逸

○羊追ふ少女

和泉　竹叟文子

羊追ふ少女に、父を知れりやと問へば、知らずとのみ答へて、涙に泗びたり。

嗚呼！羊追ふ少女よ、父の姿を趁うてつれない世に的も無くさ迷ひ出てしを、慈愛の人に救はれてかく羊追ふ少女とはなれるなり。と、この哀れなる孤し兒は語りたり。

○蕭條たる細雨小庭の芭蕉葉を裂きて、軒端の破椽にこほろぎの鳴く夜なりき。待てども〱父は歸らず、一日、二日と秋は寂び行きて、吾があばら家は枯葉朽葉に埋めども、待つ父の影は更に〱見えざりき。

心なき秋は暮れて、涙の吾家をおとのふは時雨の音のみとなりし頃ほひ、獨りの母はふと枕になづきしが間もなく冷たき苔の下に眠る客とはなれり。あゝ、父は終に歸らず、母もまた逝きぬ、いかにせむ術もなく、順禮に身をやつして、父を訪ふとて懐かしき吾があばら家を立ち出でしが、或ひは野に宿りし事もありぬ、たま〱父に廻り逢ふて嬉しさに泣きしが、袖を絞る涙か、將た露の雫に目覺めて起き上がれば、吾れは草を枕に儚なき夢に耽りたるなりき。あゝ、あはれなる吾身哉、夢にさへ迷はされたり。或は里に行き人にさへ逢へばたゞ懐かしくて、父は知らずやと問ひし事もあり。かくて冬もかひ無く打ち過ぎて、春の初めとはなれる日、ある村のはづれにて人に逢ひしを、父は知らずやと問ひ我が身の來し方を物語れば、そゞろ同情にゑ堪へずとて救はれたるは、これぞ羊飼へる主人なりけり。やがて羊追ふ少女となりて、日毎里より牧場へ通へるが、花咲き花散りて幾度も春廻り來るうちには、父にも逢はむものと、由なき願ひに涙に悴れし胸を安めてこの業にかしづけるなりと、語り終りて滂沱

と涙を流しぬ。嗚呼、可憐の少女よ。父は果して此の世にあるや、否や。

（評）哀れげにはあれど物足らぬところあり。

○月の夜の朝鮮海

神戸　勝田かつ子

（一）

我が乗船バンクーバー號は、今や朝鮮海峡を過ぎなんとして、冴えに冴え渡る月の夜の、金波銀波を靜かに縫ひて走せるなり。夜はいたく更けぬれども、機關の音のみ殊更強う胸に響きて寢もやらず、强ひて眼をとづれども思ひはあらぬ方にはせて、右に左に幾度となう寢返り許り打ちぬ。程なく二時の鐘は高く鳴れり。

我はあまりに寢苦しきまゝ、そと戸を開き、むさぐろしき三等室をいでて上甲板に上りぬ。赤色の安全燈影淋しうともり、舷側にあたりて玉と散る潮しぶき、夜の氣は冷やかに身に迫りきつ。人氣なきデッキの上にたゞ一人、月を仰ぎてたゞずめば、大空高う東に流れ行く白雲。其行方見守りしわが眼よりは、云ひ知れぬ涙の音もなく亂れ散りぬ。



夕照（賞外）　尾道市　大本孝子

（二）

船は秒一秒なつかしき故里に近づきつゝあるにあらずや。嗚呼今思へば夢の夢なり。又相見じとかたく契ひて、祖國の山水と袂別せしは三十七年の春なりき。金州海に上陸以來、大小幾度の戰闘に參加し、遂にはかの有名なる沙河の會戰にも加はり、雨とふりくる機關砲下の偵察戰、あはれ右手に輕からぬ傷を負ひぬ。されど左手は尙劍持つに堪ふればと、而もふらず進み行く内、はかなや又も太腿部に貫通銃創を受け、さしも張りつめし勇氣もうせて、我知らず其場にハタと打ち倒れぬ。かすかに人聲の聞ゆるにぞ、ふと眼打ち開けばこはいかに、鐵火はためく戰場にはあらで、見知らぬ人に取り圍まれながら白き寢床の上に横たはれるにて有りき。

（三）

あゝ我はあゝ……かくして死に勝る俘虜の身となり、ハルビン病院に收容せられぬ。しかも負傷の經過おもしろからず、遂に右手は切斷せられ、あはれ今は生れもつかぬ不具の身となり終へぬ。雪のふる日も風の夜も、破れ毛布一枚に寒さを忍び一片の黑パンに飢ゑながらも、嚴しき監視のあることゝて、身に寸鐵もたぬ悲しさ、惜しからぬ……恥かしき命永らへ、又もバンクーバー號にて本國に送還せら

ろゝ身となりぬ。

（四）

無念！無念！いかに身は重傷を負ひ居たりしにもせよ、常日頃より勅語の五ヶ條を深く胸にをさめし身の、何故ニッコと其場に打ち笑みて、見事腹かき破りて果てはせざりし。

聞くも淺間しき俘虜、軍人としては又なき恥とせる俘虜、いかにして我村の土をふみ、出征の折潔よく死せよと勵まし給ひし氣丈の母君に、何の顏してまみえ申さん。野營の夢の朝な夕なも忘れざりし可愛の妻子は、わが片手なきを見ばいか許り嘆かん。

月はやうやく西に傾きそめぬ。遙かに見ゆるは佐多岬の燈臺にやあらん。身にしむ曉の海風は右手なき袖をかすかにゆりぬ。

（評）この軍人に對して些の同情を表し得ざるは余の偏狹なるが爲か

○はぐれ鳥

長崎　江上順子

雲追ふて雲行く夕、はぐれ鳥の一聲かなしう胸をさし通す如き音に鳴きぬ。薪負ひたるまゝ危く倒れむとして、わづかに踏み止まりたる足のわなゝき、得堪へて薪卸してそが上にもたれ掛かりぬ。

あはれ五年あまり世を捨てゝ昨日迄、君と二人が斧の響を共にせし此の深山よ、古風の燧石そと打ちて、木屑火に二人暖まりたるはあゝ……夢なりしよな。其の木屑火に甘藷打ちくべて、二人が晝餉の料とせしことも、オゝそれ、君が手づからむきて、そと我が口に給はりしことさへも皆……夢なりしよな。深山櫻の花あてなる朝あけ、二人逍遙ひての歌がたり、木々の梢の錦よそひたる秋の夜頃、二人木の洞に腰打ちかけての吹笛、あゝ……悉く夢なりしよな。嗚呼々々紀念の歌や竹、そと燒き捨てゝ追想の涙たゝむか……さはれさはれ追想は又こよなき慰藉よ……さなりこは慰藉の料に殘しおかむ。殘して花の朝あけ月の夜頃、斧の手休めむ其の暇々を、み筆の蹟ある歌反古開けて、あくまで打ち誦せむを、み唇の觸れし竹笛とりて、憾みの限り吹き鳴らさんを、亂れし調と笑ふなよ深山鳥。

あはれ今、春酣に花は笑へど、歌語りせむこひしの君はあらで、群にはぐれし鳥の音悲しう、斧の響も絶え絶えに、木屑火の煙怪しう狂ひ舞ふ夕ぐれ、花ははらはらと散りて。

（評）かたみこそ今はあだなれこれなくば。

○假面

靜岡　石神喜惠子

緋桃白桃、八重一重、咲き亂るゝ花園もかくや、艶なる色、妙なる香、滿ちみてるわが愛する女子文壇紙上、

うるはしき妙齢の處女が苦心になれる、紅紫とりどりの詩文を讀みゆけば、目もあやに、花小路そゞろ香に醉ふ心地ぞする。

さるにても此美しき詩や文や、如何なる乙女の手に綴られて、かくは玉と麗はしき作とはなりし。

目を閉ぢて、少時胸に手を置けば、現にぞ浮ぶ、紫の袖長き腕のゆるくおしまつきにかゝりて、白魚と美しき指のすらすらと細き筆走らする、もえたつばかり美しき牡丹花の半襟に包まれたる清き胸よりせき出づる優しき想の、早くも一章又は一首となんぬるを、措辭や如何に、趣向や如何にと、くり返しよみては削りつ加へつ、果はやゝ、思ひあまりて、艶やかなる黒髮傾け、星ときよき眉をそとひそめたる、やがて、秀歌や得し、名句や浮びし、白牡丹の蕾とも見ゆる豐かなる双頰に深き愛らしき笑窪きざみて、徐ろに筆運ばする、床しき氣高き、乙女の面わ、目に見ゆる心地ぞする。

懷かしの少女、慕はしの人よと、その文をよみ、そのうたを誦しては、あけくれ慄るゝわが胸に、ちらと浮び出てし疑ひの雲一ひら、號を追ふて愈密に、いよいよ濃くぞなり行く。

わが庵　（賞外）　栃木萬町　矢野文子



僞なれ、そら事なれといのるかひもなく、かの何子あるひは何々女史など名のれる人々の、あやにくや誠の女史にあらで、實は女子の假面つけたる逞ましき男子なる節々の、ほの見ゆるこそ、うたてけれ。

そは何故とこと〳〵しうは、あげざるべし、たゞ望むらくは末望みたかき若うど達よ、良心に問ひて、さる罪深き業はやめ玉へかし、とも知らで、誠の少女の文送るもありなむ、寫し繪とりかへすもありなむ、悲しさは穢れなき少女の身に、あらぬ疑ひのかゝるたねともならんかし。

若うど達よ、ゆめ女子の聲、處女の姿裝ひて、誠の罪知らぬをとめをな欺き玉ひそ、そらことは如何にかくし玉ふとも知れやすきものなれば。

○はな道

（評）われも常に女子の假面を被れる男子あるを慨するもの、作者とゝもに斯の罪深き業をやめられんことを忠告するなり、況やこれが爲めに穢れなき少女の身にあらぬ疑のかゝることあるに於てをや。

加賀　谷村庵子

明治三十七年四月廿日、快晴、赴任。

門出の用意終れば、母が情の晝餉は早くも調へられけり。然らばと心の中にぉし戴く膳の上、み心づくしの品は數々添へられつれど、哀れ今宵は何處に、何の餉をや物すらんと、思へばそゞろに胸はせまりて更にも進まず。かくては一しほの御物思ひの種ならんと、やうやうに二椀を重ね終れば、一聲高く馬車の呼び笛、さては愈出發。昨夜以來用意の手荷物は、早やも車上に積み上げられつ、思へば、十有九年が間の、母がみ愛の賜なる、今日の門出。せめては一言の御禮をとすれば、あふるゝ思はいつしかはら〳〵と落ちて、只さらばと計に額づけば、答は無くて、ほろりと御目をかすむる一しづく、落ちてなか〳〵に聲あり。

いつしか馬車は、見送りの人の、戀しきかげを、霞の内に殘して走り出しぬ。時はしも百花爛漫たる四月の下旬、菜花風無きに亂れて、陽々たる天地は花の吹雪に閉され、道行く人の袖さへ薰る春の日和。山川笑へど百鳥歌へど、されど〳〵、見る〳〵薄れゆく故山のなつかしさには、今行く方の愛しとには非ねども、留めもあへぬは袖の時雨。あなや忘れてけりと、ゆくりなくも門出の砌とり入れし、叔父君の御玉章、ふと心づきし儘にとり出づれば、眞心こめての祝ひの詩も、今日はなか〳〵に恨みの種なり。

馬車は進み〳〵て、金色の田圃、いつしか連山の綠と變り、やさしき乙女が唄の節は、やがて轟々たる水門の響と變り果てぬ。あゝ誰か計らん、三年の星霜、朝に夕に辿りし文路のはてには、此山里のありしとは。いよゝ、目ざす山原村は來れり、笛は鳴りぬ、馬車は留りぬ。車室を出でゝ學校にと志す。行きかふ人は澤なれど、そゞろにたのもしきは、やがて我ぉほしたてんうなゐ子のむれ、呼び留めて案内求むれば、聞くより早くハイと許うなづきて、導くは萱葺の門。聞きしにまさるあさましさに、再び驚く我胸、暫しぉさへてためらふ門の內、軒端に櫻の一本、み山下しの春風に詩情を語りてか、道は落花に埋れたり。身は夢より夢に入る心地して、靜に踏み行く花の上道、足音にや驚きてけん、寂寞たる階上、破窓をかすめて聞えし、樂器の音は、はたと途絶えぬ。

* * * * *

外には「私の席の先生がぉ出でになつた……」とうなゐ子の呼ぶ聲、輕げの下駄の音とともに、西に東に薄れ行く。

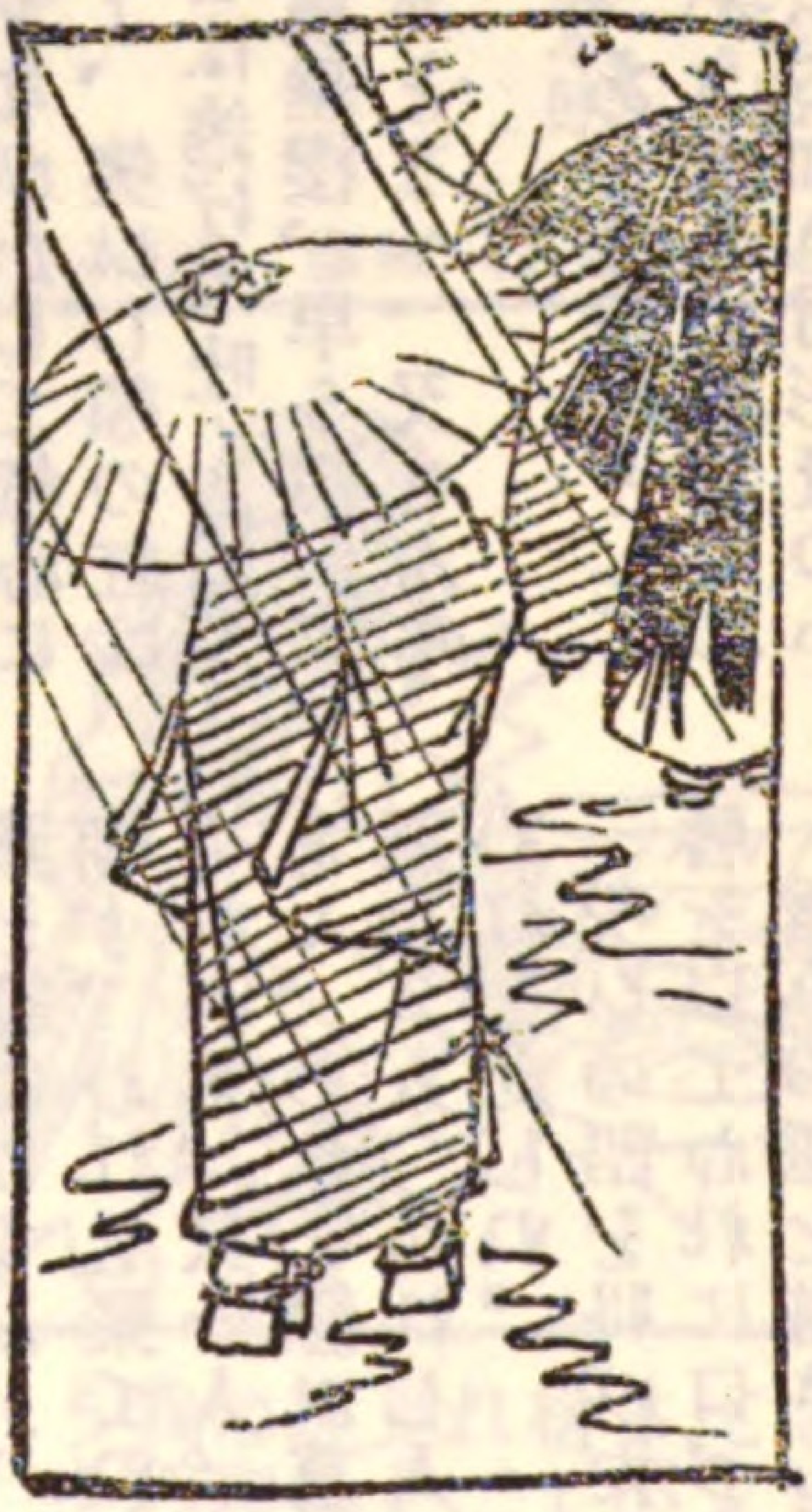
あゝこれぞ今や二年の昔、我革命歷史の第一頁！、思へば我今日の舞臺のはな道なりけり。

（評）　塵俗を絕して小學敎育の大使命をつくせる作者の境遇欣仰すべし。

○誰が子

山形　秋葉子

寒く冷たき風ふきすさむ冬の日、門に立ちて調あはする、歌聲すなり、あはれ火桶かきいだきても、堪へがたきをと、耳そばだつれば、歌は石童丸のそれなりけり、何とはなしに、哀を覺ゆるまゝに、出てゝみれば、まだうら若き姉妹とみゆる二人の少女子の、姉は胡弓かなでゝ、妹は歌へるなり、衣の色の褪せたるに、重ねたりともみえず、はきしめし草鞋も、半ば破れはてゝ、弓もつ手の赤う凍え、歌聲もふるへがちなるにぞ、あまりのいたはしさに、呼びいれて火をあたへ、餅など二きれ三きれたふべさするに、さすがにためらふ様、いやしげにもみえず、年はいくつぞ名は何ぞと問へば、姉は十五名は春、妹は十二夏と答ふ。父君はいますかと問へば頭ふりて、さすがに打ち沈みぬ、母君はと重ねて問へば、こたびも又かすかに頭うちふりぬ、其うつむきし面の色はたゞならで、目にはきらめく露の一しづくもみえぬ、さては孤兒なりしよ、いぢらしの者や、父も母も今はいづこにかさまよへる、はたあの世にか、春も夏もとことはに榮えよとておはしめし、名ならんに、門邊にたちて奏でよとて習はしめし業にはあるまじ、なほも問はまほしけれど二人の打しほれたる様みれば、口にもいでず、たゞ物など多くあたへ、草鞋も新しきを購へよと、價もめぐみやりつ。あまたゝび頭さげてゆかんとする姉妹を、今一度とよびとめて、仲よく暮せよ、爭などすな神は正しきものを守りたまはんにといへば、姉は妾もさ思ふなりと、答へてさびしくほゝゑめるに、いひしらずかなしく、妹にも姉上の事はそむくまじきものと數ふれば、たゞうなづきて二人はつひに、出で行きぬ。



うしろつき（賞外）　小石川弘子

我はその行方をみおくりて、あはれ父なき子等は、いづこにか行かんとする、母なき子等は、いづこに宿らんとするかと、思へばいとゞ胸せまりて、吹雪のまひこむもしらでたゞすみぬ。

（評）平々淡々たる中に溢るゝばかりの同情をこめたる、老手腕といふべし。

○病床の一夜

廣島　堀田温子

孤燈小暗き春寒の床、外面に魔の忍び足するやうなる春雨の音幽かに……不治の病に悶ゆる妾、恐怖の胸のひしと抱かれて、おゝ、心細さの今宵や、友戀しく人戀しくて愁思冷たき胸に湧くよ。あはれ悲しきこの痩軀、今となりては萬事休しぬ、さては希望も光明も疾く葬られて、暫し死の手に弄ばるゝ果敢なの身や、下げ髮の昔春風かをる花のかげ、聲朗らかに「幸ある乙女」を歌ひしは夢よ、紅のリボンなびかして無心に微笑みつゝ、ラケット持ちしは夢よ、笑ひし頰の紅は去りて咳にわなゝき、歌ひし唇の香は逃げて吐く血潮。さらばよ、年々眺め明かせし庭の枝垂櫻、早う梢かざりて、おゝ、せめては薄命の主をおとなへ、又こん年はえ契らじよ……。

ふと外面に絹を裂くらむ幽鳥の聲、あとは寂然として今は春雨の音も絕えつ。妾はよろめき立ちて扉あくれば、春雨降り止みしあとには、愛ふる如き月影ほのかに、灰白くおぼつかなき光を投げて、空氣は息をひそめつ、靜かにいと靜かに夜は更け渡る。

ふと眼に入りし庭の白椿、花の姿の妙しさよと眺むるうちに、如何にしけむ、風もなきに、一輪の花瓣はらはらと崩れて、地に敷きぬ、あはれその果敢なさ脆さ、何れ劣らぬ我身の上もかうやと、淋しさのやるせもなうて、見返れば、いよ／＼細き燈に映る我姿此世の物かこの瘦れ。

（評）悲愴。

○おゝ我が人よ

相模　霧生かめ子

おゝ友よ。

われは嘗て多くの人によりて愛せられき。

されども、呪ひ惱みの言葉を口にし、罵り憎みの言葉を筆にしてより、世の人は凡てわれを避け、われを嘲り、われを棄てぬ。

されども、只一人。

あゝ、われを戀ひ慕ふ唯一人の君は、さにあらざりき惡しき人、汚れし人とわれなりし時、彼女はいよいよわれを愛しぬ。

呪ひの語を叫びたる時、彼は愛に燃えにし其美しの唇を以てわれに口づけしぬ。

憎みの語を書きし時、彼は妙なる暖き思をこめながら、その淸き手もてわが手を握りぬ。

かくて彼がうるはしき戀の思は、春の泉の如く、夏の晨の露の如く、惱めるわが心の上に、さながら新しき命となりて溢れ來つゝ、わが胸は初めて淸くなりぬわが思は初めて暖かになり、われは初めて美しく尊くなりぬ。

あゝ友よ、わが人よ、猶の世の人の前にはわれは惡

魔ならん、されども此戀しの人の前には神の御前に立てるが如く、われはかぎりなく清くよき人なり。

げに、われの如何なる人なるかを知るものは、あゝ神とたゞこの戀人のみ。

戀やかくの如く尊くなりぬ。

愛やかくの如く世界となりぬ。

おゝ友よ、

われ嘗て、大なる詩人が「わが世には戀よりも尊きものあらず」と言ひにし言葉を見たり。

されども、今初めて、その何の意味なるやを悟り得たり。

（評）神聖なる戀は實に尊きものなるかな。
又曰、この文の内容の示す如く疑はくは作者「名のみの女子」ならんか。

○ぬれぎぬ　　因幡　みどり子

君!!!思ひても見給はれかし。一つ甍の下に居て晝の七時間も席を列ぬる方と苦り切りてのみ居て事務の執れると思し候か、いかに控ふればとて日に五度十度の言葉交すべき要事もあるべきには候はずや、とりわけ、彼君は磊落にて、妾をも異性と思し召さぬかのやう快濶に話し給ふを、いかて知らず顔のなり申すべき。

さもあらんは第一、禮をもて本體とする女の道に戻りはせず候か……まして妾は意地强けれど情には弱く侍り、心より我に懇ろなる人の言葉、そぶりには、あはれ何物をもさゝげてこれに報いんと思ふ性にて侍れば、萬に優しき彼君をば、遂に見ぬ兄上とも懐かしくて、時には打ちとけたる笑ひ語りもし候はん。さるを一々青き眼鏡もて見つむる人のありとは、あまりに酷に候はずや。妾は始めかゝる忌はしき聲を耳にせし時、

稚い人　（賞外）　仙臺　初山みきえ



あまりのおぞましさに、あまりの情なさに、氣も遠くなる樣に候ひき。斯くてよりは一すぢに田舎童べのなめげなるが腹立たしく、ある時はこの鞭なげ捨てんかと思ひし事も侍りしが。さはれ、妾のつゆ浮きたる心ならぬは神も見そなはし給ふらんを、かくて一月も經ぬらんには、火なき處に煙はたゝぬの理、おのづから此厭はしき名も消え、やうやくに悟り得て……思へば愚にて候ひき。今斯く悟り侍りては、そのかみ、口をも縫はまほしき迄憎かりし人の言葉も、やがては心の玉を研かん神の御聲とも聞えてなかなかにたのもしう、さるからに、厭はしかりし日々の勸めも、今は却りて新しき希望に充ち滿てる樂しき生活と變り侍りぬ。君!!!妾がいかにこの濡れ衣を雪ぐかを遙かに見そなはしてよ、さらば。

（評）文亦洒脱。



巖谷小波先生選

特別第一等

桃咲いて貰り物多き小村かな　福岡　獅子鹿初代

〔評〕必しも斬新ならず、而も奇を衒はぬ所、優に大家の趣ありてゆかし

特別第二等

菊分て夕一詩を得たりけり　奈良市押上町二三 藤田藤子方　西湖女史

〔評〕高士の風、敬すべく慕ふべし。

特別第三等

雪解や雛の尾の地に垂る、　大阪富島郵便局　梓よしえ

〔評〕雪後の景、一幅名工の畫に對するを覺ふ。

天

杣は寢て鶯の鳴く頻なり　岡山縣御津郡石井村　松本もと子

〔評〕一讀、深山に遊ぶ感あり。

地

朧月牛にをくれて戻りけり　横濱　星戸菫子

〔評〕車とも馬とも動かず、この牛千金に價す。

人

落椿（おちつばき）口碑に殘る窟かな　伊勢國田丸　小百合子

〔評〕古き窟も新しき心地す。

秀逸

海棠にてる／＼坊主濡れにけり　神奈川　萩原りん子
反古張の窓はづかしき櫻哉　千葉　小川花江子
明星や花喰ひちぎる一ト嵐　京都　房浦豊野
春の夜の紅つけられし小猫哉　陸前　尾形千代子
夕闇や花の中行く馬の鈴　安藝　中村東雲
故郷やその子嫁ぎて雛の宴　下總　紫雲子
花さげて耻かしい程見られけり　栃木　茂木靜子
春風や京て逢ふとの置手紙　千葉　小川ながめ子

桃咲くや椽にふくらむ絹蒲團　千葉　鈴木桃村
醉其角汐干の舟に殘りけり　越後　藤原睦子
白梅や見つけて寒き晝の月　茨木　川並はな子
舟下りて小さき足の汐干かな　越後　藤原利子
やゝありて雛壇のぞく地震かな　芝　愛子
此里の豪家の門や桃の花　下總　紅女
黃昏や醉て車の櫻人　千葉　高橋芳子
梅咲くや法師痩せたる奥書院　山口　山內靜子
千早振る神の階段梅香る　神田　柳子
雛に似し客を正座に迎へけり　高尾山　さゝなみ女
冬牡丹御園は閑に晝の月　淡路　三宅こつね
おぼろ月梅花の精を見たりけり　船懿里　楓女史

折々は人力車に觸れる糸柳　加賀　西野かすみ子
春風や赤い湯卷のふかれゆく　兵庫　土井勝子
夕鴉飛び去りて天將に雪ならんとす　磐城　井上よし枝
とま舟に米とぐ音や朧月　北總　葦花女史
鯉つりも蟹つりも居て日の永き　磐城　佐藤榮子
ふんばつて流れ流るゝ蛙かな　埼玉　小林きやう子
流行のリボン愛らし辻が花　栃木　高田逸子
桃五本柳五本の小庭かな　八王子　小池つれ子
朝さむや雀ふくるゝはれつるべ　京都　櫻井白蘋
菜の花や染めて見たいは不二の山　上總　淡女
初午や靴買ふて行く里の人　茨城　服部きよ子
夜の櫻束帶の人まじり見　千葉　鈴木文子
うつゝなの八幡鐘や古衾　豐後　林峯子
山里に春は屆きぬ櫻鯛　埼玉　伊東香子
大刀風に梅の薰ずる艆かな　品川　小林のぶ子

蝙蝠や妾は酒買ひ油買ひ　京都　淺野梅子
初午や舟につき來る穢多の犬　淡路　石田仲子
靑丹よし寧樂の都の花盛り　大和　三宅しん子
どの草が螢になるぞ春の雨　尾州　八重櫻女史
宣長の咄も出たり初櫻　千葉　須惠子
冬がれや鳥はあちら向ひたまゝ　陸前　髙山靜子
猿と熊木の實とりかへ植えにけり　兵庫　安齋あや子
寒椿無緣の墓に手向けり　北總　柳田白ゆり
人に醉ひ花に醉ひする花見哉　大分　古屋すみれ女
露行脚もよき宿りせん朧月　豐後　甲斐ふい子
給桑番は鄕の彌生の景色哉　飛驒　稻葉濟子
小袖着て花の吹雪を浴びんかな　群馬　荒垣八重子
菜の花に黃を流したる野川哉　出雲　河內千代子
陽炎や鷄遊ぶ草の上　豐後　じん子
山越して菜の花十里緞きけり　千葉　淡月女史
峰の雲白雨提げて走りけり　伊勢　さい子
山吹に歌詠み初めし男哉　伊勢　島山たつ枝
律院にうぐひす啼かぬ一日哉　千葉　乙部きく子
蜻蛉や眠れる牛の角の先　伊勢　石渡信子
電燈にやゝ風見ゆるやなぎかな　上毛　中西梅園子
摘草や男も交る京はづれ　大阪　和田末子
藪越しに狐の聲や月おぼろ　千葉　三浦園江
帆を立てゝ遊ぶ貝あり春の風　豐後　梶まさ子
雜報や戰勝の記事花の記事　茨城　平山民子
春の川調べもゆるく流れけり　上野　綿引はや子
初雪や蛇の目の傘の人遲し　廣島　佐藤露子
狐火や枯野を迷ふ雨の宵　千葉　野邊の紫
畑人の若葉を手折る暑さ哉　神奈川　すみれ女
永き日を鸚鵡に唱歌敎へけり　備中　萩原八重子
嗚嗚くや夕月山に入らんとす　石狩　佐藤芳子
朝窓のあかるき日なり桃の花　五井香

手の甲に小海老はねたる根芹哉　千葉　紫女史
秋の雨配所の軒を叩きけり　千葉　小川國子
青山の麓いろどるひもゝ哉　大坂　富永才子
見えわかぬ鏡の山や花曇り　福井　橋本喜代子
尼寺の春寒うして螢の月　茨城　小泉勝子
公園の銅像古し春の雨　伊勢　岡本いは子
踏んでも面白き野や春の草　秋田　黒丸登美子
夜櫻や粋なお客の御入來　岩代　佐瀨よしの
只今羽蝶とぶなり大手門　上總　森久子
牛引て童渡るや春の水　下總　たか子
長閑さや眞直に登る田のけぶり　長崎　上田戊子
百歩來て柳もゆれず夕霞　横濱　古山春枝
百舌鳥啼いて社の紅葉靜かなり　福井　井田白百合
菊作り今年御城へ召されけり　濱町　栗女子
宴果てゝ君送る夜の朧なる　伊勢　村山つれ子
菩薩刻む庵に春の風が吹く　下總　たか子
騎劍の幕を張りたる櫻かな　陸前　島山せいがん
雉子啼くや松を見越しの朝の月　富山　珠江女史
カナリヤのつがい囀づる金襖　石川　沙山可親
梅の月まだ居ながらの四の對　京都　澤秋さめ
年々や花相似たり雛の貌　越後　藤原歌子
朝の月櫻に殘る灯かな　備前　小林小好
閨の戸や夕淋しき花の雨　深川　山下文江
築山の頂揺るやなぎかな　栃木　増淵きよの
花すみれ佳人の沓の小さなる　福井　高柴小靜
緋桃咲く京の小家や古代雛　神戸　水越照子
福引の品に一座の笑ひかな　岡山　横山きよ子
雛見具して汐干の濱を歩きけり　磐城　藤原宣子
萩枯て石碑の殘る野寺かな　千葉　小高せい子
春風や船に居てさへ野の匂ひ　横濱　琴鷗子
鐵る國をよく火のおこる寒夜かな　神田　白鷗女史

湯上りの人美しき彌生かな　臼杵　紫泉女
犂々に貝投げ込むや汐干舟　越後　はな子
うたゝ寢の袖こがしたる火鉢かな　新發田　橋じゆん子
盗人の縛られて行く枯野かな　上總　さゞなみ
麥畑の果てに眺める白帆かな　栃木　木村しずゑ
老人の杖にとまりしとんぼかな　安藝　すゝき
福壽草領地見渡す御椽かな　小樽　岩谷緑子
もみぢ葉を日記にすさむ旅人かな　和泉　天掘蝶雨
足袋ぬいて汐干の舟を下りけり　中頸城　藤原しげ子
溪間に數十丈の氷柱かな　上毛　眞砂露子
連翹に源氏讀む灯の更けにけり　北豐島　朴蝶子
水鳥や水に映りし松の上　下總　山田まさ子
濱寺に汐干の人の晝餉かな　越後　菊子
北風や雲うつくしき西の山　陸中　黒澤美江子
朧月馬を洗うて人歸る　備前　おちば子
城南に白帆霞むや春の川　下野　みしろ
行道を知らぬやうなり春の水　神奈川　隅子
暖く搖籃に稚兒眠りけり　中頸城　藤原春子
十尺の崖に五尺の氷柱かな　下總　長谷川安子
手のそばにばかり浪あり春の海　神奈川　菫子
朧夜や愛の女神のさゝめ言　横濱　花舟子
雛寶に抱かれて桃を折る兒哉　千葉　桃むら子
讀みかけし物の草紙や春の月　船穂　楓女史
春風や小牛放ちし野の小家　豐後　溪の月
今日もまた吉野に暮れて春の月　長生郡　小川まさ子
白梅に神馬嘶く社かな　金澤　かしく
蓋張つて籠に馴染ぬ落葉かな　印旛　せい子
花の窓歌の聖の覗きけり　上毛　すみれ
米洗ふ川に椿の流れけり　南總　幸子
仁和寺の椿に遊ぶ目白かな　東京　黒ゆり
大原女が草の戸ほそや春の月　豐前　波多江霞子

消息文

天 ○花束を拾ひて（友の許へ）

大阪市南區鹽町壹丁目　つゆ子

誰が手に摘み取られて、結ばれし花束に候ふらむ、無慙にも道傍に捨てられて、やがては人馬の土足に踏みしかれむ様なるを、今朝そゞろ歩きの折見出して拾ひとり候ふ、花の心を思ひやりては、なか／＼に憐れに堪へられ申さず候ふまゝ、その中の一片、今かく封じ込め、御手許にまで送りて、思ひやり深き御許様のみ心に訴へ申候。

御覧の通り今こそはかく色褪せ、香も衰へぬとはいへ、之も他の花と同じく野邊に咲き誇りて、夕には星の涙に蘇り、朝には旭の光にはえて、詩人の筆にもうたはれ、またある時は憧れ寄る美はしの胡蝶に甘き戀囁かれし事も候ひしならんに、今かゝる淺ましき姿となり果てし花の身こそ、あゝげに憐れには候はずや。あはれそのまゝ野邊に生ひしめなば、心ゆくまで咲き誇るべき身なるに、その盛の色香をつみとりし人の心の誠に悋う思はれ候を、なほ其の色香の衰へし今、かく無慙にも捨てし心は鬼とも申すべき。この一事こそ今の世の人こゝろを表はして餘りあるものと存じ候ふ。あゝ妾等女の身はこの花にも似て、これを捨てし人こそ、世の男達に似候へ。世にはこの花に等しき運命の下に泣き暮す女は決して少なくは候ふまじく、やがては妾等もかゝる悲しき夢を見るやも計られずと思へば、口惜しさの涙止めんとしても止め敢へず候ふ。さはれいかほど恨めばとて怒ればとて、皆弱肉强食とやらんが世の常に候へば、到底詮術もなき事に候ふべく、誠に恨み多き世、悋き人心には候はずや。

今は情たかぶりて心苦しく候ふまゝ、こゝにて筆止め申候ふ、なほ申し殘りの數々は、この花篤とご覧の上御高察下され度、併せて御同情のみ言葉願はしう候かしこ。

（評）雄渾の筆、人情の浮薄を痛罵して餘蘊なし。

地 ○都の友に

千葉縣長生郡新治村桂　白井よし子

涙に濡れし袂を別ちまゐらせしは、なほ昨日の如くあ

ほゆるを、げに光陰に關守なく、世は又も思ひて多きみ冬の空となりはべるを、都わたりの御住居よ、いかに渡らせ玉ふぞ、こゝもとには、かた山里の習ひとて、日毎々々にすさぶ木枯の、おち葉ふきまく音すさまじきに、まして、あした夕、窓うつ時雨ならでは、おとなふ人もつゆ侍らず、みな柴の戸さしたれば、人すまぬ里めきて、あやしう色も香もなきながめなるに、たゞ炭がまのけぶり、峰のましらの聲をのみ、二なき友とたのみて、明かし暮らし侍り。ざるをよべの空より、み雪ふりいて、今朝なほやまず、荒れたるかき根も、築土のくづれも、玉しき渡し、さては前栽の木々も、中島の松も、ひとつ色に六つの花さきて、やり水の音も埋もれ、池の汀の水かゞみと見ゆるも、から畫など打ちひろげたらんやうをかしう、日頃のわびしさ忘らるゝにつけても、ひたすら御許のみなつかしう、もろ共に眺めたらましかば、いまひときは、興味も深かりなんなど、おぼしやられ侍るを、君には如何におはし候か、都の空には、上野すみ田と、名だゝる所おほけれど天ざかる鄙の續には及ばずとの、古句も忍ばるべければ、かくは筆とり申し候かしこ。

（評）田家の雪景観るが如し。

人

○梅だより

三重縣安濃郡新町
古河山田粂五郎方　山田ひさ子

阿漕ヶ浦に白帆の見えやらぬ日はありとも、おん身のこと忘れ侍りし日は無之候に、如何なればかくも御無沙汰しつらんと、我れと我が心を叱し筆走らしつ、例により當地の春景色一つ二つ書い綴り申し侍り候、春とはいへ未だ寒う候へば冬と變りは候はねど、梅のみはゆかしう春を報じ申候、當地にて其が名所とすべきは乙部の常妙院と公園とに候、中にも常妙院は古びたる寺に候へども春の神は偏頗もなう此等にも訪づれ、其が落朱の古山門巍然と聳え、老松雲を凌ぎて緑こまやかに、西國八十八ヶ所に擬したる石藏の間々なんど、かぐはしき春の風吹きて、佇む禪僧の衣に梅のちりかかるなど、えも云はれぬ詩景にて候ふ。次に公園は又格別手入れも宜敷く候へば近頃頗る風致に富み申候、先づ傘の臺に登りて池の畔り倶樂部のあたりみまはし候はんか、紅白の梅咲き交りて、あるは濃く、あるは淡く、仰げば星の如く、俯せば谷間の殘んの雪とも形容すべけんかと存ぜられ候、猶書きたき事山々侍れど餘りくど〳〵しう侍れば、之れにて失禮仕るべく候かしこ。

（評）清香人を襲ふ。

秀逸

○寒中外國にある友のもとに

大阪市　富永才子

ゆく駒のひづめの跡のたまり水それさへ氷る朝嵐かな

とは、げにきのふけふのことにて御座候、あたゝけき父母のみ許にありてだにたへがたき寒さを、海路はるけき外國におはします御身のいかにしのがせ玉ふらんと、折からの雪につけ、あられにつけ、思はたゞたゞなつかしき御上にのみ走り居り候、何卒御暇には近頃の御様子御もらし下され度候、此方にては格別御耳に入るべき程の變りたる事柄はこれなく、皆々無事にて、打より候へば必ず御許様の御うはさのみ致し居候。

思ひいづれば去年の春、御許様の御愛賞をうけ、御歌まで賜りたる園の梅、菅公ならねど君まさずとも春を忘れず、今年もいみじう匂ひいて候まゝ一輪とりて封じこめ申候、それは此寒氣にもめげ玉はずひたすらまなびの道をはげみ玉ひて、盛大なる彼國の女學界に、此花の如き馥郁たる芳名を放ち玉へとの心にて御座候、尚御如才なくは候はむも必ず／＼御身疎略になし玉はずあくまでも病をふせぎ玉ひて、素志を貫かせ玉はんこと今の妾が希望にて御座候、まづは硯の海の氷うちくだきてかくなむ。

（許）友情掬すべし。



畑の嫗（選外）　京都　生咲みどり

○遠方に在る兄の許に

備中　龜山まき子

御返事申し上げ候、母上は御許よりしばし便りなかりしを案じゐたまひし折柄、二月五日御郵送に相成候、小包、書狀七日着いたし候、其節母上にはいつもの如く氏神に御参詣の御留守にて、妾はかねて兄上より申しこし遊ばされ居り候、單衣（十字絣、浮け織り）機上げの準備いたし居り候。母上御歸り遊ばされ大喜悦にて早速小包をお開き遊ばされ候ところ、御地名産の漬物、鑵詰にて殊の外の御機嫌、晝飯も例よりは少し早く終へ申し候、豆の漬物は初物にてお氣に召し七十五日生き延びたりと仰せら

れ近頃になく御食事もすゝまれ申候。お手紙は一通り讀み候後又お手紙につき御地の模樣一一お話し申し候ところ、いつぞや御送り下され候名所繪をとり出し何かと詳しくお問ひになり御返事にくるしみ申し候。

四月末御歸りになるとの事にて母上は其節必ず〱豆の漬物土產に賴むこと、風邪にかゝらぬ樣にすることを書き添へ置けとの仰せに候へば、お忘れあらぬ樣くれぐれも祈り上げ候かしこ。

(評)洋々として春海の如き家庭のさま想見するに足る。

○凱旋すときゝて夫の許に

近江　始子

今朝嬉しき御便り拜見致し只涙のみさしぐまれ候。漸く家內も春めき誠に喜ばしく存候。如何に命棄てにと口にこそ申せ心は同じ人の妻淋しく故里に取殘されし悲しさには只々神を賴み參らせ御武運の長久をのみ祈り居り候ひしに其甲斐ありての今日の嬉しさ今も夢にはあらずやと卷き返しては御文拜し上候、想へば長き冬の夜半閨の戶叩く落葉の音に目さめては今更のごと御地の戀しくて抱きたる兒の罪なき寢顏みつむれば何夢みてかホヽと打ち笑む口元のいみじうも君に似たるに得耐へで一雫其柔き頰の上に、おゝ心弱かりしと衣の袖に拭ひし事も實に幾度にて候ひしか、あゝ過ぎにし方の何事も皆夢と消え去りしこと嬉しくもうれしく存候。去年の秋「餘りの優しさに摘みとりぬ、されど優しき人につまれてこそ花も本意ならんをかゝる無骨者の手に折られしこそ氣の毒なれ」とて御歌そへて給はりたる野菊は其儘栞といたしおき候、いかに摘まれし主を待ち侍らむ、一日千秋の思してまつは妾のみには候はぬを、御自愛遊して美しき御姿一日も早くと願上候、今宵は望の夜、月夜には必ずとの給ひしを今頃は定めし思をこめての御すさび玉ふらんと存候いざさらば妾も琴とりて……

(評)望月の缺けたることもなき嬉しさに琴の音も一入さゆらん。

○繪葉書にて都の姉に

上毛　河內　汀柳子

姉樣、今日妾は、みんなと貴船溪へ行つたの。淸い水はさら〱と流れて、こゝには妙な巖が躍り出て居るかと思へば、あそこにはまた奇しい岩が峙つて居る。ほんとに愉快でしたよ。そして渡守を呼んだら、向の柳の蔭から「オー」と答へて、仙人の樣な老翁がね。此の書はその景色よ。(第一信)

姉樣、これは、前の小池に菜の花が映つたところの書です。浮いて居る小舟は、春ちやんが造らへた附木舟よ。今惡らしい靑蛙がぽかり飛びこんだので、金魚は、

沈んだまゝ、まだ浮きません。（第二信）

春ちゃんは、いつも面白いのよ。此の花を澤山もつて草の上に座つて居るのが、春ちゃんてす。清らかな雲雀の聲を聞いて、「東京には雲雀はいないつて、姉ちやんはまあ可愛そうね」。何處からとんで來たのか、黄色の蝶々が、春ちゃんの蒲英公にとまつたの。春ちゃんはまた、ひとり言、「まあ、これを姉ちゃんに見せたいのね」。（第三信）

（評）文も亦可憐なり。

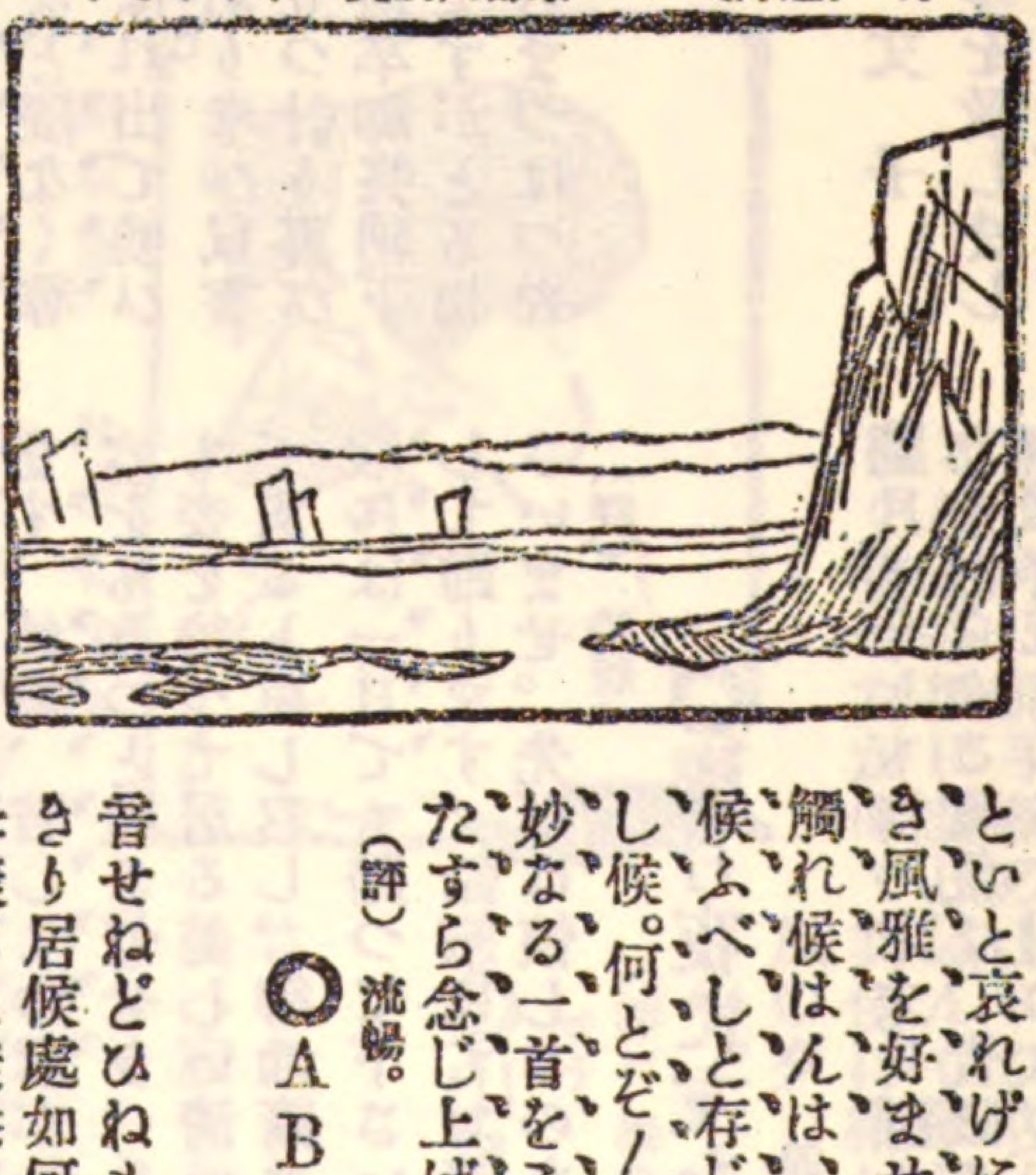
○蘭に添へて京の友へ

遠江　由井よし子

房樣と君との三人にて、若菜摘み申候久我の山は、はや冬の女神の御姿と變り申し、見渡すかぎりの銀世界、白皚皚の此頃、さぞかし峯の一本松も徒然ならん。幸ひ今日はいつになき好日和なれば登山してなつかしの友垣を訪づればやと、例の房樣の御誘ひにさらばと支度もそこそこ、朝日に照りはゆる雪ふみくだきながら、山頂に登りて松が根に腰を下せば、これはまた一しほの眺めに、亂るゝ雲を望み申し、懷かしき君のいまさぬを歎き申し候。そのかへるさ、ふとの匂ひに何心なく雪かきのけ申し候へば、夢より覺めたらん樣なる野蘭の花、楚山に玉を得しといふ昔の人の心地もおしはかられ、寒さも忘れて摘み採り申し候。此花半開に候は四五日前の溫かさのため衣を脱ぎて此の世に生れ出て申し候ものならめど、何事もわきまへぬ無風流の妾にさへいといと哀れげに候ものを、まして君の如き風雅を好ませたまふ詩人の溫き御手に觸れ候はんは、いかばかり此の花の幸に候ふべしと存じ、君が御前にまゐらせ申し候。何とぞ〳〵御情の御筆を染められ、妙なる一首をこそと、花の心に代りてひたすら念じ上げ候かしこ。

（評）流暢。

海（選外）　京都西洞院　木下りき子



○ＡＢＣかるたを贈る文

磐城　佐藤榮子

音せねどひねもす細雨霏々として降りしきり居候處如何御暮し被遊候やらむお祖母樣には徒然に得堪へ給はず嘸かし今頃はあどけなき童あまた呼び集め給ひて例の軍事雙六など弄び給ひつらむさて英學界新年號附錄ＡＢＣかるた乘てより御申越に相成居候ひしが何處へやらむ紛失仕りて度々母上などにも捜索御依賴申し私も限なく尋ね申し候ひしが誰とて尋ね出しゝもの無く一向に分り申

さず候ひしかば不本意乍ら打捨て置申候處弟のいつものやうに眼許り光らせ乍ら書齋に入り來り本箱のあたり打散し乍ら國語讀本なくて叶はぬに姉上尋ね給はれと果ては泣き出しさうなる顏して申し候にかばんに入れたるにてはなきかと問へど只頭を振るのみにて佇み居り候に妾も氣の毒と存じ候ひて本箱机など隈なく尋ねやり候ひしにふと反古の中より讀本顯はれ出で候ひきABCかるたはゆくりなくもその中にあり幸ひ鼠害をも被らずこれ有り申し候ひしかばとび立つ計り喜び候まゝ今朝直に御送附申上まゐらせ候間何卒御笑納下され度春雨のつれづれを慰めまゐらするよすがとも相成候はゞいともいともうれしきことになむまづはつたなき筆にてあら／＼かしこ。

（評）反古の中より出でたるに趣味あり。

○春の野にて都の姉に

和泉　竹叟文子

懐かしき姉様よ、妾は今姉様といつも散歩を致しました小川の畔に昔を偲んで青草に横はつて居るのです。蓮華草や菫や蒲公英の花をたばねて、この清らかな小川に浮べては流れ行く花束を趁うて家へ歸つた事もあるでせう、それを思ふと妾の邊りに咲き亂れて居る花も寂しい樣に見えて、眼をとぢますると時々小石にせせらぐ水の音も姉様のお琴の調べの樣にきこえて、ぢつと水を眺めて居りますると、寫る妾の顔が姉様の顏に見えたり致します、けれども寫る顏は只だ一つで、物足らぬ樣何とはなく寂しい心になります。

今夢の樣な雲が美くしい空を、東へ／＼と流れて行きます、姉様、若しこの雲が途中で消えずにゐたら都の空をもきつと通るでせう、そしたらあの雲は母様も妹も妾を待つて居る美しい清い故園の空を通つて來た雲であると思し召し、御油斷なく勉强遊ばして四月の休暇には一日でも歸つて下さいよ。またこれから花を流して歸ります。鉛筆にてお讀み惡いでせうがお免し下さいませ。先づは懐しさのあまりに、匆々かしこ。

（評）淸新。

○朧月夜に友を招く

近江　竹村たけを

朧月は今しも梅の木末に懸り候へば、山も森も林もありとあらゆる萬象は、皆眠るが如くにて候。我が小家の裾を流るゝさゝ川の水ゆるやかに、流の末には笛のこゑおもしろう聞え候は、人か神か、そは人と思はれず候よ。徐ろなる風そよ／＼と吹くたびに、梅花の香四方にちりて、いと嬉しき心地せられ、知らず／＼庭に足のはこばれ候。

おゝ、朧月は早や山寺の森をはなれて、庭の古池に影

を落し候時にて、今が丁度よき頃にて候。我が村の名物なるきび團子おめにかけたく候ゆゑ、すき腹にて早や〳〵お出で下され度、庭の床几にて待ち居り候かしこ。

（評）結句ありてはじめて陳腐を脱せり。

○櫻の下にて

讃岐　茂子女史

あね樣！今年も彼の丘の櫻は咲きました。

其美しい、艶々しい花、それから泌るるのでせう、幽な薫がうつら〳〵と、人を醉はす樣であります。

書齋の丸窓から覗きますと、丁度白雲の一片が、春のみ神でも乘せて來たかの樣に、青々萌え出でた若草の中にふはりと浮んで居るのです。

今！私は其櫻の下に彳んで居ます。

ふり仰いで見れば、やはり艶々しい花です、けれども何處とはなしに淋しい色が、ひそんで居る樣に感じました、姉上樣!!!と私は叫びましたが、應ふるものはやまびこのみです、姉樣と二人て樂しく、此花を見たのは、もう過去となつてしまひました、あゝ、其時の樂しかつた事が、又と繰返されませうか。

花が無い時、花が咲いた時、いつも此處に來ては、慕はしい姉樣を現の樣に、思ひ浮べて、やつと、慰めて居ました。

あゝ今、此手紙の上にひら〳〵と、花瓣の一片が……これを手紙に封じ込んで置きます、丘の櫻が如何に美しく咲いたかは、其色に察して下さい、そして雨の夜風の夕、此一片に私の心を偲んで下さい。

（評）無心の花はなか〳〵に君が心を語るでせう。



おや何處へ（還外）

熊本市　財津ますえ

○山里より古里の友へ

伊勢　濱出きみ子

さらさらと軒端に音づるゝ木枯の聲さへ寂しきに、老松の梢に登る月を見てはいとどう悲しく、一人越路の空のなつかしう偲ばれ候折柄、いつも乍ら御美はしき水莖の跡にて世にも嬉しき御情の程仰せこされ、只々御慕はしうて繰返し繰返し拜し參らせ候。此の頃君には御身恙なうて日毎學びの庭に敎へのむちたれさせ給ふとか、また御いつくしみ深きかぞいろの君の御許に朝夕の事など共にし給ふ由、嗚呼、身の不運とは言ひながら猶寂しくかかる山里に暮す身

の、友とては只峯の松風細谷川の水の音のみに候へば、中々に御あたり戀しうて御羨しさは、嗚呼とても少さき妾の此の胸にては、六寸の此の筆にては、言ひ盡されず候をまして雨戸に音なふ嵐の夜半など、さめたる枕に妻戀ふ鹿の聲、さては遠寺の鐘の響聞き候ては、ふる里の俤はさへぎるに由なく、たらちね戀し、友なつかしの念は止む瀨もなく涙川の流れ行く淵ぞ哀れに候、さるにても去年共に植ゑにし秋海棠の今年も愛らしき花持ちしとて、主なき花の心を憐れみ給ひ封じ込められし御心の程、あはれ妾には花にもまさりて優しう感ぜられ、しばしは嬉し涙にむせび候、今雨後の秋月は一點の汚れもなく淸く澄み渡り、訣別の夜の偲ばれ候て妾の胸はみだれ候、筆もふるへ字も涙ににじみ候、ゆるし給へ、只なつかしう候。

（評）友なき他郷の空の寂しさ、あはれ深し。

○親しかりし友に

伊豫　白百合

懷しき御玉章拜しまつり候、そはいたく空打ち曇りて物悲しき夕、妾は例の如くこゝ古里なる病の床に打臥して、物思ひに沈める時にて候ひき、嗚君よ妾は泣きぬ、ひた泣きに泣き侍りぬ、されどそは嬉し涙にて候、君と妾の友情が少しの誤解よりして全くと絕えしを、熱愛こもれるみ文屢々送り給ひて再び元の友情を温めんとの仰せ、そは眞にて候か、誠に夢の如くに候よ、げにや君と妾は同じ級の中にて最もよく意氣相投じ、果ては姉妹も及ばぬ交りを結びて、趣味も嗜好も性質も境遇も相同じく、出づるにも入るにも實に影と形の離れぬ二人、心なき他の友はこをいたく羨み給ひしとか、然るに嗚思へば悲し四月二日妾は初めて君の妾に對する友情のさめしを知りき、嗚其時よ妾は如何に泣き如何に嘆きしか、君と常に樂しく遊びし柳の下にて、而して其日の日記には「嗚妾誤りぬ、斯も生存競爭の盛なる世に於て眞の友、生命も惜しまざる友を得んとして苦しみしは實に愚の極なり、今よりはたゞ獨妾が良心の示す所に從ひ、神のみ守りを得て兒童敎育の神聖なる天職を果さんのみ」と記し候ひしが、我が理想の友をかばかりの事にて失ふは本意ならずと直に思ひ返して、其後は君の無情に逢ふも少しも恨み申さず、たゞひとへは元の温き友情にかへらん事を望み、其事のみを計り候ひしに、運命の征矢のはしなくも妾が胸を貫きて、悲しき病床の人となりしより、親しき寄宿舍を辭してこゝに一年、長く淋しき日を送り、其望も遂にうたかたの水泡と消ゆべしと嘆き候ひしに、君が今までの疑心を去りて元の優しき御心にかへり給へる、あはれ謝し奉るべき言葉なく候、嗚君よ妾が願はこれにて足りて候、のたまふ如く此後は淸き淨き交際

をして互に一點の疑心なきに至り、君が無二の信友と相成り申べく候、既往は問ふべからず悉く濁れる心と共に水に流し申べく候、餘は彼の歷史ある柳の下にてきこえ上げ參らすべく候かしこ。

（評）一たび絕えにし交の再び結ばれし嬉しさもこそと。

○故鄕なる吉野の友に

滋賀縣　辰井琴子

京の山々のどかに包む霞に、紫野の若草がくれを行く水のそれと見らるるまで春たけて候、ましてや、吉野路の見る目彩なる花里にて候へば、身も心もすゞろ浮き立たゝんは人皆と察し參らせ候、佐保姬が粧ひの衣とて織りなされし櫻、あるは緋桃白桃なんど、今を盛りと咲き傲り候ふべく、夜毎々々寢ねがての友ときゝし笛の音の縷々として餘韻を傳へては、さらでだに、情けもろく人なつかしき御許樣の、友と共に在らばと偲び給ふ御心さてこそと、山、川遠く隔て候身も同じ思ひに他所ながら袖をし紋り候、あはれ去年の春四つの袂をつらねて圓山の公園にそゞろ歩りきせし折、何をか契り候ひし、あゝ恨めしきは浮世にて候、日毎春の譜洩らす鶯の美しき音きくに堪へずとこそ思ひやられ候を、今日は學び舍より師の君にともなはれて琵琶の湖の邊りに旅行致し候まゝ、君だに在しまさばと、いよゝ慕はしき故鄕の空、遙かにふりさけ見つゝ雁の音づれ參らするになむ。あはれ今宵はしも花見の都人が手ずさびの床かしきヴァイオリンの音きゝつゝ時ならぬ袖時雨にありし昔を忍びておはすらんか。さぞや。

（評）圓熟せる筆致。



春の野邊（選外）　越後矢代田　本多きみ子

○病床より親しき友へ

津市　元子

澄樣!!!

あくまで靜けき物凄き夜にて候かな。君はいかに〳〵この夜を過して居給ふや。必ずお好きのヴィオリン肩に、廣き御庭の池の彼方（あなた）例の櫻の木の下（もと）に佇み居給ふなるべし。柔き御手の、弓に觸るゝよと見るまに靜かに奏で出で給ふ曲は何「戀の賦」?オゝ君!その絃の一絃、あわたゞしき響と共に、斷たれはせずや?見給はずや君!藥（くすり）の香高き此の病床を通じて、眞白きカアテンの蔭にほの白ふかゞやく半絃の月!私——病になやむ子——は、限り無き幽靜と寂寥の感に打た

れつゝ、半ば死の神のみ手に抱かれ居る身を、しづかに起しつ、なやめる双の肺、ひしと計り押へて、今此の偉大なる自然の夜の景色に對すべくベッドを離れ、危き歩みによろめきつゝも、冷たき窓のグラスに、寄りかゝり申候。あゝ靜けき夜!!! 物凄きまでかゞやく半絃の月!!! あゝ此夜！此夜！寂みと、憂とに蔽はるゝ冬の領!!! 何とは知らぬ泪、續いて幽かなる微笑みのあとは對するグラスに殘りたるにて候！ふとふり仰ぐに又しても冷たき／＼泪は、やつれし頰に淋しう傳はりて……、淸き月に向ひては、流石に涙と微笑みの、一つとなりて、詩と化したる事もありしを……、果敢や今の吾には歌なく詩なく、はた文無く、唯云ひ知らぬ感謝の念に、想はず悠久なる天を仰いで、祈るのみに候。其處に人生の苦悶無く、其處に懷疑の念無し……。
おゝ今宵は六日の月！、死の宣告與へられて此院に入りしも去る月の六日の夜！、それより早一ヶ月を經る今日、未だ死せず、吾まだ死せず……、幸か、非ず。不幸か、非ず……、何!?!
「餘りに冷えなば……」と、誰やらの促すまゝに、そと窓はなれし――双の腕は依然として、肺の上に置かれ候て――刹那、吁その一刹那……、私は、餘りに弱き子にて候ひき、カッとばかりに咽き上る一塊の鮮血!!! そのあとは少しも覺え候はず、然かも危き命は又しても、保たれしにて候。
おゝ、いつしか月の、西の窓にかゞやくよ！。

＊　＊　＊　＊　＊

戀しのみ文待ち入りつゝ……漸々こゝまで、たどり申て候……
ちさき胸より溢れ出でんばかりの思は、何も／＼皆この文に囁き置き候へば、み忘れなく御聞取給ひてよ。さらば。

（評）幽遠。

○繪葉書

近江　柴原春醉子

第一信

兄上樣!! 此の書は、曈々たる旭日、東天に棚引ける、東雲を破つて、出でんとする處に御座候。

第二信

美代ちやん（妹）は、今「兄さまが、早く歸つて下さい、おみやげ頂戴」とて、紅葉のやうな手にて、白みかゝりし東の空を、手招ぎ致しをり候。

第三信

兄上樣!! こは、美代ちやんの寫生せし、紅梅の花に候。
美代ちやんは、今しお隣りの芙美ちやんと、日影暖き南椽にて、鞠をつき居り候。
二人が稚子髷の影は、妾の書をよみをる窓の、障子にうつりをり候。

（評）無邪氣なる遊戲、美代ちやんの如し。

廣津柳浪先生選

短篇小說

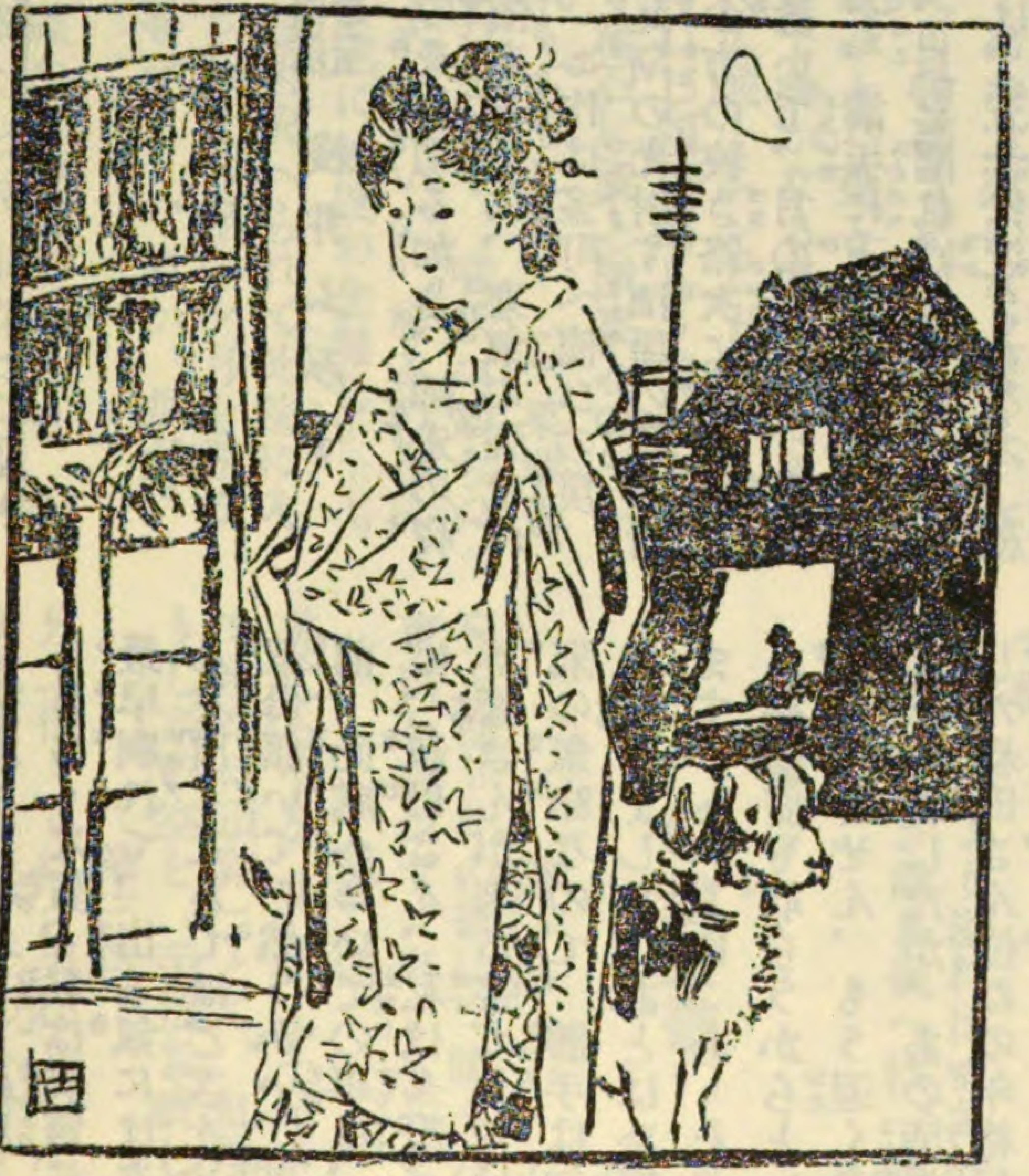
特別第三賞

○みづし女

三河國豐橋町鍛冶五五　淺井ふみ子

月冴えわたりて、霜吹く風の身を切る如き、師走の夜の八時過、此邊は宵寢が習慣なる上に、寒氣の强ければ、早雨戸閉したる家多し。お作は多町へ使ひの戻、凍てたる道にぱつと明るく瓦斯の光射す酒屋の角を折れて、三河町を小一丁、左の方の狹き路次に入れば、傍へに芥留あり、是にも霜置いて、月の光輝き、常には穢きもの丶穢くとも見えず、溝板に下駄音寂しく、唯在る長家の前に立止りて、戸を開れば、内には燈火薄明るく、誰方と出て來るは、五十に近き女なり。叔母さん、私よと言へば、お丶お作さんかい、まあ此方へお上り、とお作を長火鉢の前に誘ひ、嘸寒かつたらうね、と鐵瓶下して粉炭を繼ぎ乍ら、お前、彼家は居り惡くつて、お出でかい、と言ふに、お作少し皹の切れし手を火鉢の縁に掛け、笑顔して、あれ、叔母さんの氣の早い、那麼事ではございませぬ、小川町のお宅は旦那樣も奧樣も、それは〳〵お優しいお方、お繁さんもきさくな質、私は眞箇に住好く、未だ二三日なれど最早馴れて、出る氣にはなりませんもの、何のお暇なんぞ頂くことではござんせぬ、といふ言葉に詑あり。叔母頷いて、然うかい、其は何より結搆だ、したがお前、此處へおいての事は、奧樣に斷つたらうねといへば、叔母さん、私は多町へ使に來たのですよ、これはお繁さんが來る筈でしたけれど、那の人は昨夜から風邪の氣味なので、勝手は知らないけれど、私が聞き聞き參りました、あとはお繁さんが好いやうにしてくれます、といふに、あ丶それならばい丶悠然してお行き、お蕎麥でも取らうからといはれて、いえ、然うしても居られません、もう遲くなりますから寄るまいかとも思ひましたが、あの酒屋の少し向ふて、一寸逢ひました叔母さん位ゐの年格好の女の、後姿が餘り能う母さんに似て居たものですから、つひ在所の事を思出して這麼寒い晩を、私は火鉢の傍で居睡もすれど、お年寄られた母さんは火の氣もない處で、まだ内職でも

して居らつしやるかと思へば、身も世もあられぬ氣がして涙が溢れる程お痛はしく懐かしくござんすが、逢ひに行かれる處ではなし、せめては、能う肖た叔母さんのお顔を一目と寄りました、母さんは、身も弱いのに無理な使ひやうして、昨日今日の寒さに冷腹病んでは居ないかと、私は氣になつてなりません、と打萎る今年十七とはいへど、母の情にのみ暖まりてありし田舍娘の遙かに其膝許を離れては故郷の慕はるゝは無理なかるべし。叔母もともども打沈みて、あれまた此子が泣かせるよ、何の母さんはお前が思ふやうではない、お前が立派になるのを喜んで待つてお居てだよ、だから御奉公を大事にね、恁ういつては何だけれど、旦那樣は奥樣次第のものだから、奥樣の御機嫌を



損じないやうに、差出た事してお繁さんにも憎まれないでね、そして躰も大事にしておくれ、お前が萬一にも煩らつたら、お母さんが甚麽に心配するか知れない、それこそ大不孝だからねと殘る方なくいふに、あいあい、それは能う心得て居ります、それでは叔母さん私はもう失禮しますと暇乞すれば、まあ可いではないかね、と流石に今少し手許に置きたき思ひす。はい、有難うござんす、また近いうち參ります、大相お邪魔しましたと、庭に下りれば、然うかい、ぢやまた近いうちにね、待つて居るよと釣ランプ外さむとするに、いゝえ、履物は能う分りました、それぢやお寢みなさいましと外に出て、戸を閉めむとするに、粗末なる戸の閾にや乘りけむ、引けども動かず、もじ〳〵して

居るに。あれ可いよ、後で私が閉るからと言へば、それては濟みませんが何卒、まあ此風の寒いこと、左樣ならと名殘惜しさうにしほ〳〵と歩み出す。叔母は下駄穿掛けて忙しさうに軒下迄出て、お作さん一寸お待ちと呼べば、何か御用と引返す、用ではないが、と小さき風呂敷包を取出して、うつかりして忘れて居たけれど、是を前垂にでも使つておくれといふ。まあ那麼事して下さらないでも宜うござんすのに、眞箇に濟みませんよと受取り。一寸頂いて風呂敷を開き、月の光に昵と見て、まあ好い柄だ事、前垂には勿躰ない、帶にしたらうござんすといへば私も然う思うたから、片側だけはあるやうにして貰つて來たよといふ、眞に嬉しうござんす、お給金を頂いたらメリンスでも買つて晝夜にしませう、有難うございましたと心より禮を述ぶる。何のお禮で痛み入る、ぢや寒いから急いでお行きよ。はい、私はもう參ります、と別れて行く後姿、月に黑き影を落して哀れに寂し。叔母見送りて、眞にあの娘も不哀相な、十二三の頃迄は蝶よ花よと育てられたものを、今は情ない水仕奉公、昔の事を考へたら枕紙もびつしより濡れるのだらうに、其身の辛らさはいはないて、故郷の親を思ふ可憐さ、人間も運といふ奴には敵はない、あ、また年寄の愚痴な、風邪でも冐いては詰らない、と内に入りて戸を閉づれば、路次には人の影もなく、月の光青く、霜の夜はたゞ更けたり。

選者は一息に讀み終つて、一語一句の隙もないのに感歎措く能はなかつた、察するに之れ素人業とも思へない程、能く筆がたつて、痒い處に手の達く書き振り、若し眞に初陣の作家とすれば所謂後世恐るべきものであらう(選者評)

特別第三賞

○四年前

因幡みどり子

三十九年三月廿四日、妾は漸う學年末の採點を終へて日暮方に學校を退けた。あゝ草臥れたと辨當を投げるやうに置いて机の前に腰を下す、机上にあつた新聞を取りあげて目を晒した。不圖見ると高等女學校卒業式の記事があつたので、見もてゆくと、品行端正學業優等精勤について、名譽ある舊藩主池田侯御寄贈の硯箱を拜受した生徒の姓名の中に神吉恒子の文字、而も筆頭第二にしるされて居た、之を見た妾は無量の感慨にうたれて漫に四年前の過去を追想し思はず不覺の一滴を紙上に注いだ。

* * * * *

三十六年の確か二月上旬であつた。仄暗い作法室の片隅に、妾は受持の一生を罰すべく呼んだ。彼は早や良心の苛責をうけて涙ぐみつゝわが前に項垂れた。妾は徐に口を開いて、

「此度の貴女の行爲は實に惡い、けれども之を一昨日のあの時懺悔したならば罪の幾分は輕くなるであつたものを、强情に何とか彼とか云ひぬけをして罪の上に罪の上塗をなさつた。妾は寧ろあの行爲よりも、貴女が、成らば先生を欺き通さうと思つてかゝる不敵な心根を憎く思ふ。一躰貴女は人を呑んでかゝる氣質がある。此度の事も全くその氣性から出たのだ、悲しい事には人に勝れた貴女の智惠が辯疏の虛言を巧につくつて良心を魔道へ〳〵引き込んでゆくので、人に取つて誠に尊い智惠と云ふものが貴女には恐ろしい惡魔となつて働くのだ。貴女のためには寧ろ少しも智惠を與へずに白痴に生れた方が却て幸福であつたらうものを。學科の出來は何も揃つて立派なので、天晴、見込ある生徒だと心强う思つて居た貴女が斯樣な人間であつたとは實に意外で、實に情ない。心の拗けた人は假令神樣の樣な智惠を持つて居やうとも人間としての價値は殆どないのだ、妾は貴女の怜悧な智惠を限りなく愛する代りその大膽な心が云はうやうなく憎い……」諄諄と諭して居た妾はもう胸が一杯になり聲が震へて少時言葉が出なかつた。彼は絕え入るやうに引泣いて居たが此時俄然机上に突伏した。始終の態度で彼は充分悔悟した事がわかる。妾は何ともいへん可愛想な心になつて、覺えず彼をだき抱へ而して耳元に囁いた。

「併し『君子はその罪を憎んで其人を憎まず』妾とて決して貴女が憎くはない、憎いどころか吾子のやうに可愛く思ふから斯うも云ふので、『子を見る事親に若かず』と古語にもある通り、妾は貴女を見誤つて居ないと信ずる。今宵枕に就いて人の寐靜まつた時胸に手を置いて僞りなく考へて御覽なさい、過去の行がどうであつたか。今の言葉と比べ合せて成程と思ひ當つたなら以後悉皆心を入れ更へて無邪氣な少女になる事を心掛けなさい……」

と、涙を浮べて訓誡したのであつた。

其後滿一年手しほにかけて敎へたが實に我ながら驚くほど悔悟して呉れて、操行學業とも眞に立派な者となつて幾度か歎賞の聲を洩させた、遠慮なく云へば妾はこゝらの年月敎へ導いた百餘人の生徒中彼にまして愛しい者は一人もなかつた。

三十七年三月、優等の證書を得て我校をさつた彼は、翌月直に高等女學校の三學年に入學しえた。それよりは朝な夕な只管課業に勤しむと聞いたが月日に關守なく二年の螢雪を早くも積んで、花笑ひ鳥歌ふ春の日に限りなき譽の花をかざす身となつたのである。

同級七十四の才媛中第二の首席を占めた秀才の程も嬉しくあるが、それにもまして嬉しいのは此の品行端正の語だ。妾は今新聞を手にして端なくも四年前の彼が歷史を回顧したのであつた。

教師の口吻とは言へ、説得の辭、眞に迫りて神吉恒子ならぬ者も感動を禁じ得ない、想ふに此作者は教鞭を執る人にあらずや、地の文も峻嚴にして威風がある（選者評）

天

○葉がくれ櫻

芝區西久保巴町三四平山方　さゆり女

見渡す限り廣々とした青海原、打よする波は時ならぬ花を咲かし、左は飯岡銚子の邊、右は一宮の邊迄見通す下總川邊の海岸を、凄い程冴えた月光をあびて、散歩する男女があつた。其れは二三日前に此處の別莊に來た、小松家の次女ひろ子と其兄である。

「ひろさん僕は願があるのだ、ひろさんでなければ到底救つてくれる事が出來ないのだ、ひろさん救つてはくれまいか、」今迄何も云つた事のない兄が、今日に限つて不思議な言葉、ひろ子は薄氣味惡るくは思ふけれども、如何にもして病苦に惱みつゝある兄を救はんと。「兄さん私の樣なかよわい者にても出來る事なら、何でも致しますわ。」といぶかしげに兄の顏を覗ふのであつた。「ひろさん有難い、其れては云ふが、ひろさんの友人花山靜子さん、靜子さんは僕の愛人だ。」「あれ」とひろ子の驚いた樣子。「まあ聞き給へひろさん。ひろさんは知らんかも知らんが靜子さんの御兩親も父樣も母樣も、承諾して下さつて、來年は靜子さんを迎へる事になつて居たのだ、處がひろさんも知つて居るだらう靜さんの弟が勉强を過した爲めに、腦病になつて死んだ事を。其れて靜さんは相續人になるので、もう僕に嫁

添乳（選外）　山田大雄八重子



す事は出來なくなつたのだ。其爲めに僕も腦へ異常を起して、此別莊に靜養する事となり、靜さんもあの通り、うつらうつらと、日を暮す樣になつたのだ。然し此處に唯一つ、未だ望がある、其れは僕が養子に行つて、ひろさんが小松家を相續してくれゝばよいのだ。さうすれば二人は助かるのだ、僕も靜さんも、幸福に一生を送る事が出來るのだ。ひろさん之れが願だ。家を相續してはくれまいか。」と妹に心籠つた、握手をしたのであつた。ひろ子は驚きと失望とに閉されて、氣も遠くなりさうてあつたが、強く手を握られたのではつと氣が付き、やう〳〵の思ひて、「兄さん少し考へさせて下さい。」の語を出したのであつた。

嗚呼兄さんと靜子さんを救はふか、兄さんは身を殺しても救はねばならぬ方、靜子さんも親友であつて見れば、救はねばならぬ。嗚呼されど初雄樣を如何しやう三年の昔此海岸で、誓を結んで、心安く留學の途に付かせた初雄樣を如何じやう。御二人の爲めに、身を殺して家をつぎ、誓を破らうか。初雄さんは故なく約束を破つたら、さぞ御怒り遊ばすだらう。其れかと云ふて、兄さんの秘密は如何なる場合になつても明す事は出來ない、初雄樣に何も申上げずに、約束を破るより他に致方がない、左樣しやう。だけども左樣したら、淺猿しい女子と御あきれになるだらう。嗚呼如何して斯うも世の中は、思ふ樣にならないのだらう。『理想は現實と違ひ、現實は理想と相反す。』とはよく穿たれた言葉である。嗚呼致方ない總て世の中を捨てやう誓を破らう、初雄樣に何と思はれても致方ない、兄と友との犧牲にならう。と青ざめし顏色は舊に復し、面には深く決心の色が現はれて。「兄さん承知致しました。じや兄さんは靜子さんの處へ御出て下さいまし。」と明晰りと云ひ切つたのである。

其翌年ひろ子は小松家の戶主として、小松家の一男は花山家の養子として、公にせられた。新博士の名譽を得て歸朝した初雄はひろ子の小松家を相續した事を名利の爲だと非常に怒り、遂に某男爵令孃と結婚した。哀なるひろ子は兄の子を養て嗣子とし、花の盛りの身ながら世を捨てゝ、熱心に慈善事業に貢獻した。

之れ優に一個の長篇を成すに足るの趣向であるが、先づ長篇の一節としては、捉え處も宜しかつた、男も女も當世風の人間で、今時の若い者のはなしさうな會話の體、作者は能く時代を知るの一人である(選者評)

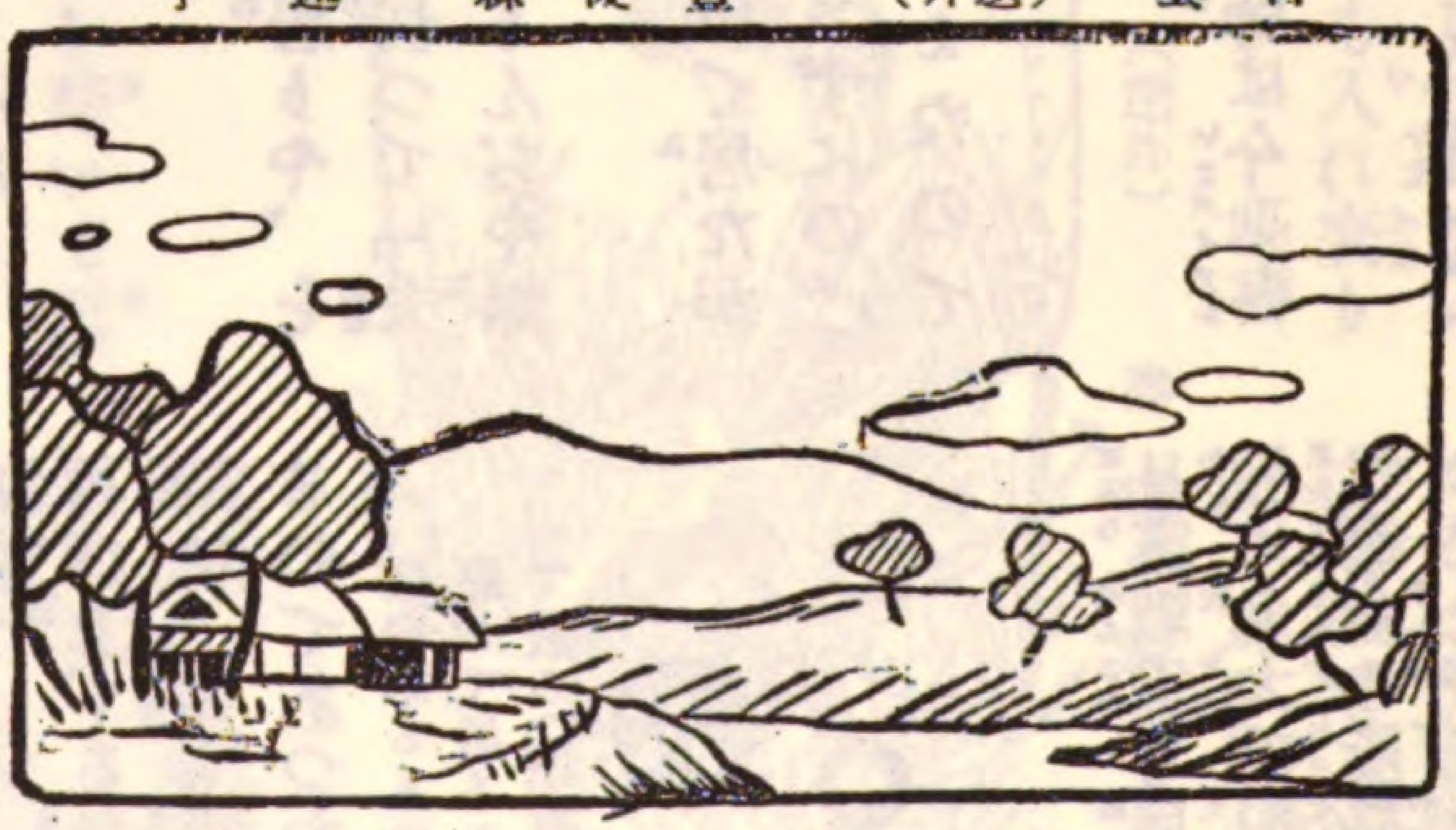
地

○老牧師（上）

本所區外手町六十一番地　田中秋子

「俊也、今汝に死なれて此俺が如何爲ると思ふ。其麽弱い音を吐かずに、宜いか氣を堅固持つてな。神樣が被居ぞ、心の貧しい親子の上にはな、必然祝福を垂れて下さるに相違ないわ。」

若くして、最愛の妻に死別れた、牧師の野澤政人は、六十路に近い今日に到るまで、忘れ遺兒である一人兒の俊也を、玉とも寶とも愛で育みて、聖い生涯を送つて來たのである。斯くて去年、俊也は首尾能く某の神學校を卒業した。その健實な信仰と、高遠な理想と相俟つて天晴在校中から、俊秀の譽を逞ふしたので、親たる政人が喜びは云はでもあるべし。此上は早く忠實なる奴僕として、神の聖壇に親子共々跪ゐたなら、如何に心ゆく限りであらうと、政人は敎會の壇上に立つて、獨微笑を漏らす事さへ有つたのである。



白雲（選外）豐後森　達子

それがつひ去年の十二月、俊也は偶と風邪の氣味で病床に就いてから、生溫い春風が、敎會のカーテンを漏るゝ、三月の下旬に成つても尚床を離れ得ぬのみか、嘗つては若々しかつた頰の紅も、今は敢へなく青褪めて、先刻醫師が歸り掛けにも、物蔭へ出て密かに、「お注意爲さらんと二三日中にも。」と云はれた、よし其聲は低かつたにしろ、政人の耳には千の鐘よりも尚強く響ゐて、此憐れな老牧師は、今や暗黑な失望の谷へと、敢へなく轉び落ちたのである。

「お父さん。」と俊也は勢の無い聲を絞つて、

「決して嘆いて下さいますな。死んで神樣の許へ行けりや、寧ろ其方が幸福です。」

「雖然汝、それぢや孤獨の己の、遣瀨が無いわ。」

老牧師の聲は顫へを帶びて居た。

「許して下さい。」と俊也は強ゐて身體をもがいた、

掻卷の白いのが僅かに戰いて、午後の太陽が淡い鈍い光線を、硝子窓から裾の方へと投げて居る。

「お父さん。」と再び呼び掛けた時、コン〳〵と二聲三聲咳入つたので、政人は慌てゝ背中を撫りながら、

「苦しいかの。」

「否」と俊也は頭を振つた。

「投つといて下さい。神様の御手に縋つて居りや、それて僕は滿足です。」息が切れるか言葉を切つて「夫よりかお父さん、最早教會へ、お發足に成るんぢや無いんですか。」

座に復つた政人は、此時暗然と、腕を拱ぬいて居たが開いて僅かに點頭いた。「ぢやが汝氣を落さずにの。」ドンヨリとした老の眼に、時ならぬ光が見えたのである。

（下）

アカ〳〵と輝やいて居る電燈の下に、老牧師は今聖書を閉ぢて、祈禱を上げた處である。

「お宅から電報て。」給仕が差し出したのを、急いて取つて讀み下した。

「トシヤキトクスグコイ。」

色香の失せた其面には、見る〳〵苦痛の色が現れて、卓上へツと俯伏した。瓶の白薔薇が僅かに動ゐて、花片が二片三片散りかゝる。

「主よ、願はくは我等の上に、束の間の惠みをあらしめ給へ。」

再び上ぐる衆人が祈禱の聲に和して、此憐れなる老牧師は、面も得擧げず俯伏した儘、心からの祈禱を捧ぐるのであつた。

信仰ある人の悲みは一種深痛の趣がある、作者は能く個中の動機に通じて居るから、書いても上すべりせず、人をひきつける力を持つて居る（選者評）

（人）

○夕やみ

横濱市中村町六　寺田光子

日露戰爭も目出度平和克復となつた今日。文學界美術界に多大の影響を及して、文學雜誌の發行の夥しい事又書會の隆盛な事は、實に豫想外であるので此度開かれた上野五號館の洋畫會展覽會に就いても、多くの人の眼を引いた、殊に畫工は皆青年畫家と云ふので一層色めいて見えたのである。

展覽會が開かれて丁度七日目の日曜日、其でなくてさ

讃香（選外）

赤穗　高谷はな子

へ人出の多い上野、もう四月も初旬櫻もボツ〳〵咲きかゝつて居るので、散歩がてら樂しい日曜を上野に遊ぶ人も少くない。皆活々として身躰も氣ものんびりして居る樣て、五號館の前の賑やかさは一通りてはない朝から入口は込み合つて、紳士學生貴婦人も入れ交り立ち交り、人を見る許りても大した物てある。

丁度、午後三時頃五號館の前に止まつた一臺の馬車があつた。内から下りたのは一人の老紳士と十二三歳の赤海老の洋服着た令孃とてあつた。

令孃は少し青みがゝつた顏を伏目にして、老紳士に手を取られながら入口へと這入つた、涼しい眼愛らしい口元に皆ふりかへり見るのてあつた。

令孃は默然つて歩を移して、老紳士の説明を聞いて居たが、

「お父樣何の御繪が一番好いのてせう、母樣が入らしつたら御喜びてせうにね本當に御繪がお好きていらしつたから、」



と父には改まつて、言葉も大人びた調子。

「さうだの自分のいゝと思ふのが一番好い繪さ、母樣も繪は好きだつたがのう死んだ者は仕方がない」

と何時か老紳士も令孃も淋しげな顏して、次の室へと這入つた。此所は多く肖像畫の樣な物が飾つてあつたが、ふと見上げた令孃は何に驚いてか突然に、

「彼はまあ母樣によく似て、本當に能く似て入らつしやる事」

と疳走つた聲で叫んだ。

「何れ〳〵又亡母樣を思ひ出したのかな、其樣な筈はないが」

と老紳士も傍によつて等しく見上げた、其は海の夕景て其處に三十一二とも見える美しい婦人が、袷の裾長く爪先危なげに浪打際に、兩手を帶の間に挾んで居る繪て夕やみと題する物。

「夫はお前の心持ちての、母樣々々と始終其許思つて居る所爲ぢやらう」

「さうてせうか？ても母樣にそつくりてすもの、何うして慿んなに能く似て入らつしやるのてせう」

離れやうともしないで見つめて居る。老紳士も口でこそ强くは云ひ離つたやうなもの丶、餘り似た其面影に亡き妻君を思ひ出してか、無理に令孃を促してひらりと馬車に乘つて歸途に着いた。

其後春季展覽會が閉會になつてから、彼夕やみと云ふ油繪は、麴町區永田町なる男爵小松原家の令孃町子の部屋の西洋間にかけられた。

短篇は短篇なりに、話の筋も、文章も斯う云ふ風に整つてありたい首尾一貫、餘裕もあり、情緒もある（選者評）

秀逸

○弱き者

芝區　陳すみ子

「ではお秋、あの森山はお前を振捨て、今夜中村のお琴さんと結婚すのだな、あ丶、己れ森山奴あれ程堅く約束をしながら如何に此方が落ぶれたとは云へ釣り合ぬとは云へ、約束は約束だ!!それを己に無斷で他方から嫁を取るとは！好も〱此の河井を踏附たな？それならそれで此方にも云分がある!!お秋羽織を出せ！」と、二十五六のやせ衰へた幽靈の樣な病身の兄「さあ羽織を出せッたら」よろめきながら立上る面相の物すごさ!!

お秋は年頃十八九の丸顏の愛嬌の有る女。

「兄さん道理で御座んすなれど兄樣は御病身故其樣事を遊ばしてはお身躰にさはつて折角の心盡も水の泡となります！兄さんどうぞお止まり下さい!!」と云ふも淚交りの聞き取れぬ程「いや放せお前に惡い事はない向ふが斯う河井をいや河井家代々の爲じや、己、婚禮させるものか！」「兄さん、そ丶それは皆妾が不束な者故、向ふに惡い事は少しもないのでムります!!」とわつとばかりに泣伏した。

「何お前に何の科もない!!此の事計りではない！今迄の事も有る今日は云ふて〱云まくらねば置かぬ!!」と其儘門に出んとするを、お秋はたまり兼ね、「ア、兄さんそ丶其れには譯のある事です！一寸お待下さい！」とひれ伏した「さあ其譯とは〱早く〱！」とせき込兄。「そ丶夫れは此の妾の穢れた身に成つたからでムります……」「穢れたとは何が〱」と餘りの事に只茫然たり。「兄さんの御病氣の折り賣る物は御承知の通り賣拂ひ!!他所から入る金はなし、そうかと云つてあれ切お醫者に掛けねば兄さんの御病氣の御全快も計られず、途方に暮れて居る折柄裏のお淺婆〻

んの云ふには晝は御看病して兄さんのお寢になつた晩丈けていゝからそつと拔けて來れば藥代や食べる位の事は如何にでもなる事に、と云はれ!!あゝ兄樣勘忍して下さい!!わゝ妾は惡魔に魅入られました……「偖は其方があの、此の兄の病氣を癒さんが爲に身を穢がしたのか？これお秋……」「あゝ兄さんどうぞお赦し下さいませ!!わゝゝ妾は一生獨身で暮します」「あゝゝゝ」と兄は涙を袖にはら〳〵。

「亡なられた母樣も二人仲宜暮して呉!!母なき後は兄樣を母と思ふて孝行して呉れ!!とくれ〴〵も御遺言」いつの間にやら兄妹二人ひしと計に抱き合て泣きに泣き伏た!!今頃は森山とやらては四海浪穩に高砂の歌でも歌ふて居るであらう。

兄妹は只無言、軒打つ雨の音が靜かな夜に響くばかりてある。

弱きものよ、汝の名は女なりと、此語を具體する場合には、多く此種の趣向が用ひられるやうて、稍時代めいた嫌はあるが、兄の意氣込と、妹の戀ひと、能く寫されてある（選者評）

○友情　京橋　良子

「八重子さん近頃は岩木さんと大そう親しくして入らしやるのねーあなた彼の方の行跡はよもやしらない事はないでしよう墮落も墮落も校内第一でしよう、ですからもしもあなたがそれに染たならばわたしは八重さんの御父樣に何んと申譯が立つてせう、さうでなくとも近頃は繁々御文來てよ何處で御聞きなすッたか岩木さんとお交際の事を御存の樣子てそれとなくきびしくかんとくして呉れろッてお言ひてすよ」八重子と花子とは同縣の人で小學時代より共に仲よくはる〴〵東京へ修學に來り八重子の親よりは花子に萬事を賴み同じ寄宿生てある然るに八重子は噂よからぬ友と交り夜は更くるまで散步にゆき甚だ敷だらくして花子には他處他處しきに花子は心配し先生の耳に入らざる中に諫めるに若かずと思ひ立ち八重子を漸く誘ひ出し行來まれなる山内に來たのだ「八重さん惡い事は云ひませんから何卒あの方とは絕交して下さいな是も私が云ふのてはないお父さんがをつしやると思つて下さいな今までの行爲はさらりと流して之れからは淸い〳〵水にして下さいなそしてもう少して卒業と云ふ大切な處てすからせい〳〵勵んで錦着て歸りましようねー」眞實面に現れての意見に「花子さん惡かッたはねー勘忍して頂戴な今はもうさつぱりと覺めてよ私岩木さんにだまされて居たのよ、今は何もかも云ふわ、あの方は實に恐

ろしい人よ、あなたにかくして居たの、私の衣類はあの方に大がい貸していくら催促しても返して下さらないのよそして毎晩々々散歩していろ〳〵の物買ても御自分は少しも出さないで皆私に立替さすのよ、けれ共その時分は私夢中で云ふなりになッて居たのよ此頃は大へん様子がかわッて來たのよ」此處まで語てきた八重子は急に心配そうな顔色で眼はうるんでひたと花子に寄添つてさめ〴〵と泣いた、花子も衣類の事は少しもしらなかたッので非常に驚いた、如何にしたならば性惡の岩木から取戻せるかと思ふと心配で〳〵たまらず歸縣も迫るし實に意外で暫しは言の葉も出なかッた、折から太陽は西に入り上の方では烏もねぐらへ急ぐのに驚いて花子をなぐさめ〳〵漸く宿へ歸たけれ共其夜は二人共仲々眠れなかつた。

數日の後校内一同の耳を驚かした事がある、それは岩木の行爲が發見せられ即時退校を命ぜられ且又生徒間より品物の返却を續々申出るに先生方も驚いて一々しらべた處、岩木も一言もなくそれ〴〵へ返した、幸にして八重子も手に入た、今少し花子の諫めが後かりしならばいかなる事になりしやも計かられずとて八重子も一層花子を尊敬した然るに岩木は所々の學校に入り此手段で多くの人を惱ましたとの事で其後は何處に居るやら絕えて其名をきかなかつた。

今日しも卒業式に月の桂を手折しは誰、校長の君の聲をごそかに第一賞「園山花子」第二賞「早瀨八重子」二賞の八重子は花子よりの賜物なり「花子さんお禮の言葉は出ませんは、實にあなたは神樣だわ、あなたが居なかッたならば私はどんなあぶないふちへ落たかしれないわ、今日の式のほまれはあなたからのたまものよ、」私の力ではないのよ」「あれ八重子さんは勿躰ない事云ふのね、私の力ではないのよ、みんなあなたの力だわ、けれ共もうこれからは油斷なくやりましようあなたも鳥渡魔がさしたのよ、それにあなたが惡いと云ふ事を早くさとッたからしてよかッたのよ、どうぞどうぞこれからも末長くお互にわるい事はいさめついさめられつしましようね」

覺束なくも思ふ通りを書き辿つたと云ふ風で、整はぬ節も多々あるが其代り技工を弄した點は些も無く無邪氣に出來て居る、地の文は未だ稚氣を脫しないが、對話は上手决してすみへは匿けない(選者評)

○女書生

北海道　白菊子

上

「民さん！何して居ます速く洋燈おつけなさいよ」

離れのお居間に鋭い伯母樣の御聲、妾はハッと胸躍らして讀みさしの英語の本をいきなり伏せて、廊下傳ひに黑紋羽二重のお羽織を裁ちかけて被在伯母樣のお室屋の襖を明けると身も心も縮み相な恐しいお目でちらりと御覽遊たかと思ふより速く「何ですッ、夕方忙敷時に勉强するなんッて、日曜日には澤山時を上るのに書生とふざけて斗り……其樣に伯母さんの命令を守らないのなら勝手におしよ」妾はお詫の言葉もなくて胸に戰ひどきはいとゞ亂るを覺えて……

下

一筆申のべ候追々暖氣に相向候處お障りなく日々御通學の由父上樣初め喜居候……中畧……嘸ぞ御氣六ヶ敷き奧樣の御許にては萬づ耐へ難き事も數多からむと推察致居候、それも只財豐にして何も事足りなば他人の内に苦き月日など過させ度は候はねど其許も承知さるゝ如き事情故已を得ず候間、今暫し御辛棒お働きなさるべく候、心を磨き身を立るもの學には必ずひと度は辛き思もせねば事とげられずとお心得なされ眞の心もてお事へなされば奧樣の御心も何時かは和ぐ時も候はんと存じ候、こゝに爲替二圓五十錢當座のお小遣丈け都合致し候……下畧



松に露（選外）　京都市　安田はつ子

今しもお玄關にお客樣お見送りなさッた叔母樣は手荒く後の襖を明けなさッた。此手にした文を急ぎ卷納るひまもあらばこそ、「オヤマア長い手紙！民さん誰から？例ものハイカラ紳士じやないの？オホ、、、」伯母樣は意味有げに如何にも嘲み果たお笑ひやう、妾は背の冷汗にゾッと身慄して「否、あの田舍の母から參りました」

「オホ、、、民さんは誰から手紙が來ても母から〱と斗りさ可笑しな人ねオホ、ホ、」冷にお笑ひなさッて奧へ入しッた、妾は思ず机の上に打伏たが再び此眞心籠る御文を卷き納め樣とした時はみ、筆の跡も分ぬまでにしとゞに濕て居たのである。

人の家に使はれる身の、孰はつらい事あるに相違ないが、此篇冷酷なる伯母と、母の消息とを對照し來りて、一層女書生の身の上に同情を傾けさする處、亦凡手ではない（選者評）

○すくわれた人

赤坂　齋藤紫桂子

「ね！母樣！洗禮を受けさせて下さいな！」と希望にみちた眼の涼しい顏を上げた十四五才の少女は、手をついてつゞまやかに「時さんそれは惡い事とは思はないけれど、あなたとても、外に出づる身、洗禮なぞうけて一生いゝ所へは參れやしません……ね！およしなさいやそばかりは母さんが御願ひだからね！よし子さんなぞ御らん！あの立派なお家に生れながら、あの樣にいゝ着物もきないし面白い所へ行くでもなし……時さん、それともあの樣になりたいの？」と徐々と説き聞かす慈母のひとみには涙さえあふれて……「エエ母樣私よし子樣の樣になり度う御座います！母樣！そう仰せられますがよし子樣の御美しい家庭を御ぞんじないのですか……私洗禮をうけました上はイイエたとえ受けませんても、神樣の御めぐみのわかりました故よし子樣のやうになれませんければ、私一生のつとめは一人にてもなやんでゐる人をすくひたいと思ふて居ります！ね！母樣どうぞ御許し下さいませな」「マアー何と云ふ時さん心の變りようでしょう」と母は、たゞおどろきの眼をみはッた……げに時子の心は變ッたのであッた！五月前○○教會に入るまでは只其虛榮心にのみ滿たされて、學校の成績よく勉强するのも首席の名譽をしめたさに……さはれ其心は怜悧であつた……されば其教會に出入する樣になつたのも美しい西洋婦人の出入美しい花わのかざり、ピアノの音によはされて、ツヒに通ふ樣になつた……然し熱心なる一人の傳道師は深く其心をあはれんで日々家にむかへてはとき聞かせたので元よりおろかならぬ時子は、ツヒに救はれた！神の眞理をさとり、神のみめぐみに浴した、それでも、商家の母は、いとし子の榮ある心のなくなつたのを、深くかなしんでゐる「母樣そうで御座いますの！私の今までの心はほんとに違ふて居りました！ね！母樣！母樣は私の幸福な人となります事を御のぞみで御座いませんか」「マアー何をいひます、元より、あなたを好い人にしやうと思へばこそ……」「母樣それでは、よく御考へあそばして下さいませ幸福とは如何云ふ事でしようか、エス樣の御言葉の通りに致しますのが、一ばん幸福で御座います！

どうぞ、うけさせて下さいませ！そして母樣も神樣のみ心を御さとり下さい！」とねがふやさしき心にかんじて母はゆるしたのであつた、時子のよろこびはどんなであらう熱心なる感謝をさゝげて此上はたゞ、母の神の救をもとむる樣にと祈禱をさゝげた……

＊　＊　＊　＊

其後潔き心の天女のごとき時子は其行にて母をとき兄をかんぜしめて樂しき家庭とし、其あまる資産はいつもいつも貧者凶作地等へと寄附された、二十才の春、時子は品行方正なる杉浦操と云ふ醫學士と結婚して其職務の爲め勤勉につとめた！そが美しき聲の讃美歌は幾多の患者を慰さめたであらう。

宗教小說として基督の愛を說いたものが每號大抵一篇は採り得られるやうてある、之れ亦一種の潮流として注目すべきものてあらう（選者評）

○思出の記

蹉跎岬　ふぢ子

拙き女文字のたど／＼しけれど、其かみの事共書い記して己が戒ともなさんか。

あはれ、淵瀨常ならぬは飛鳥川のみかは、雨の朝風の夕も憂愁知らでお乳母日傘に育ちし姿も、父失せてより打續く不幸に、家財大方賣盡したる昨今、せめては弟の學資の料の一端にもと、是より花の十七といふ年いてゝ奉公すべく思定めぬ、

お目見えもすみて、あのお屋敷へ上りしは、四年前の世は春の眺めとはいへ、まだ冬の名殘の風寒き頃なりき。先方樣は葉山樣とて駿河臺は茗溪のほとり鈴木町花にも雪にも面白きお庭の景色、それにもまして奧樣のお品のよさ、お孃樣のお美しさ、御家內は此お兩人ぎりにて皆よきお方、初奉公乍ら氣骨の折れる事更に更にと頭振りて、口入屋の老婆の云ひしも誠僞には非りし。

たらちねの母や弟に別れて獨りぬる夜の明くる間の、如何に久しう悲しかりしも、昨日と暮し今日とすぎ、事もなくて三年目の夏もさり荻の上風うら淋しき秋も半ばの比なりしか。一日の夕暮、まだ點火には……と思はれしかど、大方の御用はてしものから洋燈片手におろうか過ぐれば、お孃樣のお室より洩るゝ忍音。何とはなしに胸騷ぎのして、我ともなく次のお室にいりて伺へば、お机の上にうつ伏し給ふお孃樣、お下髮のリボンゆら／＼と動れ、傍に座し給ふ奧樣、落ち易き前髮毛の二筋三筋頰に亂れて、お顏の色の常よりも勝れまさぬ樣覺えし。やがて奧樣涙の目を上げ、照子

お前もモウ十二てはありませんか、私の云事理解たでせう、母樣は……母樣は斯樣な身體てすから、何時何するか解りませんけれど……照子、お前は、學問をして偉い人におなり、偉い人になつて、决して人の妻に等なる者てはありません。男は皆いけない者、惡るい者、女を僞す者、來年は高等女學校へ入學るとおいデだから、修身や倫理をお學びだろうが、口に正義の既付立派な方樣程おそろしいこはいんてす。をゝ口が來ました。福が洋燈以てくるといけないから、もう泣くのでは有ません。と淋しうそれは〳〵淋しう微笑まして、やがて閉ぢ給へるお兩眼より瀧の如くも亂り落つる涙は、頰を傳ふて音もなく膝の上に落ちお孃樣の母樣と只一言戰く聲に勵まし給へば、勵まし給ふお聲は更に戰きぬ。妾もそこに泣き伏しぬ。

誠や奧樣は旦那樣の御器量望みとやらにて、さる方へお輿入になりしものゝ、美しさは天の成る麗質のみかは、御心柔又優しう讀書裁縫糸竹の調も巧におはしますに、げに恨は花月の上のみならで、數へ年十八の奧樣お姑樣と例の新舊思想の衝突とかに、合せて定めなき旦那樣のみ心は仇し女に通ひて、遂に腹の赤見樣共共一年許にて御離縁になりしとか、慰藉もなく憂愁多く涙の中に明暮し給ひて其年の殘菊殘葉霜に傷む十一月、愛らしき呱々の聲あげ給ひしはあのお孃樣、まもなく御兩親はあの世へ、只一人の兄樣は御職務の御都合にて九州へ、續く御不幸に番町のお舘たゝんて、此方へお轉居遊ばして早六七年、誠にお可愛そうなとお出入の八百屋も申しき。不運は我のみとのみ思つゞけたる此身にもましたる奧樣のお身の上、唉出てん萏の孃樣にも、霜雪のふりかゝりて如何に、み心をみだすらん。程なく妾はみ三年の期限みちたれば、聊なれ共衣服調度の類始末して、お暇乞して見返り勝に御門をくゞれば、お庭の白梅はら〳〵と風なきに散て、折柄の鐘の音いと哀れにひゞき渡りぬ。

妻戀坂下にて　福子記す

文體は舊式であるが、ものゝあはれを知り初めた女中の追懷、優雅に書きなされて、女性の作品たる實を失はない（選者評）

> △名譽の詠進者より謝狀
>
> 勅題和歌入選の名譽を得へる長尾ふみ子女史の事は本誌前號に掲げましたが誌友諸賢より欣びの消息が登つたさうて特に長尾女史から左の御挨拶がありました。
>
> 御なつかしき姉君よりみ心をこめられしうれしき御ふみ給りまことにありがたく直に御返しさし上べきなれど數多き事に候へば失禮ながら誌上にて御返り言をつゝしみてかくなむ、かしこ
>
> 東京京橋區南小田原町三丁目九番地　長尾ふみ子

編輯局選

はがき文（一）

特別第二賞

○小麥苅り

府下　森田奈加子

必ず怪我せぬ様にと、母様の御注意を聞きながら、一歩一歩と苅行く小麥の根方に夫れは夫れは可愛らしい雲雀の子が三羽、思はず手をかけましたが親雲雀の丹誠は何程だらうと、先きに母様のお言葉を思ひ出れて。

此子の上に幸あれ。

特別第三賞

○春の七神

徳島市富田伊賀町　住友時子

春風、麗花、胡蝶、楊柳、百鳥、朧月、溫水、私は之を惠深き春の七神とあがめます。やさしく、あたゝかく、美しく、雄々しく、心地よく、清く、床しき！いかに吾人を樂喜ましむるか。

選んで好し。

天

○御氣の毒

芝區白金　川島芳蘭

近頃世間で非常に海老茶式部といつて一概に女學生をわるく申ますが、なぜでせうねえ地方から遙々東都へ上つて庇髪などに氣を奪はれず熱心に勉强して御出の方は此惡評を嘸殘念に御聞でせうね私實に御氣の毒よ

果して此福音を聞く。

地

○道踏

秋田　鮎川良子

私の國は毎朝のやうに雪が一尺餘も降りましてふみ俵と云ふのを穿いて道を踏むのです立ちてむる朝霧の中にふみ終へた時おちこちの茅屋から朝餉の煙がスーと上り初めるのです

秋田の風土記。

人

○姉様のお望み

本郷區弓町一丁目廿五番地朝井方　綠子

姉様今度兄様がお凱旋成さると兄様と姉様と新婚旅行

を成さるのですつて今父樣と母樣とお話し仕て被在しやつてよ父樣は日光がよかろーつて母樣は京都が好いつて、姉樣何方がおすき、マー驚いた富士登山？

寶永以來の珍事。

秀逸

◎凱旋の二字　熊本市　村岡みれ子

每號の女子文壇の何所かに父上や兄樣の凱旋とあるを拜讀するにつけ、あゝ兄樣も歸りまさばと、つく〴〵皆樣のお身の上が御羨やましくつて、あゝ思へば凱旋の二字。

恨みや凱旋の二字に代れる招魂の二字。

◎鳩の凱旋　秋郊女

去年の二月茲筑紫の八幡宮の幾十百の群鳩日露の風雲慘たる北空さして出征行きぬ、靈鳩奇瑞の聲四方につたえしが今や媾和なりて昨日今日、冬の寒空に列もみださず群鳩は凱旋して松原に歸りぬ。

諸鳥集りて歡迎會を開く。

◎お母さま　安藤いさみ女

庭の梅も櫻も美しう咲き揃ひましたが家では一人として梅櫻を眺めて居るものはなく只管母樣のお顏色の一日も早く美くなれば佳いとお母樣のお顏ばかりながめて居ます。

病は心より。

◎霧島頂上　富山春波女史

夕雨やみし霧島頂上、麓を廻る八峰七溪わき立つ湯氣に蔽はれ眼下は灰色の烟雲朦朧、遙に日向灘上七彩の虹長く曳いて烟上に顯はるゝ高千穗の峰に懸る、あゝ天孫降臨の時も斯の如き狀であつたらう。

壯嚴。

◎春の夜　靜岡　由井よし子

桃は亂るゝし、櫻は咲くし、野の小流れには歡樂の歌が湧いて、千草八千草も今が花盛り、薰風はさつと小笹をゆすつて、天には始終星樣が御笑ひなさつてゐる妾はこういふ夜に石が御產をするだろうと思ひます。

石女元來石にあらず、嗚。

◎荒々しきと優しい音　能登　千田美芙子

軍隊の號令と、怒濤の巖を打つと、記者さんの剽窃兒を筆責する音は、實に荒々しくて。菫又は百合の花等を見た乙女の感嘆詞と、草間を流るゝさゝ川の水音と、誌友倶樂部の記者閣下の返事は、誠に優しい。

男の聲と女の聲と。

○ほしいもの　芝區 松本美枝子

私は靜子樣のやうにリボンがほしいのヴワヰオリンが買つていたゞきたいのとは思ひませんが起きても寢てもほしくつてほしくつてたまらないものはどんなにお金をつんでも得られない肉身の姉妹ですのよ。

彼は現實、此は理想。

○世のお孃樣方へ　岩代 服部良子

み情深き皆々樣の、樂しげなる歌聲をよすがに、菫子はまた生れ出て候。去年に變らずおいつくしみ下され度、日毎々々にはぐゝみ育てゝ、皆樣のお出でを待ち居り申候。かしこ。　春の野邊にて、菫の乳母より。

才氣あり。

○お嫁入　熊本 鵜の聲

今夜は姉さんの御嫁入、何んな裝して行かるゝかと思つて居ましたら、卷輪に紋附を着て、大きな帶を背負て行かれました、私が御嫁に行く時にはお下げに改良服着て行きます。

お友達の祝詞は皆新躰詩。

○初産　松山 江戸重子

姉さん私し本當に嬉しかつたわ、赤さん御安産のはがき着たとき！然かも女、貌は姉さんにそつくりでしよねー、私お小遣を儉約して、衣服を着せてやりましよ私初めての姪ですもの、私早や叔母になりましたわ。

おはなしのやう。

○良心　德島 高木菫子

今日は、何の理由もなしに學校を休んだので、何だか氣がかりである、一編の小說を讀み終たので、ふつと、時計を見るにモー二時、隣の坊がお母さん只今。

性は善なり。

○兄思ひ　伊勢 中村梅子

アスブジカヘルアニヨリとの電報を聲高く讀むや今迄一室に鬱で居りし妹は直に窓を開放した。

窓を開くと云ふ處、一轉して妙。



晴（選外）　中根岸 黑澤たま子

○美しき物　備後 平田加津子

磨きたてたる紫檀の机、雨にぬれたる海棠の花、夕榮の雲、星の光、白き鳩、半開の薔薇、黑き下髮に時色のリボン、長く揃ひたる緋の八ツ口、白百合の花、萩

の露、細き指にルビーの指輪。

女の觀察。

○雪の朝　靜岡　紫星

一尺も積つて當地には珍らしい雪降り、大人はかじかむ小兒は喜ぶ犬めははねまはる、御用聞きの小僧がなきがほして通るのも哀れに、おほりの上の大松に積つた處はかゝるて浴衣の形のやう。

今年は東北も西南も凡て豐年。

○妹からの手紙　遠州陽春　水

東京へくるにはきたもの丶今更故郷がなつかしく少しても近くへとおもつていつも西ずみへばかりとてをひきますよとは去年の春物學びにと遠州をたつた中妹からの手紙。

心もち。

○春は暖　麹町　赤城露美江

風に磨がれて冷たかつた月も朧に、凩の荒むだ野も春霞暖に、霜に照つた日も、雪を飛ばした風も之計りは變りのない母樣のお情も、何だか常よりはいや增して暖いやうに思はれて、私は春は大好!!。

少女の胸にも春の潮湧く。

○雪　岡山　安田梅月

二十四日朝からの雪午後には三四寸も積つて美しくあがつた、岡山ではこれが五年目の雪、嬉しくてたまらぬ、一時間あまり雪戰に貴重な時を費した其がため敏子さんは發熱。

雪と熱、何の對照。

○びつくりした事　長崎　愛子

今日は、日曜にて朝から、お庭の、お掃除を、致して居りましたが、あやまつて、父上の大切な、梅の木の盆栽を、花壇より、落した時の、私が心は。

父曰く、土に歸れ。

○妾の欲望　宇湯の里　田中紅葉子

其も妾の欲望、如何なるべき、田園を友にすべき我廣き畑の眞中に、小じんまりした、家を建て丶、朝に畑を友とし、山水の奇景と語らひ夕に集ひて一家談笑、是ぞ、永久に變らぬ、妾終生の欲望。

寧ろ無慾。

○運命　茨城　青柳愛子

只一人の兄さんの常陸丸へ乘つたのも、生れ落ると母樣に逝かれたのも、こんな草深い片山里の貧家に生れたのも、美人に生れなかつたのも、心を込めて投書した文の登らないのも、あゝこれ皆運命。

常陸丸は運命ならんも沒書は運命にあらず。

○花の言葉　滋賀　長井きん子

昨日ふとした事で御優しい花子様の感情を惡くしました、どう仕樣かしら、あ、さう、きッと許して下さるだらう!。私の高潔な理想と熱烈な感情を代表すべく、水仙を緋色のリボンで括つて、花子樣の裏を流るゝいさゝ川に流した。

後に詩を送る。

○極端　神田　大澤臣子

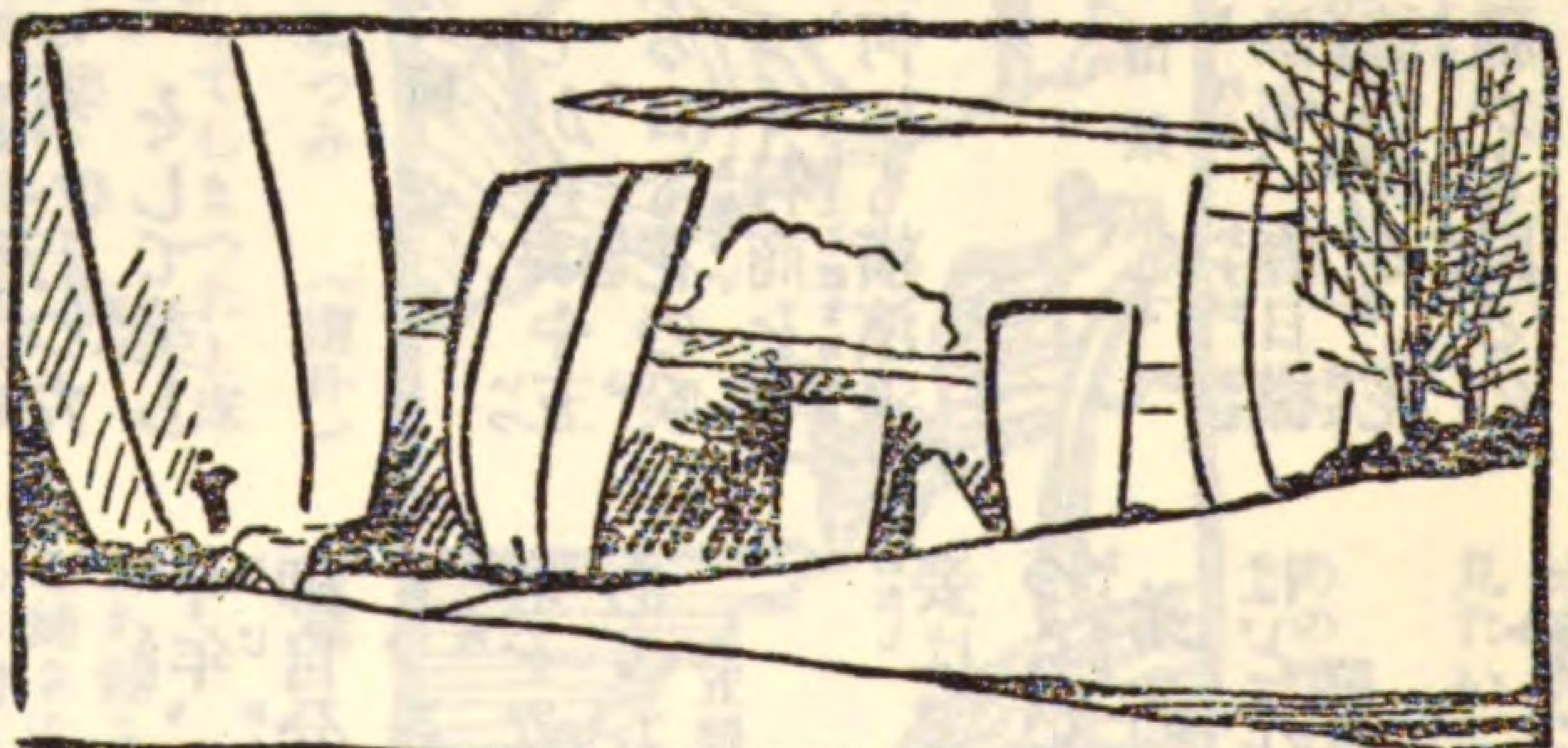
眞實に高島田にでも遊ばしましたら、如何によくお似合遊ばすでせう、お束髮なぞ惜うムいますね。と家の婆やが申ましたら、ハイカラの政子樣、オ、いやだてと、私島田に結ふ位なら坊主になるわ。

解けば丈にも餘りぬべきを。

○理想の家　常陸　酒葉貞子

瓦の屋根に唐太の柱、金模樣のふすま、欅の椽、備後表の疊よりは、草ぶき屋根に丸太の柱、白紙の障子、すのこの椽に蓆の疊が餘程、理想にかなつて居ると思へば、妾の宅もなにもはづかしい事はありません。

理想の家は大いに文明的なれ、此家は非文明なり。



歸帆

(選外)　福岡縣植木町　高崎たか子

○夢　越後　堀河蕙子

寒い〳〵この冬の日に、何不足なくこの厚深い布團に寢て居りながら、昨夜の樣な恐ろしい夢を見る位だもの、まーあの橋下の乞食の兒は、今夜などはどーいふ夢を結ぶであらう。

王侯の夢。

○糸の樣々　能登　池野白百合

もし神樣が白い糸を善良な人の頸にまきなさるとすれば、黒い糸は罪惡な人の頸にまきなさるでせう、紫を若い詩人の胸にかけなさるとすれば、黄ろい糸は高利貸の胸に……。そして紅は少女の胸に……。

運命の糸は如何なる神か曳く。

○誠のなげき　岩代　岡美都子

針目をたどる母樣の「困つたね、此樣目が散らつく樣に成つては!」とのおくり言に、私は毎も、悲痛の涙にくれ、今更日頃の、不熱心、不勉强、を悔むので有りました。

五十の坂もあとやさき。

○姉さんに送る手紙　近江　竹村たけを

日當のよい東の窓の机に凭りかゝつて、在都の姉樣に送る手紙をかいてゐると、後に足音がしたので、ふと

見ると、母さんが立つて見てゐらつしやつた。

からだて、ふたをしてはいけません。

◎朝　讃岐　松永あやめ子

鷄が一聲鳴いたに依て、起き上つて裏へ出て見れば犬は役目が濟んだと思つて尾をふつたきりで外へ行つた鷄の雛も出て來た妹の美ちやんも出た、そして美ちやんは第一に雛に餌をやるのである。

雛の餌、次は人間の朝餐。

◎油屋　南總　芳蘭女史

今年五十に成つた油屋與作、業をはじめてからはや五歳未だ一日として休んだ事はなく花の散る日も花の咲く時も屹度テンビン肩にして追分を歌いつゝ行商をする衣は筒袖兵兒帶の結び方は八の字で如何にも横濱邊の店員振。

油屋與作の閲歴こそ聞きものなれ。

◎彌七さん　豐後　平山紫泉子

若い時から來年は歸ると今年で彼是四十餘年、春日樣の常夜燈に灯を點けて居る氣狂ひの彌七婆が有る。花は幾度も咲いたが彌七さんは何日膃肭臍獵から歸るのであろうか。

想、小說より來る。

◎恐ろしき宣告　府下　磯ケ谷紫紅

鉛筆はビシンビシンと折るし手は震へ頭はのぼせてわれる樣動氣はドク／＼と益々胸はせまつて來る誤つてゴムで消すと穴があくしモー五分アー三分と試驗官の注意も我身にとつては恐ろしき宣告であつた。

某女學校には卒倒者ありと聞く。

◎お祖母樣　白露

今年、八十五歳のお祖母樣、私が國を出ましてから、御自分の御居間へ、私の着物を、掛けて置るゝそふです、そして、私は此着物を、あの子だと思つて、一人心をなぐさめて居ると、人に御話し遊ばすそふです。あゝお祖母樣、御無事で居て下さいませ。

五號活字は讀めますまい。

◎弟と雲雀　上毛　河内とめ子

妾は、昨夜、鳥になつて、無情き人の狹き籠の中で、つらい思をさせられた夢を見ました。それで、今日は弟の雲雀をそつと逃してやりました。あゝ、然し弟はどんなに怒るでありませう。

弟の怒は雲雀の喜びに代へむ。

◎寫眞　麻布　さゆり

十日と云ふ寫眞の待遠しさやつと出來たと思へばまあ此顔はと冷評されもう寫すまい次の世には小町もはだしと云ふような美人に生れませふよ。

寫眞師罪あり。

○出代　　越後　刈萱賤子

「越後出る時や涙で出たが」とは誰が謠ひ初けん住馴れし都の空を後に見て出代りの三年振、兎もすれば惑ひ勝なる里の道も眼印の銀杏を便りに。

故郷迯き姿かな。

○妹　　神奈川　谷邑たま子

妾の一番すきな、やゑさんは、妾の袂をとり姉ちやんいつ、東京へ行くの、いつては、いやよ、あたしゐとなしくするから、うちに居てちようだい。

ありのまゝとは此の如き文。

○寄宿舎の一日　　小室のぶ子

ベルと共に起き出て、身じまひ終りさて机に向へば早や食事まて、十分ばかり……六時間の授業に負ひ歸へりし新智識を整理成しをへぬ内にもう九時が、……あゝ今日も、豫定通り行かないで立つてしまつたと床の中て。

○杉子様へ　　大阪　今出春翠

杉子様、明日午後一時から私の家て歌留多會がありますから是非來て頂戴な、だけど妾恥かしいわ、何うしたつて云うの、何れ、昨日肩揚げを取つちまつたのよ。

○春の日　　大阪　大西芳枝

い、い、い、ホコ〳〵と暖かい春日和、勇ちやんは日當りのよい椽先で兵隊を列べた儘グッスリ寝込むでゐる。其の前の庭には露ちやんが草花いちりに餘念ない。ト傍の石竹に白い蝶が一つ訪れて來た。



草つみ　（選外）　下野　渡邊やす子

○空　想　　野の花

世界第一の美人に生れ、世界第一の親切な夫を持ち、世界第一の金滿家となり、世界第一の幸福な家庭を造り、而して世界第一の偉人を生むで見たい……。

○美しき雲　　岩手　木村菊子

あの美しい雲の下が妾のなつかしく戀しく思ふて尤も親しいお友達の勉強してらつしやる岩手の里の盛岡市の邊りア、あの美しい雲が何時迄もお友達と、そして妾の爲めに動かず居ればよい。

○苦　悶　　鹿兒島　市來そも子

病氣て學校を休む十日、幾度も事情を故郷へ知らせむとは思ひましたが、母君を煩はすを愁ひ今日まて！郵便！下女は早くも母君の手紙を私に渡して去つた、開けば中に三錢切手が一枚。

○愛弟の淺間観　　尾張　顯明

姉さん彼の山ん中は、何なに燃てるだらう、あの上へ大なお釜を乘せてご飯を炊いてそして日本人が一同して食べたら好いなあと是は汽車中末弟の可愛らしい頭腦に浮んだ淺間観てある。

○北海健見　　石狩　こさふく子

まあ健ちやん此吹雪に學校へ入つしやるの、驚て問へば振りかへつて、はあ姉さんの様に吹雪をこわがる人がよく北海道に住てますれ、につこりあら憎らし、刹那又も吹きくる吹雪はヒユーと凄まじく、あつ健ちやんの姿は見へずなつた。

○姉　様　　下谷　入江かつみ

私の好きな姉様、今年居れば廿三歳てす義姉様が去年赤ン坊を生んて其子が可愛らしくなるのを見るにつけ亡くなつた姉様が今居たなら家の様

な可愛い丶赤ン坊を抱く事も出來たらうにと何時も獨で泣きます。

永坂町　俊子

○炬燵

遊學中の妹より此の地へ參りてより一度も炬燵の味を知らず木枯吹きすさぶ夕など一しほ暖なりし御膝下がしのばれてとありしを弟の聞きてそれでは明日炬燵を買つて小包で送つてあげませうと。

德島　岩崎きみ子

○春の晝

今日は皆んなが揃ふてお芝居にいつたので後は妾と下女ばかし。日當の好い座敷で縫物をして居ますとお隣から眠さうな機の音が聞えて來て櫞の障子にはおり〳〵玉の脊延びする影が長々とうつります。

品川　屋子

○花の色

弟の武ちやんが、スミレインキの中に白の水仙をさしておくから、其の理由を聞くと、澄した顔で紫の花を咲かせるの。

兵庫　柳田白ゆり

○なつかしい名

苦心の作物を投書してからは御飯食べる間も授業中でも臺所しながらでも氣に掛つて當選か沒書かなど丶一箇月許り同じ事を繰返して居る内に待兼た文壇は勇しく配達されたがなつかしい妾の名は見へなかつた。

下毛　よし子

○炊事

冬休に歸省して、仙愛ともいふべき父母同胞と、久しぶりで同食するを得た、翌日から母の命令で炊事をやつたが、上出來といふことは一度もなかつた、此れでは下女も務まりさうもない。

羽後　松田せい子

○未亡人

妾はお隣の祖父樣と嫁樣とご一しよに招魂社へ參詣に行つたら、梅も綻びかゝつて淸い香を微に放つてゐる櫞で祖父樣は梅をご覽になつて家の剛が戰はどの當だらうといひましたら未亡人の目には無限の淚一ぱい。

日本橋　栗山棠柳子

○墓場

去年の丁度此頃、とある墓場の傍を通つたとき、墓場に咲いて居た美しい椿の花が、ほろりと散つてぽたりと地に落ちた、其の音がなんでもない樣だが、妾が耳の底には未だに殘つてゐる。

周防　ゆかり

○無邪氣

「あなたなぜ女學校へゆかないの」「先生でも私の內では女學校なんかへ入ると、嫁入がおそくなるとおつしやいますもの」。

小石川　中山乘子

○淸さん

淸さんが、先程から、枕時計をおもちやにして居ますから、私が、淸さん若しそれが毀れるとお父樣に叱られますよ、といひましたら、いゝえ僕にいぢらせた姉ちやんが叱られるのよ、淸さんは今年四歲なの。

福岡　大和白きく

○見たきもの

海軍大激戰と世界上流社會婦人交際の有樣と大博覽會とそれから女子文壇記者樣と愛讀諸姉樣とがほんとに見たいのよ。

羽前　みわ子

○梅と櫻

妾が度々繪葉書をねだつたもんですから今度は『そんなら女子文壇はあげないでもいゝの』つて東京の兄さんがおつしやるの、然しあの本が無けりや淋しくてお友達が無い同樣、繪葉書は大の好、妾兩方欲いんだけんど。

長崎　守月雅子

○船の別れ

私は今新高知丸の甲板に立つて懷しい故鄕をはなれ樣として居るのですアレあそこにお父樣が……と思ふ間も無かつた、一聲汽笛がブーと高くひゞく、アヽモーおわかれおとう樣ごきげんよろしうオヽ滋さんさよーなら。

越後　木村ひろ子

○兄樣の乳母

私が御育て申した若樣だから御留守中の出來事は此私が申し上げるとりきんでいた乳母は兄樣が凱旋なすつたのに只「若樣御目出度う御座います」と云つて極く丁寧に御辭儀をしてやつと顔を上げた其の目は赤くなつていた。

日暮里　小中村乘子

○梅の花

梅の花瓣が、机上に繙きありし書に散りましたとき、妾は、この花が、如何にも天眞爛漫て、何か、世の人に對して品性の薰陶を、暗示する一節があるのを讀まれました。

三河　坂本あき子

○一月二十四日

私も妹も毛布を頭からかむり頸の所を手拭で結び杖をついて學校に出掛けました、一町位行く度に下駄にはさまつたのをたがいに杖で取りあいながら、妹は私より前になつてくぼみへ落ち二度もたをれました。

○切下髪　　芝　額川よし子

四才になる花ちやん、楓の樣なお手を頭へのせ、私剃髪しても、泣かないは、何故母ちやん髪切つて泣くの、父ちやんが居ないから、今に歸へつて來るはれ。

○都の方に　　駿河　高野榮子

皆樣は靴やお袴をお召しになつて毎日御通學妾は毎日家の手傳て百姓都の方に只一目お目に掛け度いのは手拭を冠りたすきを掛け繻袢服をはきお尻を高く端折り鋤を持つて畑へ行く妾の姿を。

○愛らしの子　　大阪　兵延義子

寒風に吹かれ霜をふんで校門を入れば愛らしき美しき聲、先生お早うと四方より群がり來たり私先生が一番すき、先生のさむそうな顔、前後左右に取りすがる神の如き兒寒かりし身は一時に暖きを覺ゆ。

○朝寝坊　　富山　秀子

驚いて起きて見ると室内は明るく日さへさいて居たので、あはてかへつて何やかやと用意そこそこ、學校に急いてまゐつたが、それでもはじまつて居なかつたから大そーうれしかつた。

○姉樣　　大分　野菊

お母樣兄樣のお嫁樣つてどんな方、私靜樣が能いはあんな姉樣貰つて頂戴と申しても、母は笑つて入らつしやる、いよいよお婚禮の日入らしつたのを見れば、正しく靜樣、私は嬉しさの餘り飛びつきました。

○菊の蕊　　越後　志賀みよ子

私がいつも歸つて見ると、弟が、私の書齋を亂して置くので、今日は歸つたら叱つてやろうと思ひつゝ歸つて見ると、こは如何に、白菊をつみちらして室一ぱい、机掛まで蕊が高い。

○姉妹のよろこび　　盛岡　江刺家艶子

去年のクリスマスの日に妾が獨りて星影といふ讃美を歌ふて皆樣の稱讃を得ました。又妹の糸子は送り物にと西洋の美しいおひな樣を戴きましたが『内地雜居』だわつて其晩から嬉しおつて抱いて寝ます。

○短氣　　播磨　佐野英

恥を受くる源も短氣、喧嘩の起りも短氣、後悔の基も短氣、絶望の基、不成功の基皆短氣ならざるはなし、嗚呼實に短氣は人生の悪魔なるかな。

霜枯　（選外）　宇都宮　小島みゆき



○忙殺　　佐賀　渡辺みどり子

おや、かみなりッ！あゝ雨つ！夕立見たいな、おゝ洗濯物、妾は忙はしく飛出したら倘雄、阿飯が焦げ嗅いつて、衣慣いたまゝ臺所へ、竈の火を引くとき手を炎いて手を引いたら後の手桶轉げ水溢る。

○職工女　　羽後　鈴木しゅん子

お前が花を咲かせる時分は、妾も相當な身分になつてよ、と互にちかつて居た梅の木は、この頃やう／＼花を見せたけれども、妾はやつぱり、こんな身分で、一生を終らなければならぬのか知ら?。

○我家族　　上毛　新井菊子

妾しの兄弟は四人てす兄樣は中學三年生て、妾は補習へ通ていますが妹の二人は高等と尋常へ通ていますす學校から歸ると夕餉の用意妾わ炊事の方をし妹は火燃をするのです夕餉が終むと樂しく讀習するのがいつもの例てす。

○わらび餅　　奈良　藤田そめ子

奈良名物の一つって俗に大佛のわらび餅と云ひます、奈良へ遊ばれた諸孃は御存じてしようが一寸と風雅な物て御座います名物に旨い物なしなど云ふ諺もこれ計りは外れました。

○十日戎　和泉 羽島雪枝

さー母樣參りましようやとせきたてる所へ何所に隱れて居たのか此年尋一の弟が姉樣お母樣何所へゆくのとはや袂にすがれば戎樣にお參りして福をもらつてきてあげるからおとなしくといへば福えー先生の樣なのを

○廂髪　下野 なみ子

妾は心にかゝつて仕方がないの、何故でせう廂髪がいろ／＼な材料に用はれるのは、家の兄さんは每度も妾が廂髪に結ふと直ぐ川柳をやるの、それて時々論するのです。

○元祿摸樣　神田 大澤隆子

『まあ美しい繪葉書、姉樣の許からかしら？其とも靜枝さん……？』玄關傍の硝子窓から門際の郵便箱を臨だ時の嬉しさ、覺えず獨言ながら、心も空に大急ぎで行て見れば……元祿模樣の吳服屋の廣告。

○先生　佐賀 こふれ

お父樣もお母樣も兄弟もない、悲しい私の身は、血分けた親戚さへも寄りつけませんが、只熱い同情の淚もて、眞から慰めて下さるのは、あの懷しい先生ばかり。

○妹　備前 松本もと子

雪のふる中を學校へ行つた妹が、泣く／＼歸つてきた、そして炬燵へもぐりこんでやつと凍えた手足が暖まつたと思ふ頃『姉ちやん、今日雪がふるのによく學校へきたつて、先生が賞めてよ』。

○冬の日　日向 靜子

まあ、冷いのに、今日も亦風、何うしたら宜からう、西の吹きつけて、戶も明けられないで、あゝ、こういふ時には、あの憫な、お盲人さんの方が却つて常人に勝る益があるでしよう、と私は思つた。

○遺族　宮城 綾子

今度輸送の途中で病死した軍曹の遺族只一人の老母を問ふた。云ふ目には早や淚、『はあ何んとも有難うございます。』が二人と無い息子……外の家などは障子を張て居りますが、私の內ては』と目を拭ふ、妾も淚。

○身の上　大和 畑山朝子

此春一緒に。女學校を卒業した花子さんが。まもなく某家へ嫁入せられ。見る目も羨しい程美くしい家庭を作つていられたが。木の葉の散ると共になくなられた。ほんとにわからないのは人の身の上。

○夕暮　廣島 原田たま子

力なげに光を投げかけた夕日も落ちて赤き空はぼかした樣、人の足並も早み街路の隅々は暗く、遠山の腰は薄靄に包まれ會社の汽笛と共に出て來る工女は急ぎ足、街路にはもー電氣燈が光つて居る。

○妹の人形　神奈川 やよい

初午に買てやつたゴムの人形、妹は幼稚園から歸ると、搖て歌を謠つたり、接吻したり、抱て寢たりして居ます、先日私が、新聞紙上で、小兒を搖るは惡いと云ふ事を、讀んで居ましたら、それから少しも、人形を搖らなく成ました。

○夢　伊勢 花蝶

夜半、我が枕べに、常に我が腦裏より去らぬなつかしき亡き姉上の、ゑましげに立たせ給へる優姿、あらッ姉さん、と夢中に呼びて起き上れば、枕べのともしびふつと消ゑて、床上の梅花ほのかに香りぬ。

○虹　金澤 大地波子

俄雨の過ぎ去つた髮が嶽の山頂、足下にはまだ雷鳴り雲走る時、向ふの山巓から此方の山顚へ投げかけられた一條の錦の帶、妾のスケッチは既に雨て濡れて居る。

○かるたの翌朝　肥後 中村つれ子

いつものやうに起き出て、床かたづけて居ると弟がやー姉さんの顏はなんだと、いつてみんな大笑ひ、ふしぎに思つて鏡にむかへば、あらまー妾どうしませう昨夜洗つたと計り思つてたのに。

○嫁ぎし姉に　千葉 石渡むら子

姉樣がまだ內に居らつしやる頃御寵愛なされたあの庭の紅梅今年もまた美しう咲きました、この枝ぶりのよいことゝよく／＼見れば去年の春姉樣が短册を結んだ糸だけが結び付いてゝよ、その糸のまゝなのを一枝差上げます。

A. From Uyeno Park. From there it was to pass certain main streets and to come to Hibiya Park, but the spectators absolutely checked its course many times by coming right in front of it so that the procession was forced to take different roads to the Park.

甲. 上野公園から。彼處から重な通りを通つて日比谷公園へ來る處でしたが，見物人が丸で行列の前に立塞がるものですから不得止他の途を通つて公園に達しました。

B. I suppose there were many who go hurt by the crowd.

乙. 人込で澤山怪我をした者も御座いましようね。

A. Strange to say the papers mentioned hardly anything at all about it except one or two cases.

甲. 不思議にも新聞紙上には，一二件の外は，何も記載されませんでした。

B. Don't you think that the Tokyo people are excitable?

乙. 東京の人は騷々(サワサワ)する方とは思ひになりませんか?

A. I confess that they are, but you must not be too hard on them, because I am one of them.

甲. 正直に申せば然樣で御座います．併し貴女，餘り酷く御責めに成つてはいけません．私も東京者の一人で御座いますから。

B. You are an exception. But just think how the whole city was stirred up the other day—my sister has told me—by the rumor that a dissastrous earthquake would occur at such and such a time.

乙. 貴女は別で御座います．併し一寸御考へ遊ばせ．先日も—姉から聞きましたが—恐ろしい地震が何時々々に起るとの風聞したので全市中が大騷動であつたとかで御座いませんか。

A. I too was greatly stirred up and came home pale and trembling from the Uyeno Music School where a concert was given for the benefit of the famine fund.

甲. 私も大相に周章て，丁度飢饉救濟の爲の音樂會が上野音樂學校でありましたが，其處から大急ぎで青ざめ，震へて歸宅致しました。

it. Since my last illness, my memory is failing me.

した。先の病氣から以來，如何も記臆力が段々乏しくなります。

A. You will recover it very soon.

甲. 直に御快復にお成り遊ばしますよ。

B. I hope so. But do tell me about the procession. Did you enjoy it?

乙. 何卒か然様なりますと，結構で御座います。其行列の事を談し下さい。面白う御座りまして？

A. I did not go to see it. I wanted to see it very much, but I had a very pressing work on hand and could not go out.

甲. 私は觀には參りませんでした。大相參り度う御座いましたが丁度急ぐ用事の爲に外出できませんでした。

B. That was too bad. You must have been greatly disappainted.

乙. それはいけませんでした。嘸御失望で御座いましたらう。

A. I found, afterwards, that I was wise to stay away.

甲. 後で宅に居りました方が餘程氣が利いて居つたと分りました。

B. Why was that?

乙. 如何云ふ理由で？

A. Those who went to see it could see only the heads of the procession, or nothing at all.

甲. 參りました者は，行列人の頭丈か，或は何も見えませんでしたそうで御座います。

B. Because of the crowd around it?

乙. 行列の周圍に群衆が集まつて參りましたから？

A. Exactly. One of my friends said that she had never seen such a tremendous crowd in her life.

甲. 其の通り。彼麽人込は一生に未だ見た事がないと某友人は申して居りました。

B. When did the procession start from?

乙. 何處から行列は出ましたか？

The kind words we mean to speak when our friends are dead, let us speak while they can hear them. We wait till our friends die, and send our flowers and speak our words of appreciation. The flowers we mean to send for their coffin, let us send to brighten the rough paths for their feet. The epitaphs we mean to put upon white marble, let us carve in deeds of gentle love while ous friends are with us. Words of cheer to-day are what people crave. (Miller)

朋友瞑目の後に於て彼等に與へんと欲する懇篤の詞は，我等彼等の聽くを得る間に之を談らん。友人の死するに及んて，始めて花を贈り或は歎賞敬愛の詞を呈すは是れ世人の常なり。我等は彼等の柩棺の爲にせん花を彼等の生前に贈り，以て彼等の足下なる難路を飾ざり，白澤の大理石に刻まん碑文を，友人の我等と共に在る日に於て温和慈愛の行爲に刻まんか。今日の歡喜奬勵の詞こそ衆人の常に切望する處なれ。

The Daimyo Procession.

A. Did you go to see the *Daimyo* Procession the other day?

B. Please do not laugh at my ignorance, but tell me what that is.

A. Pardon me. I have forgotten that you were in the country at that time, and you were not allowed to read papers on account of your eyes. The *Daimyo* Procession was one of the many entertainments given. H. H. Prince Arthur Connaught while he was in Tokyo.

B. Of course, now I remember it as, my maid told me about

大名行列

甲. 貴女は先日大名行列を御覽に入來しやいましたか？

乙. 何卒餘り物知らずと御笑ひなさらないて下さい. 一躰何んて御座いましたの？

甲. 御免遊ばせ. 貴女が丁度あの頃には田舍へ入來しやいまして，御眼の爲に新聞も禁じられていらつしやいましたのてしたね。コンノツト殿下の東京に御滯在中，御覽に入れた樣々の餘興の一ツが，此の大名行列て御座いました。

乙. 然樣てした. 女中が咄して與れましたのを今思ひ出しま

女子文壇第二巻

英文

津田梅子閲　河井道子譯

Give, To-day.

Withhold all eulogies when I am dead,
All noisy sorrow;
Give me the tender word to-day
Instead of tears to-morrow.

Speak not my name, when I am passed from earth,
In tones of sadness;
At thought of me repress no note of mirth,
No burst of gladness.

Regard me not as altered when removed
To the hereafter;
Think of me still as loving and as loved
With joy and laughter.

Delay not thou when I have wounded sore,
Till thou outlive me,
To grant the pardon that I here implore;
But now forgive me.

今日與へよ

此身逝きなば　頌詞(ホメゴト)や
空の歎きを　抑へてよ.
優しき言葉　今日給へ
明日の涙は　受けずとも。

我れ世を去らば　悲しげに
此名を呼ぶを　止どめてよ.
君が心に　我うかば
嘻樂の聲を　鎮めざれ。

變りし者と　な思ひそ
假令淨土(かのよ)に　移るとも.
想ひ想はる　樂しげの
嘻々たる我と　覺えてよ。

君が心を　傷めなば
只管願ふ　御赦を
我が逝く迄と　猶豫はで
我に給へよ　今こゝに。

誌友倶樂部

○理想の夫（課題）

○　京都　正　女

妾如き淺學無才の身にて理想の夫等とはをこがましき事なりされど我身の事はいはで過分の夫を願ふは世の常なり妾も其諺にもれず願ふ人は少し學のある方にていたらぬがちの妾をも愛して下さる方此が妾の理想の夫です是れより上はのぞみませんいなこれが過分です。

○　羽前　きよ子

私に兄姉が三人ありまして皆子供が三四人宛居りますので、私は此等の甥や姪の爲に塾を作りそこから各學校に通學せしめ自分はその監督をして見たいのですからそれに同情してくれる品格ある紳士が即ち私の理想の夫なのです。

○　金澤　しらむめ

理學士か工學士。兄弟があつて其中での兄でない人。學事に忠實で然して家庭に趣味を持つた人。食物に餘り好き嫌ひのない人。酒の嫌ひな人。眉毛のきつぱりした男らしい顏付きの脊の高い人。學生氣の失せない質朴で同情心に厚く優しい人。音樂の好きな人。以上の樣に考へて居りましたが私先年嫁るべく定まりました人は醫學士で多くの兄弟の長男で食物に少しく注文があり眉のひどくきつぱりしないとが理想に合ひませんでした。

○　石見　三明米子

妾は最も健全な旅行好の人が一番好きですわ妾は鐵道唱歌を小學の尋常科の四年生で習ひましたが其頃から旅行が非常に好きですわ、それて妾は夏休業には毎年神戸の伯父さんの處へまゐりますそれですから妾は地理好の御人を夫に持つて一生世界をまはり更い景色を日々眺めて見たいと思います。

○　芝區　とき子

妾は未だ夫を理想するどころでは、御座いません、只今は通學中の妾、折角のお尋ねなれば一言申上げますが只柔和で慈悲深い人を、後はお耻しくつて書けません。

○　靜岡　福井貞水

大きくなつたらまだ心が變るかも知れぬが、妾が今思ふには身體の壯健な、艶の赤黑い、面部福相の、いろと酒の道樂を知らない、そして大食で力持ちで農事に熱心な人なら、學校は尋常小學卒業でも宜しいんです。

○　常陸　太田女史

職業なんかは何でもいゝから妾を信じて又愛して下さる御方がすきそーして悲觀的でない人がいゝ又時々は惡かつたことを注意して下さる人が大好き。容貌はどんなでもいゝが病氣のある人はいや、してあまり家内の事にさわぐ人はいやですよ。

○　霜菊

思いやりある人、品性はいはずもがな、顏形の不均一は家庭不和の基なれば妾と平均した人なればー。

○　盛岡　江刺家つや子

まだ母樣より昔話しをきいて毎夜の樂としてそ位ですもの理想の夫なんて思ひも依りませんなれどまあ假に決めて申上げますあの妾詩人や文士は本が澤山あつて嬉しいですけれど眞實は二年か三年も戻らない船長か探險家の樣な方で快活に何時もお菓子ばかりたべる人を望みます。

○　長門　沖の石

妾の理想の夫は村の與兵衛どん無口で輕薄でなくて親切で朝からばん迄肥桶かついで働きなさる、大町文學士の說にむつゝりとした御世辭のない人をいけすかない人と思ふ可からず親しく交れば情愛深き者多しとやら。

○　奈良　野の梅

妾は大臣や博士や軍人や勅任官などの樣におせわしい方はきらいよ片目であろうが口が曲んでいようが互に意氣投合するお方と田園の內で樂しく折々詩や歌を詠じ悠々一生を終りたいのは妾の理想。

○　長門　一しき

色白からず赤からず眉太からず眼少さからず大からず鼻と口小さからず丈け六寸位着る人。そして商業學校を卒業して會社か商會に出勤中。何れは見本かカタロクで營む商業家になる志の御方に。

○　麻布　八重子

私の理想の夫は海軍々人で日露戰爭に參加した前途有望の將校眞黑な顏に立派なひげをカイゼル式にひねつて私等の樣な少女を可愛がる優しい始終面白い事を言つて謠曲の好きな長れ多いけれ共閑院宮殿下の樣な御風姿の方。夫れてなければ小波さんの樣な小兒を可愛がる人。

○　播磨　せい女

私は百姓生れですから都會のように生存競爭のはげしい所よりも矢張り田舍の農家がよいと思います性質は同情深く獨立心強く忍耐克己の性に富み陰氣でなく學力も相應にあり容貌は骨格逞ましく男らしければよろしいこれだけの資格を備へて居る方は理想の夫たるに恥ないかと思ひます。

○　羽前　久代

私の希望なし居る夫はごく嚴格な何事にてもよく氣のつく上べはやかましく内心にはよく人に思ひやりある深切な何事にても約束せし事は守る人が希望、そして官に務める人が私の理想の夫です。

○　福岡　秋滿たま子

散るが道理か咲いたが無理かみ山がくれの櫻花滿身の膏血を絞つて書いたものも一向世人が見てくれずても筆を捨かない所謂窮文士の妻に……なりたい。

○　神田　白ばら

お恥かしい事ですが、私の理想の夫は健康で容貌は普通より少々下つても、品格いやしからずして、文學思想音樂思想に富み、快活にして意志鞏固、且つ職業は農事技師にて在せば百年の命を一月に縮めても露おしまぬ心得であります。

○　越後　北村やよひ

妾は由來百姓で漸く小學校を修めた丈けですから、隨つて理想の夫も階級が低ひのよ、先づ職業は農で活溌で思ひ遣りのある、お酒と煙草をあがらない、普通學を修めて村の名譽職でも勤めて居られて、そして文學趣味があつて妾にお仕事の餘暇に女子文壇を一生涯讀ませて下すつて、慾に御容色を云へば丈の高い色の淺黑ろい苦味走つた是が妾の理想の夫。

○　芝　小野綠子

耶蘇基督の爲め苦難と迫害を忍び克己よく其道を擴むる牧師こそ妾が理想の夫なれ。愚かなる此身なれど斯る夫と共に御榮光の爲めに盡さん事を切に祈るなり而してホイチヤーの「みたされし望」を實現せんが爲め朝夕高潔なる詩人雄渾なる説教者の著述に依りて修養怠らず宗教文學を研究し居るなれ。

○　松山　京子

男らしき人をこそ。

○　山口　愛香

妾は教育者殊に小學校の教師を夫とせむと思ひます其につきては澤山理由がありますが妾は小學校に居るときから小學校の教師は社會の改善者であるといふことを聞いてゐました故に妾は大に夫を勵まして現今の社會を理想的にしたいです。

○　小石川　なゝし子

身に一錢の貯へなくとも、人間が怜悧で學問があつて、性質活溌で、そして他日社會に立ち有益なる活動の出來るこんな人があたしのあの──理想と云へば可笑しいですわれ。

○　羽後　花枝女史

私は、快活な人よりも憂欝な人を好む、社會的に潔く活動する紳士よりも出世間的詩人らしき人を好む、母のあたゝかき膝下に成人し小鳥や生花を相手に世間知らずに暮す富豪の若樣よりも幾多うき世の波瀾にもまれ〳〵て寄る術もなき捨小舟、不遇に泣く多感多情の青年を眞人にして互に慰めつ、慰められつ、世をもの靜かなる山村に溫き家庭をつくりたきものよ。

○　伊勢　武部安子

妾が空想的の夫、そは醫師です神の如く天使の如き使命を帶びて病に腦む薄命な人を治療するのは何と神聖な職業でありませんか、然しこは妾が看護婦と云ふ地位から考へる迄です、容貌は望んだとて致方がありませぬ妾がお多福ですから！

○　伊勢　うた子

氏なくして玉の輿とやら申します此世に妾とて榮譽利達を望まんのではありませぬ、然し妾の理想の夫は美術家で溫厚篤實な性質を有し獻身的の愛を捧げ得る人が好ましい、これは妾の父が神職ですから其感化から來たのでしやう。

○　近江　辰井琴子

獻身的愛情のある人妻を呼捨てにせぬ人接吻を辭せぬ人萬事妻に相談する人馬鹿に高く止まらぬ人詩歌小説に趣味を有する人書畫音樂に趣味を有する人教育に趣味を有する人健康なる人溫和にして同情深き人色なれば紫の如く派手にして高尚なるを愛する人。そして職業は醫師美術家詩人文士。

○　岡山　中野波子

妾の理想とする夫は、まづモルモン宗否認者で而も愛せらるゝ夫としての如く、妾を最愛して下すつたならば、貴賤上下の區別はないが、思想が高尚で、實際の行爲として現はれ、容貌は眼元がパッチリ鼻高く口がしまつてカイゼル式の、ハイカラでなく古英雄の如き面影の人。

○　滋賀　淺野八重子

如何にも男らしく、高尙なる精神に富み、年は二十三、四歲、現在は大學生で、未來有望なゼントルマン、容貌は美にして、妻の權利を認めらるゝ御方。

○　赤坂　むらさき

顏はリンと結んだ口元涼しい目ピンとした口ひげ……心は忠實でたとへ貧しても道德をはづれず、かぎりなく私を愛して、常に活潑でも心の內はよくしまつてやさしく私の缺點を敎へて下さる方……文學と音樂の思想のある方……

○　佐賀　いばら

私はまだ學淺く德具らずこんな事いふ資格はない者ですが何年かの後出來たらばとのぞみます私は海軍軍人が好です妻を充分信じ最愛の妻と思ふて愛して下さる方血統正しく容貌は普通にて髮も鬚も濃く耳小さくなく丈は高い方私が廿て結婚するなら廿五六で大尉位國は少し遠い方です。

○　近江　ＳＳ生

私は醫學士であつて風采堂々として氣品高尙で何に限らず心に飽きを來さず常に長閑なる春のごとき心を有し少し音樂的思想を持つてゐる人です。

○　茨城　月の舍

私しは農に從事する夫が望みなのですそうして智德勇の揃つた大軀な色の黑い眼の光る夫を持つ事は常々祈つて居るのです。

○　筑後　白雪子

決して好男子を望むのではございません、唯だ工業家にして其人品確乎てあり節操を重んじ、妻の爲めには一生を犧牲とし、家政の些事に一一小言を言はず常に妻に對して厭味を言はず共に相愛して生涯を送り得る樣な男子。

○　讃岐　月江女

私の理想とする夫は帝國の軍人一見奧床かしく沈着にして寡言大勇ある人にて輕薄ならず確固たる精神を有し身體の健全なる容貌は男子らしく其中に溫和なる風の見ゆるものを理想とす。

○　美作　一少女

大酒を呑まぬアノ迷ひ心のない、心情柔かな普通學力を有す、廿二三の色は極白くない、然し印度的はいやです。

○　千葉　すみれ

兄上が海軍でありましたせいか私は海軍士官を望むで居ります性質は勇ましい快活な才智がありまして軍人としてははづる點がない人で同情があることは私の親友の撫子さんの御兄上樣のやうにある人ならば容貌は少し位わるくともよいのであります。

○　若狹　菫子

我が信ずる神の惠と主キリストの靈に依りて敎極に招かれ誠實に神を愛し主を信じ忠實なるクリスチヤンたり。

○　久留米　なみ子

筋骨逞ましく、言語明瞭にして、何事にも男らしく活潑に、心やさしく、愛情に富みたる人にて海軍軍人を望む。

○　東京　谷龜たま子

妾の理想する夫の性質物事にとんぢやくせず廣大なる心をもち居り、じぜん心ある敎育家。

○　大阪　かれ子

幽想の夫は軍人!!容貌は坂上田村麿に似て、高尙な趣味を有し、涙あり、血あり、英敏にして快活なる君こそ私の理想の男性。

○　肥後　いてふ

えんりよなしに申上ませう、身を軍籍において國家の干城として、少しもはづるところのないやうな決斷力に富んで活潑でそして愛情にとんだ方よ、色の黑くて體格のいゝ方私の理想の方だわ、色のしろいにやけた方私大きらいよ。

○　德島　小野木いそ子

妾望みの、理想の夫は醫學博士です、性質は溫順で、お酒をのまず、無益にお金を費やさず、發明で活潑な方がすきです、私の一番きらいは酒のみです。

○　安藝　谷間すみれ

人は軍人花は櫻と云ふ事がありますから、私は軍人が第一望みなのです、其軍人中にても海軍は特別です、容貌は色の小黑き目のぱつちりとして、體格の宜いのが、私は其容貌は第二として、精神のレツかりとした人が理想。

○　美作　沼元山椿

妾の夫と頼む人は未來有望の軍人さんで親切で品行のよい年頃二十一二の人。

○　近江　原野征子

同じ月給取のお方でも、官の御役人樣よりは、何れかの銀行や會社などへ御出ましなされる方がよい。申すまでもなく、何事にも親切な方、御酒などは少しも飲がらぬ方よりも、少しはお飮りなさる方が御氣樂でしよう、中學や高等學校の御出身よりは、商業學校などを御卒業なされた方のがよろしい、さうして子供を極々可愛がりなさる方。

○　出雲　白菊子

軍人にして、血統よき健康なる夫、深く教育に趣味を有する夫、品性よく品格高き夫、規律正しき夫、家庭に趣味深き夫、愛情深き夫。

○　涙子

職業（哲學者）强弱（身體强壯なる者）平生（常に熱心なる者）行狀（品行方正なる者）愛（妻を愛する者）性質（稍神經質なる者）風彩（丈長く顔少しく苦味走りたる者）

○　周防　田村歐子

理想の夫とするものは醫科大學校を卒業せし者若しくは工學士に限る。

○　石見　野上香

我望む理想の夫は醫科大學を卒え尙經驗を積みまさに開業せんとする御方もしくは文學士にて歐米各國を視察し大に國家に功勞を及ぼす如き進取の氣象ある方性質は短氣になく溫順にして餘り人のよきは好まず身の丈五尺五六寸以上。

○　名古屋　獅子海なか子

家は貧乏で、妾は醜貌おまけに無藝無才だけれど、慾の世界で希望は大なるものです。商家の子息にして、普通の教育あり、猛ならず、男ならず、中を得て、博愛心のある人、容貌厳にして威あり、且つ美にして雅なる人です。

○　府下　磯ケ谷紫江子

私の理想の夫？　御酒煙草を飲まない無精でないハイカラの方目鏡を掛け丈の高い鬚のはえて活潑で金使の荒くない文學美術音樂の趣味に富んでゐる男子なれば文官武官腰辨當でもかまわないこれが目下私の理想の夫よ。

○　下總　學海女史

教育家か、軍人或は、辯護士のやうな御方で御座います、然し皆さんきつと笑はないで下さいませな、御恥かしう御座いますから。

○　美濃　かず子

妾が理想の夫とは法學士位にて、會社銀行の重役で、趣味を持ち、理窟ばかりを云はぬ能く自分の妻たるものを愛して下さる至極溫和な方、容貌はあまり能くなくても當世風のハイカラ。

○　宇都宮　蕊花子

我が理想とせる夫は、心鐵石の如くにして同情心に富み果斷力を有し、事に當るに沈着に。粗放に流れず、常に快活にして人に接するに爽かなる人、軀幹は長大に骨格逞しく凜として侵すべからざる威嚴ある海軍々人たるべきこと。

○　武藏　山口邦子

血統の正しき人、身體健全なる人、教育と相當の財ある人、品行の正しき人、人に信用せらるる人、獨立心にとみ忍耐力ある人、虛榮心なき人、善良なる實父母及び兄弟朋友を有する人、大酒せざる人、いさゝか育兒に心得ある人、生涯自分を愛する人。

○　鹿兒島　とみ子

私が夫をもつと致したならば先づ海軍大佐位のこく活潑なる、面長き目の大き鼻の隆くして丈の高き人を望みます。

○　常陸　小泉はま子

無理にも妾の心に言はせたならば、現在の職業階級の貴賤上下を問はず、未來に望みを有する男子なので、つまりそんな人を心から扶けて、苦樂を共にしたいと思ふのです。そして性質は快活で、詩的趣味のあるお方、容貌は別に申す必要もありません。

○　大隅　山本蕊花子

職業に貴賤の別は御座りますまいけれども教育家程善良に且潔白なるものは御座りますまい而して其教育家のために世の中の良否は定まるのであります故に妾の理想せる夫は善良なる教育家で御座ります。

○　愛知　千鶴

「職業」醫師を望む「性質」博愛の心あり而して儉約にして吝嗇ならざる人を望む。

○　松山　黑紅

情にあつく身體强壯で性質淡白、文學思想に富み、なほ言へば、容貌のあまり見ぐるしからざるもの。

○　豐後　拙子

脊高く色白からず黑からぬ一寸氣高い立派な體格で血族に遺傳性傳染性の病なく大酒を好まず中等の生活をなし得る財產を有し中等の教育ある着實な人なれば職業は何でも好い。

○　和泉　みどりの少女

妾の理想の夫と云ふのは、第一壯健で高ぶらない品のよい御方。第二には學問のすぐれたハイカラでないおとなしい御方。第三には餘り多辯でない御方でなるべくならば美しい……。

○　築地　興志子

私れ顏と姿はどんなでもたゞ氣質によると思ひますわさつぱりして同情に富んでおほように心の廣い男らしい海軍士官が私の理想。

○　京都　田島兼居

私腹藏なく申しますれば、理想の夫は軍人殊に海軍の御方ですの、何故かと申しますれば、男

子として、軍人ほど花々敷愉快なものはありませむれ。其妻となつて内助の功を立て、夫は外て國家の爲に儘す、是れ程樂しき事はないと思ひます。そして軍人の中でも廣瀬中佐の如き人が大々理想の人よ。

○　陸奥　櫻　花　女

私は人に頭を抑へられるのが大嫌ですから夫もそう云ふ方を選むつもりよ 先づ職業は農か商を業とする人で中流の生活を成し得る丈の教育があつて道德の堅固な人性質は膽汁質がよい小心て愚痴なのと女に甘い男は大嫌です容貌は丈の高い色の黑い目も口も大きい勿論鼻の高い一見して尊敬の念の起る樣な人が私の理想。

○　駿河　芙　蓉　子

義俠博愛心ある忠實な實業家で男子らしく活潑て少しもいやみない人を望みます。

○　高崎　佐藤つる子

私の理想の夫は實業に從事する人がよいと思ひます 當世の女學生等は皆大學卒業生だとか又は軍人などに望みをかけて居ります 私も女學生のかたわれてすが これからの日本は實業が大切てす 故に他日其妻となつて夫を陰ながら助けたならばどんなにかよいでせう下に書く樣の人はいやですよ、酒を澤山飮む人、病氣のある人、持參金を當にする人、喧嘩を好む人、放蕩する人。

○　西都　竹　雨　子

病身ものですから常々醫士を夫に持ちたいと思ふて居りますの、けれど世間には意氣揚々たる醫士も澤山御座いますが 妾は美男子の名醫極く謙遜な御方がほしいのです、希くば貴社先生御媒介あらん事を。

○　三田　松川ひて子

職業は 博士性質や容貌は一寸見たらこわい樣な男ましい樣な そしていつくしみ深い、お優しいお方が理想の夫て御座います。

○　岡山　谷川雪子

私は容貌普通の方て中少尉ぐらひの階級て 性質は如何にも軍人らしくて愛のある陽氣なる方が私の理想の夫てございます。

○　府下　さかえ

一、理想の高い人、二、生活の低い人、三、愛心の深い人てあります。

○　伊賀　平井とし子

私の理想の夫は 詩人て極くうちとけて心のさつぱりしたおかたがすきてあります。

○　伊勢　宮崎千代子

皆さん 何だか大きな事を云ふ樣て有りますが今の世の中にて 妾の夫と賴むべき人はないと云ふて宜しうござります 今の男子は墮落腐敗して居ります妾の理想の夫は 出來るならば質朴剛壯のお人がほしいてすわ。

○　陸中　三光女史

丈高からず、所謂中肉中背て、色淺黑く、見るから凛々しく、而して、愛情に富み、社交にたくみなる、熱心の實業家にして、度量の寬大、沈着、勤儉などの諸德を備ふる人なり、要之、美男子にして、浮氣なるより、寧ろ、醜男なれど、以上を兼備せる人こそ妾の、理想のハスバンドですの。

○　岩代　安　子

私の理想の夫と致しますは軍人てす 軍人の妻になりての望みは 子孫を君國のために御奉公をさせたいのです性質は活潑て希望を正しく そなへてある 人を望みます次に身體軍人は身の弱い方もあるまいがでも健全な 人容貌は第三として之は常人てあればそれてよし。

○　芝區　川嶋芳園

今から斯樣な事を申ますと 氣まりがわるいのてすけれど 將來の夫を撰びますには正直は云ふ迄もなく 第一壯健てお酒の嫌な才學の博い其上親孝行て溫和て妻に少しの心配も掛けず 優さしく愛して何時も花さく春の心地て 家内中を愉快に暮させ 一生變りのない 人容貌は普通是れが私の理想の夫。

○　福井　ともゑ姫

文學に多大の趣味を持つて居て 感情の深い優しくつて何處となく 威嚴のある人そして何事にも觀察の廣い宗教を信仰して めぐみ深い人是が妾の理想の夫なんてすよ。

○　橫濱　松　月

私の理想的良人は 大學出身て只私と相愛し苦樂を共にし樂しき生涯を送り得る 良人を言ふのてす 性質は意志の堅固な愛心に富み快濶て世の中を光明的に見る人を 最望致します 職業階級は論じません況んや 容貌などは不具てない以上はなんてもかまいません。

○　伊勢　美　露　子

會社員、 性活潑にして深切、 大に家庭の趣味を有する人、 自分と餘り年齡は 相違なきこと、 美貌ならぬとも風采堂々たる紳士らしい方。

○　駿州　河井靜子

妾は(人格、理想、共に高く、 體健、性溫順にして男ましく、容 貌美なる 陸海軍青年將校を望む)……と云 て妾如き淺學無智の者の空想にのみ。

○　駿河　高野榮子

第一ハイカラでなく至つて磊落で文學士位の田舍へ住み相な顔艶の透き通る樣なお方軍人はいや今の姉さんの樣になると……。

○　本鄕　山崎義子

妾の理想の夫は容貌は普通にてあまりみにくからずさらばとてあまりにハイカラの好男子ならず性質は溫和にて妾を可愛がつて下さる方で商業學校卒業生で外國貿易をなさる方が妾の理想の夫なのよ妾は學者や文士の方は望みません。

○　讃岐　茂子女史

妾の理想の夫は政事家で世間から善評を得て居る人である、性質は常には極沈着で人と議論をする時には一歩も引かないといふ樣なので容貌は極體格のよい背の高い人であります。

○　東京　花江子

階級は新平民にて充分なり、世の所謂ハイカラでなく、學德のある民間事業家にして、文學思想と音樂趣味とを有し、且つ又眞の愛情を以て妻子に對する御方なれば、高名富貴風の如しとも言ひましやうか、これ以上望みませぬ。

○　三重　山田ひさ子

私の理想とする良夫は、お耻い樣ですけれど此れだけの事を備へて居なければならぬのです、文學的趣味のある而して性質が活潑で愛情に富むだ人です、勿論學問はある人でなければなりません。

○　京都　梅子

官吏にあらず、軍人にあらず、實業家にて前途の希望ある、交際好きの、子好きの、又音樂を好み、しかして慈善心に富める人。

○　兵庫　口なし子

私の理想の人は常識に富み且つ宗敎心を持つて入つしやる文士の方です私は凡てを犠牲にして喜んでつかへます、そして境遇の如何に係はらず、共に光明にして價値ある生涯が送り度いのです。

○　讃岐　香川みさを女

妾が二世までも結ばんとする理想の夫は怒る時は猛虎も退き笑ふ時は小兒もなつき且つ精神一到何事不成の氣に富み、死して後止むの心掛けある正直の將士即ち大和武士なのです、御笑ひ下さるなよ、又妾の妹は佐々木信綱先生の樣な御方に御嫁になりたいつて居るのよ。

○　府下　文子女史

妾は姉上の樣に大望は夢懐いて居りません、ただ耻しながら、文學を好む妾のことにしあれば理想の夫も亦文學を好ませ給ふ方なのよ、御性質ですか溫和でしかも男子らしき方、容貌は出雲の神に任かせます。

○　遠江　伊藤平子

財産の豐富容貌の秀麗亦共に喜ぶべしと雖此等は敢えて我れのえらぶ處にあらず想ふに才學世に超えて識見自ら高く常に奮進的氣性に富みて剛毅磊落是即ち妾が理想の夫たるなり。

○　秋田　松田せい子

境遇の如何に拘はらず終生苦樂を共にすといふ精神の確固たる人但し純粹なるクリスチヤンは此の限りにあらず耻かしながらこれはわたしの望む夫なのです。

○　東京　芝野水江

夫は慈悲深くして心おちつき言もあんまりいはず容貌見悪くからず面白き事有れば共につれてつてくれ一人でたのしまず私の望のものを買つてくれ物ごとによく氣のつく人を望むのよ。

○　米澤　美登里子

海軍々人で中肉の長けすらりとして色黒で心持やさしくこせ／＼しない氣取りもしない元氣がよく白い齒が生い立ちよくて音樂は大好きでひまの時には星やすみれに筆とる方なら。

○　金澤　北國女史

別にありませんが少々思ふて居ります職業は軍人乃至實業家に限る壯健でかつぱつで多少思想があり愛のゆたかな人、又丸顔で少々赤味を帶びカイゼル鬚で丈高く飲酒を多くせず但し財産はさのみ多くを要せず、あらましは此通り。

○　青森　絹子

一理想の夫の性質は正直快活にして職業に勤勉なる事、二理想の夫の職業は軍人若くは官職、三理想の夫の容貌は十人並餘まり美男子を望まず。

○　美作　錦澤

職業は何にても更に問はず極多忙にて品行方正言行一致萬事秩序的なる人なれば如何なる辛苦も水火の中も共にすべし。

○　大分　安東龍子

妾の理想の夫は、富豪家たる者にあらず、高襟たる者にあらず、紳士たる者にあらず、唯々、學の庭にいそしみつゝ、眞の愛を以て妾を愛する者なり。

○　牛込　ひくれ

あたし美術家の夫が持ちたい財産はそうなくても色の白い愛嬌のある深切で長く其の人が私の心を見て貰ふと云ふのなら喜こんで行く。

○上野　白萱

私の理想の夫は、心が優しくて、短氣でなく、眞心から妻を愛する、財産は遊んで食べて居ても差支へなく、學問は、自分が中等教育を受けて居るのですから如何しても、中學校卒業、左もなくば、學士とつけば、結構です。

○高知　香溪女

色の黑い體格のよい丈の高いよく働いて妻に對して親切な身持ちのよい親に向つて孝行なちと文學のたしなみのある音樂をこのむ謙遜な質朴なお百性さん――。

○飛驒　萬あき子

出ては天下を風靡するの豪傑たり入つては兒女も懐くべき溫容の人こそ、妾が理想の夫なれ、悲しい哉、妾が眼界未だ此底の人に接せず。

▲新課題▼

▲我が愛讀書（四月五日〆切）

委細は前號に在り、但し前號に書き洩らしましたが愛讀書は書籍に限るので新聞雜誌の類は一切書かないこと

▲お國自慢（五月五日まで）

▲お國自慢とは諸孃がお國の自慢を何でもかまひません承りたいのです▲お國と云ひましても其一郡なり一村なり一國なり一町内なりの特色とすべき事柄を申しますのです▲變つた人間、善人、不思議談、珍らしい植物、建築物、名産、地方特有の歷史、口碑、風俗習慣、兎に角其地方の自慢話として傳へられてある事なら、事件の大小、種類の人事と自然を問はず何でもかまひません、浪華のあしは伊勢の濱荻、所變れば品變る、お國名物さまざまあれど田舍なまりの片言交りて結構ですから澤山に願ひます▲行數は七行以內▲半紙にはつきりと書くこと▲「お國自慢」と題を書くこと。

○諸孃と記者

○記者樣　私は御茶の水の四年生で御座いまして御雛樣の日で丁度滿十六歳になりました此文は先月先生から二時間の即席題で作りましたもので御座います　家へ歸りましてから毎日々々考へては直し直しては考へ凡そ一ヶ月計りて漸く一つ出來上りましたから御恥しう御座いますが差上げて見ました　屑籠に入れられるのは元よりの覺悟で御座います（文子）（記者曰、多く讀み多く作り多く直すのが作文の秘訣と申しますからさぞ骨が折れたでせうけれど、それだけ、お作は立派になつたわけです）○記者先生、皆樣、御機嫌よく、私は初めからの愛讀者ですが姉樣方の御作が御上手なんて、私等田舍者の無學な、それに初めてなんですから、恥かしくつて出せたもんぢやないんですが、一度、先生の御手數を願はんと、決心して、拙文を差上げましたが、これでよろしう御座いますか（大阪府三千代）（記者曰、原稿の書き方はよろしう御座います、此外澤山の諸孃から書き方に就いて記者にお尋ねになりますが大抵は宜しうございます、若し間違つたら御注意申します）○一寸記者樣に御たづね申ます誌友倶樂部におくりますには　文壇社內誌友倶樂部記者樣宛　とかいて出せばよろしきか御手かずながら次の誌上にて御敎へ下さい（奥野墨枝）（記者曰、仰せの通にてよろし）○記者樣に御伺申升　誌上には雅號にて御願致し度い時は投書致す度毎に本名を申上げねばなりませんか（山里賤子）（記者曰、記者迄へは成るべくお明かし下さい　他へ洩らしていけない場合には責任を以て他言いたしません）○我敬愛する記者の叔父さんよ　未だ私は高等の四年ですが文壇のおかげは實に大いな物です記者の叔父樣の御親切なこと　給へがキ口給のよい事私今はじめて投書します、これでよろしいか（廣島愛讀一女）（記者曰、いつのまにか記者の叔父さんになつてしまひましたのはをかしいです、願はくば永遠に諸孃の爲に好い叔父さんたらんことを望んで居ます）○開封とは如何なる事ですか記者樣お敎へを（武州田舍女）（記者曰、狀袋の封をしないで開かれるやうにして、コヨリか何かで結ぶのです）○女子文壇取次店から買つて見て居りますけど、直接送つて頂きたいのですが金はどうして送るのですか本誌で御しらせ下さいませ（出雲、白菊子）（記者曰、半ヶ年分とか一ヶ年とかを爲替又は郵券にて送り下さい）○私は師範校在學中より女子文壇をこよなき友と愛讀致居ります私は只今の樂は　毎日里の童の罪なきを相手に生ひ育て行くのと文壇をよむのとです　記者先生私は今から愚作を投書致ますから何卒宜敷お願ひ申ますそれからおかしな寫眞御送り致しますから御用濟次第御返し下さいまし寫眞は宛名はやはり御社宛てすか（香川縣三豐郡巨鼇山麓今井月江）（記者曰、神聖なる敎育の事業に從事遊ばすやうにな

りましたのは結構です、お寫眞はあき次第お返し致します社宛て宜しい）○記者樣妾は本誌を今迄、或本屋から取つてをりましたが、どうも後れて困ります、それで次號からは直接貴社から講讀するつもりなのですが、投書してもよいでせうか（尾張庄内川の畔秀翠女史）（記者曰、御念には及びません、遠慮なく盛んに投書して下さい）○記者樣伺ひますが、はがき文は僅か四行ばかりですから一枚の用紙を使ふのも不經濟ですから今後は半枚へ記してはいけませんか。それからはがき文はがきでの投書はいけませんか。どうぞお答へ下さい。（遠江相良河村秋子）（記者曰、全く四行ばかりに一枚を費すに及びません、半分で澤山です、ハガキでもよろしい、半紙半分より小さい紙へ書いたのは困ります）○記者先生に御伺ひ致します此迄皆樣の原稿に妙所には圈點が打つて御座いますが彼はいかゞですか、私は投書規定に圈點は一切施すを禁ずとありますから圈點は打ちませなんだが此でよろしう御座いますか御めんだう乍ら次號で御知らせ下さいませ（三千枝）（記者曰、紙上に出る詩文に圈點を打つてあるのは皆選評なさる方が打たれるので作者自身に打つたものではありません）○記者さん妾等は姉妹で御座いましてまづいのですが二人して投稿しますから何分宜しく御願ひ申ます田舍乙女と申ますのは妹で御座います私が代筆致しますのです妾等は和歌を稽古致したいのですが田舍の事とて師と云ふても御座いませんので困つて居ますが、何と云ふ本を讀みましたら宜しう御座いましよう、誠にすみませんが誌友倶樂部で御敎へ下さいまし御願申ます（飛驒十六夜女史田舍乙女）（記者曰、和歌には澤山本がありますから一寸是を御覽なさいと一つ二つ申上ろ事が出來かれます只いつも申します通り、深く廣く古今の和歌をお讀みなさい）○原稿が規定の紙にそむいて居れば誌友倶樂部のまゝ沒書になるのですか二三度投書しましたが一つも誌友倶樂部にのつてゐませんどうしたのでせうか（豐州紫明）（記者曰、斯う云ふおたづれは毎月何百通とまゐりますので迚も一々お答へ切れないて、相濟みませんが拜見するだけでお答は致しませんが規則違反なれば申します）○記者樣お尋ね致しますあの圖畫は鉛筆で書いてはいけませんか妾鉛筆畫なら少しは出來ますが如何でせうお知らせくださいませ（盛岡艷子）（記者曰、鉛筆畫は採用しません）○倶樂部への通書にも假名を付けますか又二十四字詰に書くのですか投書には名のみではいけないのですか（蝶）（記者曰、假名は不用、二十四字ならずともよし、名のみてもよし）○女子文壇第一卷第二、第四、第五、第六、第十、第十二號以上各一册づつ全六册御社に無之候や（第一卷は三、七、十一丈けあり）

○諸孃の交際

○皆樣の内五歲以下の御弟妹を御持の方は其御寫眞を送り下さいませんか舶來上等繪ハガキか或は御好みの雜誌で御禮致します、又十歲以下の諸孃に繪ハガキの御交換を願ひます必ず即時に御返事を差上げますよ（橫濱市南太田町千七百六十七番地清水康太郎方清水紅薔薇）○誌友の皆樣何卒お寫眞を下さいませんかそしたら私は肉筆の美人畫はがきて古風俗又は今樣なりお望のにて御送付申上げます大阪の誌友の方にはお遊びにお越なさいませ（大阪市東清水町一番地杉田壽みれ）○諸孃よ妾はアメリカ好きて、倘此のスウイトの女子文壇毎月毎月見るのを樂として讀ます妾は諸孃と英文で御交際致したく希望します御希望なれば外國の少女（米國）を御紹介致します諸孃の御寫眞を望みます御先着の方には、妾の米國で寫したのを御贈り申します（神奈川縣愛甲郡下川入村九百○三佐野衣子）○皆樣各自の御寫眞御送り下さいまし先着十五名に左の品を呈します一、花紅葉二、黃菊白菊三、自然と人生四、うもれ木五、花と少女六七八は、一寸巾のリボン二尺づゝ九十十一は五分巾のリボン十二から十五迄はムラサキ、ハガキ文學、女學世界、少年界の各雜誌を呈します（東京府下王子大島方大谷みどり）○皆樣相變らせなく御便り下さいまして有が度う存じます一々御芳名を記すのが何分澤山の方てすから御一同に御禮を申して置きます當地は外國てすけれど一錢五厘の切手を御はり下すつたら參ります（韓國京城旭町二丁目奧田惠以子）○繪葉書の交換玉章寫眞編物なり菓なりを御送り下さい妾も好い物を御禮致します（山口縣柳井町桶ノ上島津廣吉方芳江）○きさらぎ號新體詩欄に（秋のつとめ）と云ふ題にて神戶喜久惠と云ふ方が出して居られますがあれは私の作でもなく私の投書したのでもなく全く同名異人なのですから皆樣左樣思し召して下さいませ（神戶元町五丁目高井菊江）○きさらぎ紙上に申上ておきました書籍お望みの御方は總て四十名ばかりも御座りました先着のお方には望の本に妾の寫眞をつけて送り申しまし

た二着者には自作の栞を送り申ました（大和利子）○私は母も兄弟もなく只父と二人ぎりてすのどうぞ同情に富める皆様文通して下さいまし（日本橋區元大工町十五番地松井病院內松井靜代）○久須美白鳩子樣衣更着紙上に載せてありましたあなたの露と花と申す新體詩何となくおなつかしうございますどうぞお住ゐと御本名をお明し下さいませ（露子）○讀者の皆様より御申込下さつて誠にうれしく存じます御申込の方が多いのでおことわり致した方が廿人あまりてございました差上た方は三十人位てございましたてすからおことわりした方々必ず惡からず思召て下さいましさよなら（本所猿田瀧子）○誌友の諸孃樣妾は草深い片田舍に語り合ふ友もなく淋しく暮す文壇愛讀者の一人です、何卒文通の交際等して下さい（陸前本吉郡氣仙沼入崎りん子）○皆様來文て澤山御手紙下さつて難有う御座います然し男子の御方樣には御返事を差上げませんドーぞ惡からず（横濱市中村町一四〇四南小柿方ゆき子）○妾は片田舍の者てすから繪葉書道樂して喜んてるの以後は寫眞なり文通の交換をしまして變つた所の樣子を知らして下さい妾もつたない筆乍ら御知らせいたします（大和國生駒郡郡山町中代官町森本峰子）○愛讀者の皆皆樣美はしい繪葉書に和歌一首か又は俳句など記して御交換御願ひ申ます必ず御返事はいたしますから倘地方新聞の御交換も御賴み申します（大和高田町樫野つれ子）○皆樣、妾如き者へ御交際下され有難く御禮申上ますあの寫眞はあまり御望みのお方が多くありましたから先着のお方十名へ差上ましたから何卒御ゆるし下さいれ

（久留米雪子）○宜しく御願ひ致します且又レターの交換をも御願ひ申ます（廣島市上流川町六入林菊野）○千葉金澤てい子樣堺金澤しぐれ樣御同姓てなつかしいのれ、妾は淺學の者てすが何卒御文通を！（栃木縣宇都宮市今小路町金澤保子）○親愛なる諸孃君よ御寫眞手紙等の交換を願ひます先着二十名へ書籍を差上申ます最も貴孃の寫眞を下さつたお方には妾の寫眞を添へて差上申します（吳市北小原百四十六武內文子）○エハガキ寫眞交換及び文通もよろしく又當地方に御用か聞きたい事てもあるなら御問下さい（福島縣福島町萬世町下河邊方にて遠藤園子）○皆さんわたくしも第一號より購讀者となりましたからゑはがき交換及び御文通をのぞみます（紀州粉河町森川書店內ひさ子）○諸孃よ、爾後盛に繪端書、寫眞、地方新聞、雜誌の交換を乞ふ（高知市北新町上杉方竹內驍）○皆さん私は女學校を卒業してから宅に歸つてますが淋しくてたゞ女子文壇とのみたのしく暮すのみてすどうか御交際下さい（三重縣鈴鹿郡龜山町桑名恆子）○愛讀者諸姉さま私も愛讀者の一人て御座いますどうかよろしく御交際下さいましな（鳥取縣鳥取市南本寺町石尾政子）○諸孃さん妾片田舍にゐる一少女てあります何か御交際をして下さい（福岡縣京都郡祓郷村字草場秋滿たま子）○御孃樣方妾は不束者てすが御交際を願います行末長く親密に御交際なさる御方は此際御自製の栞か、美術的興趣の畵はがきにて願ひます（東京府內藤新宿番衆町二番地藤田方有村花江子）○愛讀者の皆さん私は姫路白鷺城の麓にうづくまつて居る者なんてす何卒御交際下さいな（姫路

郵便局區內八代村五十五番地三木喜代子）○御交際をねがひます、またゑはがきや御美しき玉章の御交際をねがひます左樣なら（盛岡市高崩一四四梅村安子）○名は露と申ます年は十四になりました兄樣は中學世界のお友だちと玉章の交換致し愉快々々つて言ふて居りますから、どうぞ女子文壇の姉樣妾にも玉章くだされ嬉しい嬉しいつて言はせて下さい書けないながらも御返事申ますから、終りに栞の交換も（埼玉縣大里郡久下村島村正香方島村つゆ子）○妾はれ牡丹咲や大輪咲や其外十二三種混合した朝顏の種子と撫子や石竹や其外數種の草花の種子を取つて居ります御希望の御方は何品とても御交換を致します（備中國笠岡町河邊屋町加藤內にて佐藤芳子）○妾は南越の片田舍に住んて居るものてすから何卒文通や繪はがきの御交際をして下さい妾は武生町近傍の風景繪はがきを上げますから又うつしゑも同樣に願ひます（福井縣今立郡北日野村矢放橋本喜代子）○妾は愛讀者の一人て御座い升此度普く本誌愛讀御諸孃樣方に向て御願申升妾は水府生て御座い升が裁縫教師に聘せられ片田舍に奉職して居り升仁惠の御諸孃樣等よ妾をあわれみ寫眞交換並びに文通を願とう御座い升（茨城縣新治郡園部村眞家長谷川菊次郎方にて仝ふみ子）○皆様御寫眞をたまへ妾のも差上ます（韓國京城旭町奥田榮子）○誠に不束者ですが何卒御交際下さい繪ハガキも寫眞も交換のお仲間入いたします（弘前市鍛冶町三十番地淺野松江子）○皆樣何うぞ御交際ください！（金澤市西堀川町智覺寺內伊藤みさを）○皆樣寫眞の交換を願ひます倘お年を書いて下さい私と同じ

年の方には 外の物を添へて差上ます（岐阜縣安八郡大垣本町渡邊一郎方 坂東英）○妾は淋しき小都會に暮して居ります 寫眞の交換をれがひます 又女子必讀の書物も持つて居ります お望の方は寫眞を下さい（美濃 武儀郡金山町早川あい子）○親しく御交際をれがひます（大阪府三島郡三宅村脇田方秋月治子）○私も愛讀者の一人になりましたから親しく 御文通して下さい（大阪西成郡北傳法一丁目橋本美智子）○賢明なる姉君樣方よ私は當年十八歳になりますが 八歳の折母に別れまして 學校も小學校を終へたばかりの淺學者であります女子文壇の外に友もなくまことに淋しく暮して居ります 何卒この不幸者を末長く御見捨なく 御教訓下さる樣伏して御願申します（陸中國 下閉伊郡鍬ヶ崎町篠かつ子）○皆樣私に「朝顔」の押花がございますのよ、 お望みの方はお申越しあそばせな、 ニリン宛レツターに添へてお目にかけます 但美しい珍しい繪葉書であそばしてよお早くぢやないと 不可ませんよ（北海道龜田郡七飯村松井長子） ○長崎縣の清水はま子さん度々新聞を送つて下さつて有難う御ざいます どうぞ御住所をくはしく御知らせ下さいな（北海道樺戸月形村 小鹽清子）○拙き者ですけれ共宜しく御交際を願ひ升 又繪葉書の交換も願ひますよ（岩手縣盛岡市葺手町 五番戸大江登美子）○皆樣の內にて、 古文など 好める方あればよこしてよ 必ずかへしますさなくとも文通など大に望ましう存じます、 また寫眞 繪はがきなど交換して下さる方あれば こよなう嬉しいこと、心ある方は 切にたのみます。 また編物おくらるゝ方には、わけて御禮します（廣島市 天滿町一五五四川方玉川浪子）○諸孃樣の中て寫眞を惠て下さる方はありませんか。 惠んて下さるお方には、先着十名に限り、 妾の寫眞に美しい繪葉書を添えて御返禮します。（愛知縣東春日井郡雛五村寺本光三郎方須惠子） ○愛讀諸孃の君よ、 以後宜しく御交りを願ます、御寫眞、文章、畫葉書、新聞等の交換もして下さい、 それから私に何にてゝ編物三つ以上 御送り下さる方には誠に醜いのイすが 私の寫眞と當地の新聞を添えて御返し申ます（岩代國 伊達郡半田村字玉川松山薔薇）○富山縣一女學生樣、廣渡篤子樣、先日は 御親切なる御手紙有難う 何分御住所不明で返事を贈ること出來ませぬどうか判明にお知せ下さい 尚此上も誌友の皆樣何卒御交際を（岡山縣 久米郡稻岡南村字南庄杉本駒子）○紀伊の米田時子樣 先日は御繪葉書有難たう御座いました、 其節御約束申ました 不束な寫眞燒增出來ましたが實は先日頂いた御葉書大切に 机の內に仕舞つて置ました所が幼い者共が いつの間にか持出して御住所不明になりました 誠に失禮て御座いますが今一度御住所御知らせ下さいましな。 それから 菊野百合子樣 此度發行の增刊て承ればあなた樣は縫物の巾着等色々 御持の由私そういふ事大々すきて御座いますの 誠に申兼ますが巾着などの縫方と型と出來上つた者と 御送り頂く事出來ますまいか誠に失禮ながら 次號て否やの御返事承り度く尙ほ御住所も伺ひます（山形市新築 加藤幸子）○横濱の愛讀者の方て 如何てす一つ誌友會か談話會をやろうと思ひますが贊成のお方は ありませんか（豊岡秀影生）○皆さん妾も 本誌愛讀の一人となりました 何卒繪葉書の交換と栞や寫眞の交換を願ひます（北見國 利尻郡沓形村小林末子）○皆さん御親切なお手紙下さつて 有難ういち〳〵御返事しましたが 屆きましたか外のお方も御交際願ひます（石見那賀郡濱田町石本鶴子）○おなつかしき誌友諸姉樣 妾は田舍に生れて寂くてよどうか御うつしゑ、シオリ、編物 御惠み下さい早速御禮は致します、また繪葉書交換を願ひます（岐阜縣安八郡大垣郵便局區內馬之瀨木村あさ子）○文壇愛讀者 諸孃 未だ妾と交際していない方々）へ申上ます 妾は美作といつて山又山に住んで居ます者でありますがどうか 御交際下さいまし（岡山縣久米郡弓削沼元山椿）○諸孃樣妾われ草花を栽ることが好きてすが 當地には何分種々の種子がなくて困りますから 諸孃樣方の內で何にかの種子があつたら 何卒御惠與下さい御禮としては 木兎庵秋來（妾が父）作の發句を短冊にかいて一枚さし上ますから 又それを御緣に御交際下さい（仙臺市鐵砲町百五十番地仙臺正風社內堀越こう子）○妹翠子入院中て遂私が返書を差上げましたこの後御交換して下さる方私し感じた事がありますから今迄御交際した方の外は御ことわりします（越後片貝山崎領子）○小縣郡中鹽田の馬場綾子さん同郡本原村の坂口隆子さん貴女方の御身の上は既に承りました妾も同じく歎き悲しんで居ります 何卒同郡の好みて直接の御交際を願ます 其から又本誌愛讀者の皆さんも以後無學の私ですが 御交際を願ます（長野小縣郡神科村金井みすゞ子）○妾の所へ紀念切手古切手申込者意外の多人數 實に百八十七人ありました 皆夫れ〳〵差上げました（陸奥西郡鰺ヶ澤町字漁師町三宅みれ子）○愛讀者の御諸孃樣に向

て申上升 妾は當文壇を愛讀する片田舎に住む愚な者ですが此後宜しく 御交際を願ひ升又寫眞の交換も願ひ升 (茨城縣新治郡園部村大字眞家長谷川忠雄かた仝ふこ子)

○越後國南蒲原郡加茂町及近い都會の事情を 委しく御知らせ下さいませんか 御知らせ下さつた方へは必ず御返禮は致します(陸中西磐井郡一關町佐藤いよ子)

○拙い私にわざ〳〵御交際をお求め下さる お方にいちいち御返事上げて こちらよりこそ御文通お願ひいたす筈ですけれど こゝ暫らくの間修養に急がしくてとても多勢の方にいたしかねますから 失禮ですけれど 誌上て御あいさつ申します、左に御芳名を記して 御禮のかわりといたします (重田春子)(記者曰、姓名は略す)

○大阪はるみ樣、私發成致します。 失禮ですけど私宅へ 御住所姓名御知らせ下さいな。(大阪市北區中之島二丁目田中靜子)

○皆樣私も御交際を願升御玉章か繪はがきに諸孃方の御寫眞を添へて 送り 被下いよ私の寫眞を添へて送りますから、私の處へ御手紙を願ますよ 又不如歸の新體詩が私持て居りますから望の方に差上升 (若狹國 遠敷郡雲濱村竹原岡新方渡邊聖薑)

○私はふつゝかな者ですがどうか以後よろしく 御つきあいを願ますよまた繪葉書や玉章御芳姿の 御寫眞など御送り下さいませ 私もすぐ御返事を差上ますよ (奈良縣宇野郡松山町上新島田淸子)

○長野縣の馬場あや子樣同姓同名とは 何かの御緣でせうと思ひます他の諸孃方と共に 御見捨てなく御交際下さいます樣願ひます (牛込區箪笥町 二十二番地中村五郎方馬場あや子)

○皆さん妾も愛讀者の一人になりましたから 郵書の交換願ひますそれで御互に文章の訂正も致したいですから 葉書なれば簡にて明 郵書には長くあきざる文を下さい (東京市四谷區愛住町四十八成瀨愛與女史)

○皆樣美しい繪葉書や見事なお寫眞有りがたう 御座りました丁度繪葉書が 二百四十七枚とお寫眞が二十三枚て都合二百七十枚着しました 然しそんなに不用の書物は澤山有りませんから お寫眞を送つて下さつた姉樣方とそして 右繪葉書の内最も見事なものを送つて下さつたお方と共に 七十名にお約束の本を先着順に送りました 孝女白菊の歌は都合によつて送るのを見合せましたから 左樣思召して下さい 又送りますから尙殘りの諸孃樣へ一々御返事を送るはずて有りますが何分 多數で思通りに 運べませんから繪葉書を受取らぬ方は左樣惡しからず御思召して下さい 尙又書物を受取つた人も受取らぬ方も 以後相變らず御交際を願います(豐後、艮子)

○皆樣なんの押花でもようございますからどうぞおめぐみなすつてくださいまし 御願ひよそれから繪葉書の交換もれそれから石堂丸の歌御存じの方は 御送り下さいな必ず御禮致しますよ (富山市 總曲輪四二小林よしえ子)

○皆さん私も第四號から愛讀者になりました、よろしく御交際を願ひます寫眞、お手紙繪葉書の交換を願ひます、 取り放しはし ませんから 安心して送て頂だい (大阪東區松屋町内平野町北、安藤文玉堂内ふじ子)

○諸姉樣私の手許に編物數種、シャツ、ヅボン、ひな形 數種、禮式熨斗の折方四十種あり升 御玉章に御寫眞を御送り下さる方には各一月を限り おかし申升 (伊豫溫泉道後湯之町三〇七得能湯月女)

○北海道の本郷なほへ樣へ御れがい申升 私はしなりが大すきなのですが あなた樣の御作り遊ばしたしなりもぜひ〳〵御めぐみ下さいましな 私もよくないのですがお返し申升から御承知遊ばしましたら 次號て 御返事下さいまし其折に本名は申上升 (上毛野の花)

○妾は新潟縣刈羽郡安田驛三一二番て人行く 姿も容易に見られぬ山間に生れたのですドーゾ未熟の妾にも 永く御交り下されて繪葉書や御手紙の交換して新智識を與へて下さりませ 返信は必ず澁滯しません (東京北豐島郡巢鴨村大字池袋驛村山權之亟方上野志摩子)

○妾は片田舍に住む 淺學無才の者ですが地方の諸孃樣御交際御文繪はがき交換寫眞交換 諸雜誌交換を願ひます (廣島縣 神石郡油木村大字油木高延傳八方千枝子)

○壇友諸姉樣よ妾も愛讀者の一人となりましたから御捨なく 繪葉書の交換や文通して下さい (秋田縣仙北郡 大曲町高島豐吉方村井花枝)

○誌友諸姉樣方よ妾は片山里に住む愚な者てありますが 今年より當文壇愛讀者となりましたから何卒御交際を願ます (上野 新田郡藪塚本町伏島筆子)

○親愛なる諸姉樣よ妾は親しく語ろ友もない哀れな身の上てすから どうぞ御交際を願ひます、 繪葉書や玉章を送つて下さい必ず御返事致します (大和國宇智郡 五條停車場前和田淸治郞内和田芳子)

○詩歌の交換を望む、妾年頃親しき友より 送り賜はりし詩歌は今や美はしき詩歌集として三册あり 何時も來客のお目にかけますと 大變に喜ばれますから今から廣く女子文壇の愛讀者と交換して頂いて 應接間のかざりの一つに したいと 思ひ升から 交換を望み 升 (芝區二本榎松光寺小野綠子)

○愛讀諸孃樣の内海軍の士官を兄樣にもつていらつしやる 方がお

あり遊ばすなら何卒御交際お許し遊ばして戴けませんか妾は海軍中尉の妹です（兵庫白百合子）
○妾は伊賀の山中の者ですやはり愛讀者の一人ですから末長く御交際を願ひます（伊勢宇治山田町字中之切佐八方にて平井利子）

○剽窃詩文の注意

其後新たに發見されたる剽窃詩文は左の如し

▲二卷四號の分

○上總、紅雨女史。　叙事文人賞上總千代田村岩山臺秋聲樓内紅雨女史の「春の小川」は「青年界」三卷八號の上總小川眉月君の「落花流水」と同じ「美文短文紀行文」と云ふ書にもある由。
○彦根、藤田ふく子。　抒情文秀逸彦根藤田ふく子の「歌の主」は本誌一卷七號地賞上總御園生美枝子の「唱歌の聲」と殆んど同じ「唱歌の聲」も他より剽窃せしものなりと云へば原作者は他に在るべし。
○京都、中西泯子。　圖畵賞外京都瓶村中西泯子の繪は大阪毎日新聞の挿畵を縮めたるものなり。

▲二卷三號の分

○長門、益田子規子。　圖畵賞外「花見の茶屋」長門益田子規子のは「文藝界」第一卷の挿畵にあり。
○茨城、小泉女史。　和歌八六頁下段後より二番目茨城縣小泉女史の「天地に我等二人の……」の歌は同縣土浦町小津湖舟君の作なり。

▲二卷二號の分

○陸奥、三宅嶺子。　消息文人賞陸奥三宅嶺子の「月夜友へ」の一文は「女學世界」第二卷十二號消息文天賞「月夜他郷の病院より故園の友に寄する文」を全く剽窃せしもの也。
▲伊勢、白菊女史。　消息文秀逸伊勢白菊女史の「雁のゆきかひ」は久保よりえ編文友舘發兌「瑠璃草」中の美文「胡蝶塚」の數節を拔いて剽窃したるものなり最も此文は三十六年六月發刊女學世界增刊「姫百合」一七五頁伊勢岸田鈴子として「はがき帖」と題し掲載せられたり白菊女史は是より剽窃したるか。
▲讃岐、久保あや子。　はがき文秀逸讃岐久保あや子の「冬のあかつき」は「秀才文壇」四卷三號美文天賞「破窓餘」の第三と全く同じ剽窃とす。
▲神戸、木内しげ子。　圖畵選外神戸木内しげ子の畵は京都市美術工藝學校繪畵科生徒製作「繪はがき」の半分を剽窃描寫せしものとす

▲二卷一號の分

▲長野、安坂藤子。　叙事文秀逸長野安坂藤子の「江の島の春」は田口掬汀氏著「幻影」一五五頁の「社頭の春」より剽窃せしものとす。
▲けふ子女史。　消息文地賞けふ子女史の「友の許へ」の一文は三十五年十一月「女學世界」冬木立の消息文にて地賞に擧げられたる神戸の青木京子君の文を剽窃せしものか或は同人か孰れにしても當撰無効。
▲岩手、沖舘千賀子。　圖畵選外岩手沖舘千賀子の「秋の月」は「女學世界」二卷八號「ほとゝぎす」二〇九頁の挿畵の剽窃なり。
▲暗合。　羽後菅原花枝子の俳句人賞「電燈に夜の蝶飛ぶ柳かな」の句は「文庫」より剽窃せしものなりとの注意ありしが本人の辯解に依り暗合と决す。

例に依り右剽窃詩文の注意ありし諸孃の芳名を左に列載す。

○福井、靜子○越前、喜代子○千葉、はな子○府下、礒ヶ谷紫江子○讃岐、あやめ○下總、小高勢以子○周防、楓子○越後、みゆき子○愛讀者の一人○新治女子○大阪、雲岳女史○上毛、野の花○上毛、谷の水○下總、TT生○大阪、白萩女○原雪溪○四谷、みよ子○長野、黒田直子○熊本、大友はつえ○神田、小林櫻花○愛讀女○長府、すみれ子。

▲記者まうす

▲いつもながら諸孃のお申越が非常に澤山なので先頃から紙數を増加しましたがそれでもまだ載りきりませんから「繪葉書交換」と「圖書換讀」の二欄を次號に廻しましたから惡からずお含み下さい。
▲愛讀諸孃の御寫眞は出來得る限り務めて紙上に掲載致すつもりですからどうか御遠慮なさらずに御寄送下さい。
○○
正誤　前號七十五頁、消息文陸奥しらゆき子の「かるた會に招きし友の待ちわたりても來給はれば……」の文を「人賞」とするのを落しましたからこゝに正して置きます。

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

○論文 ○抒情文 ○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以内） ○はがき文（半紙かな付廿四字四行）

○短編小説（半紙總かな付廿四字六十行内） ○新躰詩（半紙十句以内）

○和歌（半紙一首） ○圖畫（風俗景色一寸の二寸判）

○新派俳句（端書又は半紙半枚一句）

但着色無用日本紙の薄きもの

○誌友倶樂部（半紙を用ひ一行廿一字詰の割に認めらるべし）

▲各欄「題」隨意一人佳作一章宛の事

賞與品

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小説○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○和歌○俳句の當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

【投稿メ切＝毎月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし！○各種の原稿（全封）取纒郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

定價

女子文壇（毎號水彩畫繪端書寫眞口繪數葉挿入）毎月一日發行

一册（大判百二十頁以上）	前金拾錢
六册	前金五拾七錢
十二册	前金壹圓八錢
十六册（増刊ト共）	前金壹圓四拾四錢

直接申込に限り郵税全廢無料

定期増刊四回　二月五月八月十一月

注文心得

○本誌は前金の外送本不致候○領收書は一切差出さず候○御注文毎に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵券［收入印紙謝絶］代用は必ず定價の壹割増に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本仕候▲缺本にならぬ法▼……前金拂込むに限るべし

廣告料金（改正）

	特等	一等	普通
一頁	三十圓	廿五圓	廿三圓
半頁	……	十三圓	十二圓
一行	……	……	四拾錢

申込發行前十五日

【備考】特等場所は表紙二、四の面なり○壹等場所は表紙三の面、色紙刷各區別の始終の頁、本文第一頁の對面、石版と寫眞口繪の對面なり○普通場所は本社が適宜に刷込むものなり▲廣告面一行は五號活字廿四字のこと半頁は（一段）卅二行分、一頁は（二段）六十四行分也

明治三十九年三月廿九日印刷
明治三十九年四月一日發行

定價金拾錢

（二卷第五號）

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　電話（本局）六〇七番　女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿三番地　東海堂
東京市日本橋區呉服町十六番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鍋屋町九番地　良明堂



パール定價
大瓶金四拾錢
小瓶金貳拾五錢
（女子文壇の廣告により御注文の節は其旨書添へを乞ふ）

（東京秀英舍印刷）